

「……………」

「貴方と學校は違ふけれど、矢張り美術の生徒だったの、一寸御紹介申しませう。」
と、貧乏徳利でがふくと酌をして、

「吉岡展——展は展覽會の展の字よ。」

「僕は落第だ。」

と、ぐい、と硝子杯を引いたので、注ぎかけて居たのが溢れて、淋漓として滴つた。
和歌子は澄まして徳利を控へて、

「あんな處へ及第をしたがるのは女房の欲い人さ……其のかはり情婦は出来ない。」
と片手を頬杖して顔を見る。

「飲め！」と、半ば苦つて、半ば笑つた。そして手巾で膝を拭いた。

「親御と兄さんが、黙つて唯叩頭をするのよ。博士が爾時ね、可恐がる私の手を取つて、つかつかと出た。——木兎の憑ものがした啞の狂人、いきなり兩袖を羽打つて天井へ舞上りでもしようかと思つたら、立派に丁と謹んで挨拶をしました。筆を劍のやうに片膝に突立ててね。

おとなしく診察をして貰ふのよ。……明窓をあけさせて、丁寧ていねいに身體を觀て、更めて、それから瞬またまもしないで咽喉を診ました。

治る、今直ぐに治してあげます。私の言ふ通りになさい……然う云つた。」

——(博士の態度は肅然たるものであつた、)

「少し身體をあとへ引いてね、博士がね——私の聲にお續きなさい。……と云ふ。

啞は頷いたんです。

(い)と博士が呼ぶ。黙つて居る。(ろ)博士が叫ぶ。黙つて居る。(は)博士が云ふ、黙つて居る。

……………」

與四郎は聞きつゝ、ごくぐくと咽喉で云つた。

「いろはにほへとちりぬるを、一つづつ言つても聲の出なかつた其の啞がね、(わアかア)と博士が言つたと思ふと……(わーかー)……啞の咽喉から聲が出ました、私は博士を神だと思つた。拜みたく成つたんです。

も一度、博士が、(わーかー)

(わーかー)と啞が言つたと思ふと、

(和歌子さん。)

其の聲で啞が呼んだの。木兎がものを言ふと思つた——私は思はず、ぶる／＼震へた。

(和歌子さん、——貴女は私を御存じあるまい。私はよく知つて居ります……私は戀をして居ま

した。御結婚が終つたと知つて、噫萬事休す、男子世に生れて、口に戀人の名を呼べないくらゐなら、一生、末世、金輪際、聲を出す事は断じて要らん！——其の時から夢にも口を利かんです。不思議な運命は死に先だつて御主人の前に貴女の名を呼ばせました。

——博士に——

(御診療を謝します……が、貴下は敵だ、道を清めて心ばかり花を捧げたのは、貴下を迎へたのではない、奥さん——和歌子さん、もう一度貴女の名を呼ばして下さい……和歌子さん。)

(はい)とつい知らず、返事をする、颯と色を變へたと思ふと、眼を塞いだ、あれ、血が唇を舌を噛んだ。忘れもしない、冨が颯と卷落すと吹込む銀杏の葉と一所に、繪が飛んだのが、窓を舞下つたのか、大な木兎。

和歌子は、思はず、盆の銀杏の葉を取つて、唇に當てて、犇と噛む、と皓齒が鐵漿を染めたやうに見えて、其が不思議に初々しく、瞳は涼しく、頸は清らかに、心の影の塵も留めず、通ふ血汐は霞を描いて、同じ女にも又較ぶべきなき美しさであつた。

「ねえ、苦しさ、仰向けに血を噴いたのが、飛下つた木兎に颯とか、つた時、私は身體を投つけて——あ、死んぢや、不可い、冷くつて。」

其の盆の木兎の嘴に——涙の顔を振仰向く、と婀娜な微笑。

「與四公。嘴を。」

突如小僧を横抱きに抱轉がす、石頭の大な木兎、重量、十四貫三百匁。

十六

「失敬しよう。」

「おや、歸るかい。」

「勿論です。」

「何故さ。」

「それまで聞かせられて、これまで見せられりや澤山だ。苟も僕は男だ。いつかの行列の事を思へば、そんなんだと、僕は、木兎に頭を蹴つけられたと同じ事だ、馬、馬鹿にしゃがる。」

「ふん。」

と笑つて、

「妬ぐね、此の人は。おや可笑い。——男の嫉妬を妬ぐのは、婦の不品行よりか世の中のすたりものだよ……見つともないわね。」

「何うせ見つともよくはないんだ。」

「勿論、見つともよくありませんとも、髪は長いし、顔は長いし、日は短し、靴足袋は破れてるし、ね、——然うさ、また、あの木兎を擔いだればこそ不思議に色が——出来たんだわ。色と言ふものは亭主ぢやないんだよ、可かい。でも、お前さんは可愛いことを云つて。(自分は半分苦學をするので、腕はなし、働きはなし、何の手助も出来ないから、こんな事は言はれた義理ぢやない。が、心の中を察してくれたら……そりや他に、人も、男もあらうけれども、せめて、自分の目に見える處へだけは、誰も寄せないでくれる。——)と言つたね。……言ふことが氣に入つて、しをらしいから、爲なくも可い我慢をして、御覽な、まあ、此の頃の、内の體裁を——お姫様が其の日ぐらしさ。恩には被せない、私が勝手——道樂だから。串戲にも妬けた義理ぢやないぢやないか。けれども理窟は言やしない、憎くはないから。だけれども男の嫉妬は見つともないからお止しなさいなね。」

「濟まない、が、餘りだ。私は妬きません、妬きませんが、歸ります。歸つて、木兎の繪を描くんだ。」

「あ、結構。……御自分のためにも、親御、御兄弟、世の中のためにもお歸んなさる方が結構です。……ですが、いろの爲には何にもならないから。……然う思つていらつしやい。そんな掛引はね。」

「進退！進退とは何だ。」

「ぢや、眞個にお歸んなさい。が、一寸お待ちなさいよ。」

卷煙を吸着けて、

「さあ、と、くの字で持つて出す……吸口を男の唇。」

「いや、兎に角歸るから。」

和歌子は艶に莞爾して、

「ほ、、だから、露地を吸つてお出掛けなさいな。誰も留めはしないから。」

いや、然う言はれると、まさか、一本貫つて出られもせず、其處で敏夫は押立尻をして、

「飲んで行く……」とばかり、冷酒の硝子杯の殘餘と煙草をちやんぼん。吸つちや飲み吸つちや

飲む。——與四郎が居たらば其も出来まい、石頭の大木兎は、今の一件に羽を生して、露地を横

飛びに飛んだと知るべし。——

「あとは獨言よ、聞かうとも聞まいとも、煙草の間……」

和歌子は投げた手を額に當てた。

「あ、——博士が些と妬いたわね。——私は其の時、舌を食切つた啞を抱いたと思ふと、後を知

らない。母屋の座敷で氣が着いて、泣く人やら、鬱ぐ人、考へる人、俯向く人、黙つた人に送ら

れて、博士も矢張黙然で、白山様の前まで歸つた時、然うだ、ふつと氣がついて、

(あゝ、牡丹を持つて来よう。)— 手水鉢に— 木兎の畫を描く男の、鬼火が光るんですもの。

(止せ、そんなもの。)

(否、止さない。)

博士の留めたのが口惜いから、駈出して、羽織の袖に抱いて歸ると、可厭な顔をして睨んだから、もう一度拗ねた。— (私は人間の道を歸るのは可厭です……牛車が可恐いから……)

其の時は、一臺の影も見えないのに— (否、往つたものは屹と歸る……途中で逢着すに違ひないの。)— 然う云つたのよ。博士がね、

(何處を歩行く。)

(此處を歩行くわ。)

でね、駒下駄を脱ぐと足袋跣足で、石垣から、袴も取らないで小川へ入つた。早い處を瀧を上るやうな勢で澄まして涉ると、博士の俵が矢のやうに飛んだんです。それを見ながら、水が深く成つて倒れました。

一晚、伊草村の御厄介。あくる日、歸らないと云ふのを歸さうとするし、送らうと云ふ展さんの葬式を送らせないから、途中まで、棺桶と並んで出た、私は駕籠で。大勢に取巻かれて、路を

分れて川越へ歸つたんです—

御離縁申すまでもござんせん。自分の家からも御勘當、と云ふのがね、義理ある兄の代に成つ

て居ましたから、義絶と言ふの。

些と擦つたいでせうけれど、一寸、惚れなほしては不可い事よ、此でも伯爵の御落胤なの。」

と云つた— 不思議に此の女、品が備はる。

「母さんは新橋の藝妓でね、止せば可いのに、若いから何にも知らずに、其の伯爵の世話に成つて、私が出来たとお思ひなさい。まだお腹に居た時よ。— ぼつと成りかなんかで、もう四月と

か何とか殿様に聞えあげる、と何うです……伯爵が後とも言はず、其の晩、内證で待合の女房を呼んで、(彼女には内々で、客帳を開けて見せる。)— と言つたつさ、宿つた月日を當らうと云ふん

だわ。外の客と引較べて、伯爵様お手づから御帳合。赤子の出入帳は地獄にも沙汰を聞かない。女將も江戸兒だから癩に障らして、密と筒抜けにしたんでせう。母さんが、蒼く成つて、其つ切

— 私を産んでからも世話に成らずに、意地を立通したけれど、苦勞をしぬいたもんだから、二

十七の若死に、臨終に氣が折れて、九歳に成る時、お邸の言條通り私を引取らせたつて次第なんですからね。急拵への御姫様、面倒くさい— 母さんが中程住替へた柳橋に居た時が忘れられないで、幾度駈出さうとしたか知れないの、窮屈でね。何うせ、待合の帳面に紅で印のついたお姫

様なんだもの。

——露西亞は、のん氣だった、生命は危かつたけれどもさ——

でもね、はじめ満洲へ行くのに、博多から汽船へ通ふ端艇が出ると、麗な小春日に、光る魚が
晃々艇を泳いだの。私、欲くつて成らないんでせう。「(タビ)さへありや。」然う言つた人があ
る。(二つあるから、澤山とつて。)と私、兩方の足袋を脱いで笑はれたわ。後で分ると對州の人
だつたの、對馬ぢや(タモ)の事を(タビ)と言ふらしいわね。……
一寸、お姫様でせう。たゞし足袋だけに下つてゐる。」

「和歌子さん。」

「はあ……おや、更つて。」

「私は、貴女にや、まるで、今の其のタビですなあ。」

「酷く御感心遊ばしましたね。」

「考へなきやあ成らないんだ。」

「惚れてると云ふのでせう、そんな、煩かしい、謎見たいなことを言はないで、足駄穿いて首つ
たけと云ふものよ。」

「否、洒落ぢやない。」

「眞面目だね。酒がさめて……あ、薄ら寒い、敏さん、暖まらうか。」

「いや、歸ります。歸つて木兎の繪を描きます。」

「然う、更めて、身の上話に、同情とかツてのをしてさ、奮發して、私を何うにかして下さらう
と云ふのならお止しなさいよ。何うせ初から貴方は玩弄なんですもの。怒つちや不可い、珊瑚も
金剛石も、言つて見れば玩弄品だもの。木兎籠を被つたつて、それが、私に……立派な彫刻か、
繪に見えれば、貴方は貴いものだわ。それとも、口惜しかつたり、妬けたりするのならお止しな
さい。私にや、意地を張ると後悔するから。」

「何を後悔。」

「未練が出て、暗夜に此の邊をうろついて、私が、あの、白い寢巻で、裙と手に紅い火のちらつ
く處を、見ようものなら、……後悔するから……さ。」

敏は、蒼く成つて、其の將に然るべきを豫期しつゝ、然も如何ともする能はざる苦悶の色を漲
らしたが、さすがは男だ、衝と立つた。

「失敬。」

「ぢやあ、然やうなら。思はせぶりに送りませう、兩花道の出と云ふ處……」
で、格子を出る男の、あとから、縁を下りて木戸へ出た。其の時、何故か、床にあつた、あの

楊弓を手に取った。

庭の木戸へ、此の姿が片扉で立つた時——（花政の一捻りに今は鋒先を納めたが、店だてを強請して斜めにはつた）——貸家札も、かしくと讀める風情あり。

白衣に灯す、蠟燭の、白晝ちらめく緋縮緬、白晝ながら俯立つて、敏の足が羽目について淀んだ時、恰も町通りを縦に打つて通る××師團の騎兵少尉の、立派に盛装したのがあつた。駒は山の如く露地を壓した。的は大い、射ごろは可。

和歌子が軽く曳いて弗つと切る、と白羽が發と馬を射た。唯棹立ちに成つて、嘶く聲より、拍車の音が鳴響いて、見事に乗鎮めて、翻然と下りた。咄嗟に、革手綱を高く取つて、露地を見込んだ、風采を見よ。

「誰だ。」

「何をする。」

敏が、思はず我事のやうに言つた。

楊弓を小脇にして、

「羊のかはりに、七面鳥を食べるの……クリスマスが、近いから。」

翌日は、早や花政の店の中へ、劍を鳴らして其の少尉が直立つた。嬉しさうに花を見ながら、

「牡丹を——」

十七

「お河童。」

「うゝ、うゝ。」

「眞暗な路だね。」

「うゝ。」

「お前は私を引張つて、どんな處へ、何處へ連れて行くの。手水鉢に牡丹の花の活つてる處かい。」

「うゝ、うゝ。」

「ぢやないの、然うね、何うせ、そんな心意氣は知らないから。屹と何だらう、昔噺のやうに、

寶の瓶の埋つてる處だらう。」

「うゝ。」

「おや、嬉しいね。」

と微笑んだが、雀盲の臉は寂しかった。……和歌子は——（其れより後、幾度も幾度も、其の白衣に灯した姿を縁に露はして、暗路をあこがる、敏夫を知りつゝ、堅く、木戸を鎖し鎖しする

「あゝ。」
和歌子は振拂ひもしないで、

「もう、やがて見えるぞよ。」
と、俯向いて白い手で探ぐる、トにちやりと滑らかして、侏儒が其の手を取る。

「察しておくれ、だらしは無いよ。」

「うゝッ、見えませぬか。」

「何處だか、教へておくれ。……口惜しいが、見えないから。」

「うゝ。」

「お河童。」

和歌子は、爪立つて襟を留めた。

樹の匂が芬とした。

と思ふと、身體が浮かないで、足が雲ならぬ地を踏みつけた。然も段々に低く降りる。泥の香、

「あら、私は空を飛んでるの。」

「いんま、川を一ツ渡つたぢや。」

「牛が曳く車が通りはしないの……汽車かね、水の音なの。」

また、もの音に打傾いて、

「どつちだか分らない、お前が乗つてるのぢやないか。私が乗つてるのか知ら……」

「うゝ、うゝ。」

大な犬が、ひた／＼と裾に摺れつゝ通るやうである。

「頓馬が、一所なの。」

裳を切る。

——袖を任せて行くのである。唯、霜のしん／＼と降りる夜の、風も無いのに、前途が颯々と

——慙くまでの婦にも——恰も其の病にかゝつた棄身の出来心で、ふと曼珠沙華を折つた雑司ヶ谷

の途中から連戻つた畸形兒であつたから。——

うちに、彼が発狂して自殺した事を聞いて。——したゝかに酒を煽つた酔心地を、頻に侏儒に

袖を取つて曳かれて、庭の木戸から、物置の前を、半ば夢心地で町へ出た事を覚えて居る……

が、方角も何も分らぬ。唯侏儒の導くまゝに袖をまかせて行くのである。現ながら、此の怪

面異體のもの、我が身を載せて趨く前途には、いづれ奇蹟があらうと思つた。あはれむべきは、

そして其の期する處は、牡丹の花の一本より、戯に言つた寶の瓶より、實は一條の光であつた——

——慙くまでの婦にも——恰も其の病にかゝつた棄身の出来心で、ふと曼珠沙華を折つた雑司ヶ谷

「それ、星が見える。」

はツと思ふと、晁々と霜夜に冴えた星の數。が、其の星は、高く蜘蛛の巢の如き樹の(枝と思ふのが)土を抽いたあらはな根に散る……横穴を穿つた深き地の底に居たのである。

「彼に燈がある哩。」

大なる樹の切株を卓子の如く一段高く据ゑたのに、かんでらめいた燈火が點れて、正面の土饅頭を、椅子にして、ぬい、と、向う面に腰を掛けたものを何とか見る、小牛の如き黒犬である、トーマスの頓馬である。這奴、のつぼ面の垂耳の頭に、紅い土耳古形の帽子を戴き、空嘯きつ、チン／＼の手が、此方を大風に靡いて、

「わあ、わあ、わあ、わあ。」

和歌子は夢だと思つた。思ひながら、然も氣丈であつた。侏儒の且つ引くまゝに、つか／＼と燈の前に進むと、

「ごろ、ごろ、ごろ、にい。」と鳴いて、椅子の横に腰を掛けた、古猫が一疋居る……見覚えがある、あの、錦木の宿のあたりを押歩行いて、屋根中を汚す風來の、男猫で、(——官吏の家に飼つた、駒と云ふに優げな雌猫を狙つて、嫌はれ通しの腹癩に、其が産んだ小猫とともに、對手の猫を食殺した、——) 顛破れの三毛が、釜底帽子の青いのを被つて、爛々たる眼を光らし、和歌子

を脱迎へて呻ると齊しく、鋭き爪で、腮の髻を搔捻つて、片手で卓子の上に置いた一冊の帳簿を示した。

和歌子は尙ほ信じた。恚る思ひに因つて雀盲が癒えるのであらう——指さるゝまゝに其の帳の面を見た。「……」「……」「……」花政の娘お光の名、眞先に記したり、嫁のお久、官吏の令嬢、銀行員の若い妻、和歌子が名を知つた居まはりの女らしい女は、一人もつけ落がない。槇原範子。——子爵の令嬢である。其の小間使が三人。湯屋の女房、花政の表町に錢湯があつて、女房が美

婦なので、其もあつた。——

湯屋の女房。

名の上に、赤と、黒、汚れた黄で、不思議な、意味を爲さない點を幾つも打つてある。讀んで和歌子が、自分の姓の錦木に瞳を据ゑた時、トコトン、トコトン、トコトン、と此奴は侏儒だから土饅頭の椅子へ、ひよい、と立つて、切株のまはりを敲いて、頸に巻いた、黄色な手巾をひらめかしつ、刎ねて居たのが、赤爛の手の、蚯蚓の如き指で、和歌子の名に指して、

「うゝ、今夜は、汝の番と思へ。」

「あれ。」

和歌子は、うまれて以來、嘗て知らない悲鳴を上げて土に躓き、よろめきながら、穴藏の段に

飛つくと、上から、眞黒な面で、倒に覗いた、大牛が一頭、モウ、……ドン、と寝て、腹を以て蓋に蔽ふ。

「母さん、母さん。」

思はず、亡き母に救を呼んで、中空に縋る手は、左右に取つて開かれて、打込んだ枕に、其の兩の脛も縛められた。

「堪忍しておくれ、堪忍して——」

「おのれ覺えとるか。」と云ふく、穴には彼等三頭ではない、鼯も鼠もどろく、と満充ちた片隅から、這出したのは按摩の色男久松市である。

「忘れまい、忘れまい。」

いつか、挫ぎ折つた二本の指で、女の兩の頬を交るく、ふたく、と嘲笑つて引弾かれた時は、其の冷さ、其の不気味さ、其の可忌さが骨髓に通つて、亂れた黒髪が皆動いた。

懐に手を掛けようとすると、侏儒が横合から躍上つて、按摩の頭を蹴落した。

「退れ、下郎、汝には食のこしを授けるのぢや。」

和歌子は帯を奪はれながら、伊草なる吉岡展の最期を思つた。彼は葬られたのである。我が亡骸の、あとの屈辱と汚濁を察すれば、舌を嚙む事さへ出来ぬ。瞳は破れて曼珠沙華の幻の如く颯

と血汐が眈を走つた。

時である。穴の上に、雷の如き音がした。づん、と大牛の轉んだ響。唯見ると、穴を飛下り状の、萌黄の袴、黒小袖、手に三日月の輝くは、晁乎と振閃めかした小太刀である。

が、忽ち眩んだ、和歌子の目には見えすして、

「うゝッ。」

眞先の、號苦の聲は侏儒。續いて、叫ぶ聲、呻吟く聲、駈廻る音、倒る響。

「や、や。」爽に清い矢聲の下に、颯々と鳴るは太刀風である。

犬が潜んで来て、牙が、和歌子の身に觸れた。

「あッ。」

「畜生！推參な。」

ハツと唯一打、後は死の如き、墓の如き、寂寞であつた。

抱起されて、縋つた時、和歌子は見えない目に、男の髪の美しさ、と袖の薫を知つた。手を取られて、萎々と成つて、肩と思ふに顔を伏せつ、嬉しさにすゝり泣いた。

「此處まで。……最う可い。」

と、手を放すと、力なく挫と成りつ、袖に縋つて、

「誰方、誰方。」
「御隣家の……霧之助。」

十八

和歌子は三の橋邊の何とか云ふ巨利の鐘撞堂と、一株の大槐との間に、死んだもののやうに成つて倒れて居たのを、寺男に呼活されて、そして其の介抱で家に歸つた。歸るにも歩行けなかつた、左の太脛に鎌に掛けられた如き痕がある。

境の自殺したのを聞いた晩、三升有餘——ウオトカ仕入れの酒量は強い——酒を煽つて、ぶらぶらと家を出て、何處を歩行いたのか知らず、倒れて怪我をしたのであらう。……そして地底は夢だと言ふ。が、不思議な事には、其ツ切、侏儒の行方が知れない。それから、頓馬は事實狂犬として警察に引上げられた。

どつと寝た、和歌子は起てなかつた。が、雀盲は癒えた。……花政の隠居が、財布を頸へ掛けて出張つて、醫師よ、藥よ、と手當をしたのである。

「霧之助様、霧之助様。」
熱に浮かされて、もの狂はしく呼続ける。

やゝ、入心地が着いてから、花政が仔細を聞くと——生命に掛けても、横原の人形が見たい、と言ふ。和歌子は、はじめて戀を知つた。

世故を経た爺様が、よく情愛を知つて、大く領いて、死んだ姉娘に婿を取るのだと騒いで、其の人形を、と種々手を廻した。越中屋長助にも下ぐべからざるに頭を撫でて見たが、これは出来さうな事ではない。

「霧之助様、霧之助様。」

正氣に成つても、讒言に言續けた。

「お爺さん、大變だ。」

一夜、與四郎が目の色を變へて飛んで歸つた。

「和歌子さんが、白装束で、杖に縋つて、横原の邸へ行つて、皆に酷いめに逢つて居ます。……」
爾時、爺さん、節季近の忙いのに、花鋏を投出して、

「さあ、野郎ども、霞町は火事だと思へ、續いて来い。花屋政右衛門、娘の追善に暴れるんだ。」
と、手錠を杖に、ひよこくして、

「與四公、こんな時の用に立つ、自轉車で合乗しろい！……」
爺様が駈着けた時、和歌子を、古井戸の板に眞俯向に倒してあつた。

あの、奥方は、枇杷の根に床几に掛つて、家扶、家従、執事などが取巻いて、書生と車夫が釣瓶を倒にして、和歌子に水を浴びせて居た處である。

花政が手鍵を握つた。

「俺の娘だ、此奴等。」

誰の娘でも構はぬ。……見せる事の成らないと云ふ當御殿の霧之助殿を斷つて拜みたいと申す。御前は旅行中。奥方、應接間でお逢ひなされて、此の上は、當方の思ふ存分に成るか。汚らはしい身體を清めるが可いか、と訊く、と望む處だと云ふから、慥く計ふのである——念のため當人に聞けとの事である。

和歌子が突伏せられ、おしひらめられながら、蒼白い顔に莞爾して、

「お爺さん堪忍して、思ふやうにさして下さい。」

奥方がしたり顔して、

「それ、背中ばかりでは不可ません。腹の方もお洗ひ。」

「え、衣服は汚え。」

と書生が黒髪を搔擱んで提げるやうに引起したので、痛みに雪の足をかめた、宙に釣られたやうである。

「何でもない、霧之助様に逢ふのには……」

花政の以前に、既に少尉が居て、渠さへ如何とも、詮術を知らないのであつた。

其のまゝ、仰向けにまた引倒して、雪にもみぢを散らす如く、井戸の水を浴びせたのである。みどりのしたゝる黒髪は、ぬれ絡はつて、脛もあらはな、裳の其より長かつた。

「何うぞ、霧之助様に……」

「いゝえ、まだ此の上に、家風に従はねば不可ません。子爵家は儉約を主とします。誰か、糠味噌を掬つて来て、此の女に食べさせなさい。入ものは、犬のが宜い。」

花政は總入齒を嚙碎いた。が、少尉があつて劍を抜かぬものを如何する。

「此も家風です。」

鮑貝に糠味噌を、車夫の手から、頬のあたりへ突着けられて、和歌子が、熟と見る頬を、足を舉げて、足袋の尖で、子爵夫人が、ぐい、と擡げた。

花政が少尉の手を抑へて居た。

「いろと世帯を持つものには、お香物が大事ですとさ、あゝ、おいしい！」

子爵夫人が、塵を拂つた。

「明日來なさい。」

屹きつと和歌子わかこが顔かほを上げて、

「それも御家風ごかふうかえ。」

「家風かふうです。」

「何と、」

と、すつくり立上たちあつた。が、病後びょうごのつかれと、足の痛いたみに、よろめいて倒たふれた時ときである。

「此處こゝだ、旦那だんな、お抜きなせえ。」

「可よし。」

長劍ちやうけんの鞘さやを拂はつて、きらりと翳かげした、師團しだん屈指くつしの腕白わんぱく大將たいしやう。

「松平龍介まつだいらりゆうすけ、さあ、撫切なでぎりだぞ。」

土足どそくで御殿ごてんへ踏込ふみこんで、霧之助きりのすけを抱いだいて、奪うばつて出た。自分じぶんの女をんなの戀人こひびとを、男をとこの意氣いきは潔いさぎよや。

其その黒小袖くろこそでの前髪まへがみを、胸むねにひしと緊しめた時とき、あはれ見みよ、人々ひとびとよ、和歌子わかこの姿すがた、膚はだも、衣きぬも、

たゞ寒月かんげつの光ひかりであつた。

玉たまの指ゆびが觸さると鞘走さやばしる、黄金こがねづくりの太刀たちを逆手さかてに、氷こほりの中なかなる火ひの如ごとく、乳ちを薄紅うすくれなるに波打なみうつ

て、戀こひに燃もえつ、牡丹ぼたんの花片はなびら散ちるが如ごとき其その心臓しんざうの只中ただなかを。

峰茶屋心中

「山のあの一軒茶屋の屏風の裡に、私の生命、私の魂、私の戀が入つて隠れて居たのです、と申して可いのでございませう。」

此の話をした、松山樫吉は年紀三十一で、鐵道管理局の局員である。

神戸の驛に任に就いて間もなかつた……數へて一昨々年、大正三年四月二十一日、此の日、思ひも懸けず午後から摩耶嵐の凄い暴風雨のあつた事は、今も土地の人々は覚えて居よう。——朝は麗かな天氣で、宵大師と稱へる、あくる二十二日が弘法大師の緣日に當る——前日、丁度日曜であつた。

樫吉は、當日機會を得て、武庫郡摩耶山の夫人堂に詣でた。……苟且の登山ながら、それが、積年の希望であつた宿願を果すのであるから、唯心ばかりと雖も、精進潔齋をした、決して浮いた遊山ではなかつたのである。

花曇りもせず、春闌に、朝は輝いた。が、唯軽い、根の無い風が、何となく、ものを動かす

やうに吹いて居た。それが、やがて震動する大風大雨の前驅であつた。

支度して下宿を出て、いで、摩耶山の麓に着いたまでは、風や、吹添ひたるのみ。晩春には珍しいまで空の晴渡つたのが、いざ／＼昇を仰ぐや、頂は翠の中の遅櫻、はや見參らす姿の峰に朦朧たる峰が重り、陰氣な山の影が添ひ、峰に峰、山に山が重つて、譬へば中空の龍宮を海坊主の遮るが如く見えたのは、怪しき雲の舉動である。

日影は次第に……次第に……それが、見る／＼うちに、忽ち足許まで黒く成つた。さしかつて、此の邊は樹立もないのに、枝葉に包まれたやうな暗さである。

暫時、風死し、寂として、まだ一粒ほつりとも來ぬ。

雖然雨の如く繁く、風の如く慌たゞしかつたのは、峰よりして、頂よりして捲落す、下山の衆の足取であつた。

振も、姿も、男、女、老たる少き、褻を引上げ、手に木履、とぼけて羽織を裏返しなどして。

……日傘を擔いだ商人も、賣ものの蝶の玩弄を背負つたのも、其の中を遁げるが如し。峰をばさして行くものは、時に、唯一人、樫吉影を伴ひぬ。

おもしろいぞえ、京へ參る道は、

上る衆もある、下向もある……

彼の故郷にて、これは信徒が本願寺へ詣つる道中の小唄である。聞いた小唄は、松並木を、驛路を、絡繹とした上下の衆を長閑に楽しく思はせる。こゝに見るのは慌たゞしさと、氣立たましさと、憂慮しさと、そして物凄しい雲であつた。

誰も、しかし老婆心があつて、彼の登攀を留むるものとは一人もなかつた。柄にもこそよれ、電信工夫が綱線を傳はつて煙突の上へ飛ぶのを見て、やれ少いもの危い、と喚く爺どの婆様はな

い。
彼は年紀頃といひ、支度といひ、登山をするには、見た目も屈竟な壯年で、山から逆落しに襲ひかゝる暴風雨に追はれて遁げ下るものために、一騎、防矢射に取つて返す……

檜吉は意氣が昂つた。

「槍も降れ、電も来い、俺は芋の葉でないから裂けぬ。」

實際、尊く、美しき摩耶山の貴女に、我が年三十にして、はじめて謁見をするのに、鶯の聲、蝴蝶の風、小鼓らしい瀧の音、それは餘りに娑婆過ぎる。阿修羅が障礙の風太鼓、海坊主が篠つく雨の槍襖。

人は戀しさも、可懐しさも、慕しさも、最愛さも、生命を掛くるは幸福である。

此の勇氣を颯爽として相迎へて、凜然として鳴つたのは、切利天上寺の雲、霧の途半なる處の、

名も不動瀧と云ふのであつた。

可、此處へ來ると、既に下界に掃去つたやうに、垢ほどの人の形も見えず。一天恰も墨を流して、白き瀧壺を馳す矢の流れは、やがて廻らむする大濁流の前兆として蒼澄むこと稻妻を湛へたる如く、そして漆の如き巖を碎いて青い飛沫が炎を灌いだ。

一一

坂は、斯の不動瀧が境と成つて、——それまでは左右の崖に目立つほどの松一樹もなかつたのが、忽ち一徑の曲磬、屈折崢嶸として鬱樹密林の下を行く——俗に七曲と言ふ——樹は天を摩す大木の杉と、それから楊梅の常盤の暗闇の繁茂である。樹の根と石と、礫礫磊々として嶮しく鋭い。

檜吉の眉は暗く秀でた。

やがて、第一陣の摩耶山嵐の、密林の梢を驅けて天狗落しに哄と通つた……と思つたのは、一呼吸、枝葉の繁りに、烈しい雨を支へたので。とする間もなく大粒がばら／＼と落ちて來た。途端に颯と一颯、石を捲いて轟と來て、砂を揚げて赤く見えた。風は虚空を渡るのではなく、大地を揺がして飛ぶのである。

雨が眞白に灌ぐと、風は黒く成つた。少時こそあれ、雨の色も亦黒い。

彼は洋杖をカラリと棄てて、唯しかと腕を組んで肩を聳して衝と行く。

疾き風は方向を定めぬ。山に當り、巖を衝き、樹の根に激して、雨は急流の落つるが如く、峰

から灌ぎ、麓からほとぼしり、前に渦巻き後に流る。

時に——翻る木の葉を透いて、薄い金色の雲の、むら／＼と顯れたのは、あの、夢のやうな白味に黄を帯びた楊梅の花の亂咲であつた。

ト、其の金色の雲に色を交へて、ちら／＼と沖の船篝、燃えつゝ、瞳を遮るのは、鬱林に咲交る、山櫻、遅櫻の、葉ながら小さき鞠にして、雨に紅を、ぼつと染めて、風に浸んで散るのである。

咲亂れ、散交る此の中を、人の行くのは、森に描ける、瑰麗なる獸の毛である、——見よ、黄

金の毛の波に紅の渦を散らさずや。それは文珠師利のめしたまふ偉なる金毛の老獅子の黒雲を捲いて牡丹花に踊り狂ふに異ならず、行く道は、石を刻んだ獸の背なのである。人は騎して行く想ひがある。

「南無、摩耶夫人。」

彼は可恐く凄じとよりは、一種言ふべからざる莊嚴の氣に打たれた。

「摩耶夫人様。」

合掌稽首して進めば、呀、獅子が狂ふ、乗つたる路が揺れ踊る……楊梅は黄に翻り、櫻は紅に飛ぶ。

「あ！」

逆筋斗に振落されじ、と一秒時、杉の幹に腕を纏つて、巖角を踏んで、群る霧、前途の雲を、風に透かした時であつた。

胸つくばかり急昇りな上の坂から、吹落さるゝ風情して、翻々と藤色の袖を放ち、する／＼と

藍の裳を絞つて、鶴の頸の、白脛宙に、衝と下りたのは島田鬘の髪艶かな若い女。

思掛けず、其處に彼あるに、ハツと憚つた氣色で、あはひ僅に六尺のみ——偶と停まつて、屹

と視た。鼻筋の通つた、眉の優しい、雪のやうに色の白い、燃ゆるが如き緋の唇。

——東京に育つて以來、月を隔て、目を隔て、海を隔て、星を隔て、さりとは世をば隔てた

やうな、と夢の間も、櫻吉が十有餘年忘れぬ面影。

唯、瞳を見合つた時、其の引緊つた眉と、細りした頬と、口許と、衣紋と、いづれも凜として

侵し難き品位があつた。

婦人は、つツと、背後向く、と其まで胸に兩手で抱いた、菅の笠を横に取つて、人か、風か、

遮る如く片頬に蔽へば、小笠の一端、縦に黄楊の櫛の趣して、やゝ、打傾く身動きに、吹きなぐ

る風は黒漆を溶いて流すが如く、島田を崩して、元結切れ、さつと背に捌いたのが、あれ白い笈摺に書いた文字をスツと隠す。浅葱の紐が、其黒髪に照映えつゝ、藤紫の手首に落ちた。手甲は、掛けたが脚絆をせず、薄花色の褌取りして、素足の雪に草鞋穿。卯の花亂る、褌ながら、鼓草花の艶、莖の薫、染めた蹴出しの友染の濡れまつはつた色を湛へ、春の泉に浴して、帯の霞を曳いて見え、氣高い中に艶なのが、重いほどの露なれば、絡へる脛は白く透いても、風の暴威に裳は亂れず。帯に預けた柄杓とおなじ、凜と立つた背姿で、舊の山路へ静々、……と返る、と見る間に、霧が、靄が、むら／＼と影を消した。

橙吉は夢の如くあとを追つた。

三

其の夢に流があつて、京丸の牡丹の花一輪、見えつ隠れつ、逆に瀬を上るのを、現に追つて、雨と風の中を潜つて行くと、花は瀧に柵んで、巖に立つたと思ふのが、松の下なる一軒家。唯、其の門に鮮麗に立停まつた、と見たのが、夢の覺醒めいて、風の目つぶしに、瞳の暗く成るかと、フツと又見失つた。

飛着くと、松は龍燈の傳説でもありさうな老樹である。枝の下に、軒は傾き、廂は破れた一軒

茶屋。

風激しく、雲低く、篠を束ねる雨なれば、入口の土間の如き、日中と云ふのに、薄暗いよりは眞暗で、凄じい事には、雨と風とに殆ど叩きつけられたやうに、其處になぐれ込んだ時、板戸の葎と鎖して、唯一枚入口だけ穴を開けた——戸外の松の根を見れば、腰掛の床几が二脚、どしや降の中に、顛覆した船の如く、あはれに沈みさうな底を仰向け、傍に築いた土竈の口は、達磨が腹を切つた體に、ドツ／＼泥水を噴いて居る。

妹がため貝を拾ふと茅渚の海に、

濡れにし袖はほせど乾かず。

あはれ、日和だつたら、其の貝寄の風そよ／＼と、茅渚の浦に寄る波を、松の霞に引寄せて、淡路島山櫻貝、紀伊の岬の板屋貝、攝河泉の山と水と、紫の衣、青い帯、宛然美女の姿にして、手に取るやうに緋の毛氈で視られよう——山櫻、八重、遅櫻も、樹の間、谷間に咲残る、其の紅の唇は、鳥の翼を借りないで、こゝに憩ふものに囁くだらう。

土竈は茶の煙、萌黄の草の香を籠めて、鶯の翠の影を、長閑な軒に映すであらう。……

……處ぢやない！穴めく土間へ、全然人間の雫に成つて降込んだも同じであつた。

「あゝ、何うも。」

耳から頬へ垂れる大粒を掌で拂ひながら、鳥打帽をびちやりと脱いで、扱くと張合の無さ、氣の抜けた葛蕪で、ぐしやりと成る。寒い顔して兩手で絞れば、薄く光るばかり雫が垂る。

「松の樹は澄まして濡れてる……枝を伸ばして。」

樫吉はふと然う思ひながら、雨に降りすくめられた兩の手を、肩を開いて伸ばして見た。――屋根の下へ入つたのに、何故か、戸の外の老松の大樹を思つた――蓑を着た天女が雨宿りでもするやうに。――いやしかし床几が泳いで、土竈がぶくぶく遣つてる……

「何うも、何うも實に。」

心の闇を手探りに、自惚れも大概な、一足さきへ入つたと思ふ巡禮が、此の獨言に聲でも掛けようか、と一つはそれで口へ出して呟いた。が、氣勢もせぬ。

また、空屋ではあるまいのに、誰一人、うゝとも、すうとも、聲あつて、彼を迎へた者が無い。「いや、崖の横穴へ入りはしないか。」

屋根の上に、其の松の樹を思へば、差伸びた枝の廂を蔽ふのが知れるにつけて、軒は離れ、壁は落ちて雨も風も遮るもの無しに、松の姿が歴々と目に映つて、此の暗いのも、唯其の累り茂つた葉の陰であるやうに思はるゝに連れて、……却つて、はじめて土間に薄明がさして、やがて、框も、爐も、赤錆の茶釜、古壘、破襖も、風に動きつゝ、瞳に入る。

こんな時、焚火が燃えて居たら嘸ど頼母しからうのに、爐の櫓は下伏せで、火の氣もあらず。……煤竹に掛けた大鍋から、微臭い煙が迷ひ出る。自在鍵の鯉たるや、鯉よりも鯰、鯰よりは山椒魚、否、蜥蜴だ、……厭味に反つて腹を見せる、其のぎよろんとした目と眼を見合つた脱競。默然たる親仁一人、櫓前の横座と云ふのに、どんつくと袖なし半纏で畏つた。が、膝小僧が二つ出て炭團が化けたやうで、顔まで黒い。……客を目の前に突立たせて、呔とも言はず、あけらかんと瞻めた鯉、鯰、山椒魚、待て蜥蜴が途方もない暴風雨のはずみに龍に化けて天上はしよまいかな、と雨風に呆れた顔色。

四

「あゝ、驚いた。」

樫吉は身體を落とすやうに、どかと框に腰を掛けた。古池へ尻持を突いたと思つた。洋袴の裾はびつちより也。

四邊を向し、

「おや、」

氣不精な親仁の面に、客の方から會釋する。

「御免なさいよ。……茶を一つくれませんか。」
親仁は知らん顔する。

此の茶店は三間あつた。——座敷とも言はば言へよう一室別に——浅間な暗い、納戸と思ふ處に、災も三年と云ふ、破れた穴が明取に成りさうな二枚折の枕屏風に。

（——「此の屏風の裡の事です——」……榎吉は話を續けた——）

さて、其の屏風の前に、桃割は嬉しいが、風鳥が澁柿を啣へたやうな土器色の切を乗せた横くづれの蓬々髪、目の釣上つた、眉の薄い、鯨のやうに口の大きい、十四五の小娘の、坐りもやらず袖口に手をすくめたのが立つて居り。額越しに、上目づかひ、じろくくと我が榎吉を見たのが、薇仕掛で突出す如く片足を縮めて固く成つたなりで、ちよろりくと寄つて来て、五郎八茶碗へ茶を汲んで盆に載せて突出した。南洋あたりの土人が椰子の樹の剥板へ、まるめろを装つた體。

「へい。」

「有難う。」

小娘は後びつしやり、舊の二枚折の前へ引込んで、又手をすくめて額越の上目づかひ。……此の目の底光りして見えたのは、家の内が、や、馴れても尙ほ逢魔が時ほど暗いからであらう。霧は黒煙の如く戸を蔽うて、雨は車軸を流して居る。

一口飲むと、ぬるりと舌の尖を舐めて、生暖かいの何のでない。

榎吉は白濁腰に似た澁茶碗を、不氣味に下に差置いて、

「つかん事を聞くがね。」

親仁は黙つて居る。

「小父さん。」

ものを言はない。

「私と一寸一足違ひぐらゐるに、誰か此の家へ入つたものは無かつたかい。」

榎吉は、これを言ふさへ、胸が轟いたのであるものを、吃驚は自在の蜥蜴が、此のトタンに大口を開けたと見た……親仁の鼻の皺、ぶるくと動いて、

「あ、あ、あ、あ、」と黄色な指で唇を突指した。

あ、啞なのである。

「女中。」

「へい。」

「お前は知らないかい。」

「知らん。」

「否、確に來た人があるんだがな、有るだらう。」

「急に、どえらうお天氣が變つて來て、可恐い黒雲に成つたさけ、御參詣の衆は急いでなあ、なあ、なあ、先刻な、お山をお下りや。疾うにからな、もうなあ、上りや云うたら誰も、一人もない。あんた唯だ一人ですがな。」

「そりや知つて居るんだよ。私だつて。……又それだけに、其の人が此家へ入つたのを見違へやせんのだが……」

言ひつゝ、彼は怪しき鷲の兩の翼を擴げたやうな、美女を隠せば權威ある其の古屏風を瞻めたのである。

小娘は出額で、又上目で、

「どんな人ですな、なあ、なあ。」

「巡禮の、」

「へい、」

「それは美しい、綺麗な人だ。」

櫻吉は何しに來た、幼き時みまかりし母君の可懐さに、もの心覺えてより、面影を偲びつゝ、あけくれ思ひあこがれた、十年、二十年の機會を待ち得て、今月今日、此の摩耶山に詣でしなら

すや。

峰は近し佛母山切利天上寺、雲紫の御堂には摩耶とて貴婦人ましくて、眞晝の月の影は映

さねど、天地晦冥なる暴風雨の中にも、端正、明麗、白晝の御姿、玲瓏とおはします。剩へ、いま階の下である。然矣、階の下である。石段の数は百を積んで、尙ほ七十八階を數ふるとも御裳の雲に近い、此の一軒茶屋は、恰も山門の前なる大松の下であるのに——巡禮だの、綺麗なだのと、罰當りな、女なんどを搜して可いのか。

——櫻吉は胸を打つて、更めてまた話した——

五

「たかが土方が官帽を被かたと云ふだけの、鐵道院の小官吏、まだ三十ぐらゐるで、生立を申すやうでお恥かしいんです。けれども、其でない、夫人堂下、山門前の山茶屋まで、大風大雨の瀧を潛つて追繼つた、美しい巡禮の、何故、十年以來寐た間も忘れない婦人だと云ふ次第がお分りになりますまいから……」

櫻吉は爾時、恚う云つて語續いだ。

二十の頃、本郷邊の一家に食客しながら、夜學に鐵道學校に通つて居た時分の事であると云ふ。

「夏のはじめの事です。まだ暮切りませんが、燈の入った、あの、混雑した下谷の御徒町を佐竹原の方へ茫乎一人で歩行して居ました。——差當つて、別に此れと云ふ心配も屈託もあつたのぢやありませんが、小芝居のはねたやうな、人通りの激しい、流汁と溝と一所に、八百屋も豆腐屋も湧上りさうな、鍛冶屋の火も飛ぶ點灯頭を、用もなしに、のそく行く工合は、何うしても茫乎と云ふより他に言葉は無いので。

町の人たちは迷惑でせう、こんな氣の利かないのに限つて、日本の往來だ、とばかりで道の真中を通るものですから。

三味線堀で、河童が相撲を取る風説もなし、昔、伯母さんが佐竹の奥に奉公した縁もなし、七つ藏のあとに小判が落ちて居ると云ふ夢を見たのでもありません。……それなのに、今に於て何う言ふわけだか、些とも理由は分りませんが、唯ふらくと……其の日に限つて、あの邊が歩いて見たくて、何うにも我慢が出来ません。……胸がキヤ／＼するほどでした、變に痒い、動悸を打つて。

其の癖、家を出ると、其の制し切れない、自分の心に引摺られて行くのか、然も人目を忍んで、悪い處へでも魔に連れられて出たらしく、恐しいやうな、寂しいやうな、妙に後暗い氣がするのです——事實、蒸附くほどに思つた處へ散歩に行くのに、一寸行き、二寸行きで、とぼ／＼する、……慍う云ふのは、しかし他所目には衝くと蹴躓きさうに、すつ飛び／＼通る、變な様子なものだと云ひます。

古着屋、古道具屋、お定まりの荒物屋なんぞが、ごたく／＼並んだ、家並の滅入込んだ中高な道路を、佐竹寄の左へ切れます、と魚屋が一軒。

鮪のどて、鯖、黄色な鰯、小鰻を二日月で、ちらりと見て通りしな、七八人の買人が集つて、どの顔も赫と赤いのに、盤臺を照らす瓦斯の灯が蒼い、と思ふと、自分の紺緞の單衣が陰氣に黒い。手の、慍う白いのが、ふと寂しい氣がしたのですが。

只其れなりで行過ぎました。

どたく／＼どた、……重い、沈んだ、然も燃上るやうな楚音が、來過ぎた背後で激しく起つた、と思ひますと、軒燈の切目、二三間黒板塀を、びゆうと風を切つて、刺身皿が一枚。——私の耳を颯と掠つて——掠ると云ふより引殺ぎさうにして、スツと落ちると、すぐ眉の下で、白くなつて、ぱつと鹽を撒いたやうな粉々になつて破れました。……が、それが、頬邊を切つて落した、ぼたく／＼眞紅な血に見えたくらるで、身體がぞつと寒く成る、と兩方の耳が、ぐわん、と鳴つた。處が雨上りの泥濘で、其の、あの、凄しい勢で以て粉に碎けた刺身皿が、落ちるのに、バチリと云ふ蝗の飛んだほどの音もしません。此がまた、をかしく、暗雲の上でもあつたやうで、自

「夏のはじめの事です。まだ暮切りませんが、燈の入った、あの、混雑した下谷の御徒町を佐竹原の方へ茫乎一人で歩行して居ました。——差當つて、別に此れと云ふ心配も屈託もあつたのぢやありませんが、小芝居のはねたやうな、人通りの激しい、流汁と溝と一所に、八百屋も豆腐屋も湧上りさうな、鍛冶屋の火も飛ぶ點灯頭を、用もなしに、のそく行く工合は、何うしても茫乎と云ふより他に言葉は無いので。

町の人たちは迷惑でせう、こんな氣の利かないのに限つて、日本の往來だ、とばかりで道の真中を通るものですから。

三味線堀で、河童が相撲を取る風説もなし、昔、伯母さんが佐竹の奥に奉公した縁もなし、七つ藏のあとに小判が落ちて居ると云ふ夢を見たのでもありません。……それなのに、今に於て何う言ふわけだか、些とも理由は分りませんが、唯ふらくと……其の日に限つて、あの邊が歩いて見たくて、何うにも我慢が出来ません。……胸がキヤ／＼するほどでした、變に痒い、動悸を打つて。

其の癖、家を出ると、其の制し切れない、自分の心に引摺られて行くのか、然も人目を忍んで、悪い處へでも魔に連れられて出たらしく、恐しいやうな、寂しいやうな、妙に後暗い氣がするのです——事實、蒸附くほどに思つた處へ散歩に行くのに、一寸行き、二寸行きで、とぼ／＼する、……慍う云ふのは、しかし他所目には衝くと蹴躓きさうに、すつ飛び／＼通る、變な様子なものだと云ひます。

古着屋、古道具屋、お定まりの荒物屋なんぞが、ごたく／＼並んだ、家並の滅入込んだ中高な道路を、佐竹寄の左へ切れます、と魚屋が一軒。

鮪のどて、鯖、黄色な鰯、小鰻を二日月で、ちらりと見て通りしな、七八人の買人が集つて、どの顔も赫と赤いのに、盤臺を照らす瓦斯の灯が蒼い、と思ふと、自分の紺緞の單衣が陰氣に黒い。手の、慍う白いのが、ふと寂しい氣がしたのですが。

只其れなりで行過ぎました。

どたく／＼どた、……重い、沈んだ、然も燃上るやうな楚音が、來過ぎた背後で激しく起つた、と思ひますと、軒燈の切目、二三間黒板塀を、びゆうと風を切つて、刺身皿が一枚。——私の耳を颯と掠つて——掠ると云ふより引殺ぎさうにして、スツと落ちると、すぐ眉の下で、白くなつて、ぱつと鹽を撒いたやうな粉々になつて破れました。……が、それが、頬邊を切つて落した、ぼたく／＼眞紅な血に見えたくらるで、身體がぞつと寒く成る、と兩方の耳が、ぐわん、と鳴つた。處が雨上りの泥濘で、其の、あの、凄しい勢で以て粉に碎けた刺身皿が、落ちるのに、バチリと云ふ蝗の飛んだほどの音もしません。此がまた、をかしく、暗雲の上でもあつたやうで、自

分の身は宙に浮いて、何かに攫立てて居られるかと思ひました。

佐竹も露店もあつたものぢやありません！ 何處で乗つたか、判然とは覺えてないほど、何でも厩橋通から電車で本郷へ歸りました。が、氣が逆上つて居たのでせう。屋根を歩いたやうに思ふのです。

で居ながら、氣も、魂も、淵の底に落込んだらしく、巖に小草までもない、礫一つでも有つたら欲しい。これに絶着きたいほど、神が澄切つて、目に見えるものと云へば、机も、本も青いくらゐる、インキが又青いのですもの。——其晩は自分の指が、ヒヤ／＼冷かつたのを覺えて居ます。」

六

「其上、第一、毛一筋の違で、頭が破れるか、耳が裂けるか、生命も危い大怪我をする處を——ぶんと鳴つて皿が来た時、熱いやうな、腥いやうな魚の匂の、芬としたのを忘れないで、其の忘れないのが夜中鼻に着いて、翌日、三度まで、わざ／＼井戸の水を汲んで、冷いで洗ひましたけれども、何うしても消えなかつたのです。

腥い、と云ふとお聞きなすつたばかりでも可厭でせう。……處が、此が不思議な事には、ざあざあ洗へば洗ふほど、一度が二度と、洗つたあとで、何か香水でも振掛けるやうに、段々鮮しい、

いゝ匂に残るやうで——腥いと云ふのに、いゝ匂は變ですけれども、すきな魚は香しいと云つた形に、可厭でない心持に、ぼつと逆せ氣味に成りました。

そして、身體が、ふらくして、机の前に落着いて居られない、と云ふのが、胸先がそゝり立つて、また佐竹へ。——今度は場所に當が出来た——最う一度、其の魚屋の前が通つて見たくつて堪らなく成つて来たんです——弱りました。

堪へに堪へ、五日ばかり経つて、とう／＼我慢が仕切れなく成つて、遂にふらく／＼と出掛けて行く……此の身體が何處へ向いたか、御察しの通りです。馬鹿げて居ますが、妙に覺悟まで極めた上で。

でも、さすがに、あの、昔から逢魔が時と言ひます、薄暮合は……何う云ふものか憚られて、眞晝間二時頃、心覺えの道を辿つて、其の魚屋に參りました。

向ふと……仕出し御料理、としてあつて、横に(魚干)と書いた瓦斯燈を見ました。

最うわく／＼して、盤臺の、それでも濡れて居たのを見たばかり。——日中を白晝と言ひます、あの白と云ふ字は、こんな時だらうと思ふ。蜻蛉が飛んでも、大きな影が映りさうな、白い日でした。

唯、頂邊を少し餘計に刷込んだと云ふ、顛の薄兀た小僧が一人、禪ばかり、素裸へ半纏一枚い

け粗雑に引掛けた、大跨に膝小僧を突立てて、組板に引扱んで、大出刃のドギムした奴を拳下りに柔かく突手に取つて、切尖を當がつて、カリ／＼カリ／＼大きな貝を開いて居る。

其の貝を、ふと見た私は、唯、烏貝だ、と思ひました。……烏貝。

そんな貝は、有るか、無いか、それさへ其の時は知らなかつたのです。——眞黒でしたから——

榮螺、鮑は間違へません。馬蛤も田貝も黒い事は後に覺えました。が、眞黒だから烏貝。

途端に出額で幅の廣い、への字の口をした、其癖、ちよんぼり眉で毗の下つた憎くない、日にやけた面を、ひよいと上げて、きよろつと私を見て、

(入らつしやい。)

と甲高な、大きな聲で喚いたぢやありませんか。

私は慌てて中古の麥藁帽子を脱ぎました。

實に……同じ時、私の目をまぶしがらせたものが有つたのです。

磨硝子を嵌込んだ、細格子中仕切の前に、帳場格子を控へて、眞に成つて、俯向いて帳合をして居た、若い娘があつたんです。カチン、と間を置いて算盤の球が、カチンと靜に聞えて……」

七

「……其の白百合のやうな頸脚を一目見たばかりで、カツと成つて、私は何を云つたか分りません。が、ばつの悪さの當座免れに、誰のか出まかせの苗字を饒舌つて、處を聞いたには相違ないのです。

情ない事には、何とか云つて、饒舌つた其の姓が、近所まはりに有つたらしい。

氣輕な奴が、ぬい、と立つて——あとへ戻つて何軒目とかの床屋の路地だ。——何うとか云ぶ

のを、

(はあ。)

と、上の空で聞きながら、私は遁足に成つて、其方、此方、見當なしに、教へられた方を向いたり、向くやうにしたりして居ましたつけ、忽ち、ぴたりと眞向に控へさせられました。

と云ふのは、娘が、瓜核の色の白い、美しい顔を上げて、店頭に立つた紺緞の日和下駄の木偶坊を見たのです。

(違ふぢやないか、權ちゃん、お前。)

(ですがね。)

(否さ、一寸。)

床しい音で、掛硯へ筆をおく、とスツと立つのが錦繪を置替へるより早かつた。三和土の土間

へ二つばかり駒下駄が響く、と其處へ、中春なのが、藍と淺葱の朝顔の染浴衣、結綿のふつくりしたのに、藤紫を掛けて居ました。

唯、一度見合せた目を、ぱつちり涼しく奴に返して、

(床屋の向裏ぢやないか——貴方、其處を行らしてね。……)

然う云つて、優しく人指ゆびを反らしたのが、雲を指すやうで、その色よりも白かつた。……途端に何うです……

(然うだ、違えねえや、其方だ、書生さん……)

と云ふと齊しく、奴が、ひよいと手を舉げました。其の手に、出刃が、出刃庖丁があつたんで

うっかり指先の了簡で、つツと指した切尖が、嘘か、串戯でもあるやうに、頬とも言はず、咽喉とも言はず、眞綿のやうで艶々しい娘の頤のつけ元へ。

刺つた。

——刺つたんです。

——刺ると、硬ばつたらしい奴の手が、恚う出刃の柄を握つたまゝ、少し横向きだつた娘の顔を、向直すやうに情力で壓した……ぴつたり私と正面に見合つたんです。

美しくなよ／＼した、雪のやうな片足つまさきを、すつと膝へ上げながら。唯微に、あの、頸脚を縮めて、頤を仰向けるやうにただけの、眉も目も描いたものの静かさでありました。

三人とも動いたものは無かつたのです。

あゝ／＼、ぶる／＼と其の素足のさきが、ふるへて、また片足、駒下駄に爪立つと、薄い裾を

搦んで片棲で立つと思へば、それなりで、ぱつたり倒れた。

組板が枕に成つて、結綿島田を、何か、何やら怪い手が、虚空で搦んで揺るやうに、切の藤色が小鳥の羽を、はら／＼と煽る、と一所に、雪のみみぢが散る。

出刃は倒れる時、ドギリと抜けて活物のやうに落ちました。」

八

「娘の浴衣の襟が、膝なりに、両方すつと曲ると、苦しさに亂れたらしい、襟が解けて、あゝ眞白な乳かと思ふと……然うぢやアありません。……手で胸を抱いたんです。疵口は壓へないで。

——紅は袖を潜つて八口を溢れながら土間へ流れて、枕の組板を颯と染める、凄きと美しさは、雛壇の毛氈に京人形が倒れたやうで。……目をきつぱりと清しく開いた黒目勝な、あの、それが私の目に浸透りました。可愛い唇が、少し開いて、微に皓齒から激しい紅が、たら／＼と頬へか

かる、とほんのり逆上せたやうな臉の色がスツと褪せる。

(お房ちゃん。)

と、奴が慌てて雑巾を引擱んで疵口に當てようとするのを、まだ正氣ですか、……胸の手を離して留めました。——屋根から軒へ、があくく鳥の聲がすると、店が暗く成つて、流れる色が何故か紅のやうに光りました。其の暗いのは一つは人立です。早や黒山のやうに集つたと思ふ時、一羽飛込んだ鳥があります。其奴が流れるのりを踏んで、すたくと歩行た處に、出刃庖丁が落ちて居た、あれは、引窄めて突き反らした鳥の羽やうな形をして居て、何うかすると、可厭なものです。

(こん畜生。)

と奴が振上げる。ばつさりと人魂が抜けるやうに軒へ飛出す、足についたと見えて、(血の雨だ)と一人が言つた。出刃庖丁を振廻す奴にも驚いて、人雪顔を打つて退いた中に、私も入つて遁げました。

遁げましたでは濟みません。遁げるとは何事です。が、近所で戸障子のばたくく鳴る音、琵琶の響を、晴天忽ち驟雨して雷が鳴るやうに聞きながら、最う引返す事が出来ませんでした。妙な所で降りたり、乗つて見たり、歩行いたり、日の暮方に主人の内へ歸つて、それでも、夜

學へインキ壺を提げて出ましたのは、人面獸心と言つて可い。人非人め！が獸ぢやない、……鳥ですな。……其の、づうくしさと云ふものは、其の癖面は生白かつたと見えるんです。

(通魔と云ふ奴でせうな。色白な若い人だつたと言ひますよ、昔なら振袖で角前髪の若衆と云ふ處でせうよ。魚千のお房さんが町内の家を教へたのは。)

ツて、後に床屋の親方が、私と知らずに風説をしました。其の床屋と云ふのは、あの時娘が、其處を見當にして私に指をさした其なのです。其年の暮の事です。既う其の時は、魚千の店はなくなつて了つたんです。尤も其の以前にも、兩三度、密と參つては見ましたが、晝間は、後暗くつて、可恐くて、恥かしくつて行けないもんですから、日が暮れてから、それも遠くから。……はじめは軒燈が點いて居ました。二度めには暗かつた。三度めの時は夜半ですもの、何も分りつこはない。また、其を承知で出ましたものです。あの、近所の何百人にも皆に顔を見られるやうですから——

濟まない、言譯がない、見舞たくも半紙一帖持つて行かれる身分ぢやない。何うして慰める事も出来ない、と云ふのを理由に避けて遠ざかつて居ましたのは、卑劣極まる利己主義なんです。親親類にい、顔をされない、うらみつらみを聞かされよう、其が情なさ、と言ふんですが、ぶらぶら歩行の狐つき見たいな野郎に、娘に大怪我をさせられたものを、誰が藪入の忤に向ふやうな

顔を見せますか、年始に小判を持つて行くものに對するやうな待遇をするもんですか、馬鹿な！
しかし、良心の咎める苦痛と云ふものは、一層自分で咽喉を突いた方が増しだらうと思ふほど
でした。頭の髪を引捲る、小指は噛み裂く、壁を噛む、袖を喰切つた事もあります。が、其かつ
て身勝手に、自分一人後悔して、それで罪が償へるくらゐなら、人殺しをしたあとでも、あゝ悪
かつたと、心で思つてりや濟む譯です。そんな事を思ふ隙に、薬取りの使をするか、それも出来
ない通一遍の狐つき、先方で氣味を悪がるなら、夜のあけない内に魚千の店の前でも掃除をして
黙つて歸る方がいくら人情があるか、義理に成るか知れませんか——犬なら、眞似もしよう、鳥に
や出来ません。」

九

「娘は病院へ入つて、二月餘りで治つたさうです。——其も床屋で聞きました。——お話をしま
すのも申譯の無いやうですが、言はばほとぼりの冷めた時分、六七八九十十一月の末でした。
暮に、それこそ晝間、佐竹原の、あの邊をうろついて、魚千の店が荒物屋に變つたのを見たので
す。が、ふと此の床屋の前へ來ると、娘が其處に立つて指さしをして居るやうです。
鳥が啼きました。」

私は浮々と入つたのです。

また鳥が啼きます——此の聲から、床屋の親方が——（書生さん。）

と言つて、私が聞かないのに話をはじめたんですがね。溝藏裏の銀杏の樹に巢を食つたのを敵
き落した鳥の子を一疋、魚千の親方が三年の間飼つて居たさうです。床屋の飴ン棒へなども來て
留まつて、赤い口をあけて、ぎやをく言つて、それは町内でも猫の兒くらゐに馴染だつたさう
ですが、魚千が何です、赤貝の蓋をぎししくと出刃でこじつて居た時に、ひよいと歩行いて、組
板の上へ眞黒な嘴を出しました。危い、と拂退けた、峰のつもりの手が狂つて、一堪りもなく鳥
の首を切つたんです。腕の冴で、ごろんと落ちて、首が口を開けましたつて。

翌年、女房が亡く成つた。三年目の夏が、其の娘の怪我です。其ばかりぢやない。娘が入院し
てからも奴は過失の事だから親方も何も言はず——其のまゝ魚千に居たさうですが、可哀相に、
唯茫として了つた。其で居て、鳥さへ見りや四邊八方何處までも飛出して、追掛まはす、磔を投
げる、形を見りや其の通りで。……夜など聲だけだとぶるく震へる、近所でも鳥小僧、鳥小僧
と言ひました。

此を氣にして親方が煩ひ出す、……奴は親許へ歸つたさうです。……娘の退院した時に、親方
はまだ寝て居ました。前の年からけちが着いて世帯が左前に成つて居た處へ、二月餘の娘の身體

は金子の掛りやうと言つたらない。箆箆ぐるみ持出したと云ふ中へ、親方が病人でせう。暮前に引越をすると言ふのに、俤にも乗らず、杖をついた親方の手を娘が引いて、遠くの山の手へ引込んだとばかりで行方が知れない。

(烏が知つてませうよ。あれ、啼いてやがる。畜生め、烏にしちや色の白い……)

姿見に映つた私の顔は眞蒼でした。いや、烏に見えた。西洋小刀が丁ど咽喉を――

(あゝ、餓ン棒に烏が居る。)

(や、危え。)

私は目を瞑つて、故と烏を呼んで咽喉を切られようとした、が助かりました。

覚悟は鈍るものです。――鐵道學校を出て僅めるやうに成りました。――七年めでしたか――長野の停車場に驛員をして居て、休暇に、ともだち連で、諏訪の温泉へ行つた事があります。小春の頃で。

諏訪の明神様へ参詣する、途中に白檀薬師と云ふのがあります。珍らしい、白檀の大樹を視ようと誘はれて、田舎道を御堂へ入つたんです。前へお参詣をしようと本堂へ向ふと、一面白い日當りで、正面に障子が二枚、藁屋根の下に建つて居る、其處に鰐口が掛つた。……

何心なしに、ふと障子の合せ目を覗くと、驚きました。

本尊は辨財天か、摩耶夫人ではあるまいかと思ふ、美しい氣高い女が、しかし島田で、手習をして居たんですが、唯合せ目をびたりと内から壓へました！まさか、神、佛と信するまで遠慮はない、二度三度開けようと引きましたけれども、開かない。壓へる弱い力が此の手に響いて痺れました。

白檀の根に集つた、友達には何にも言はずに、其れなり出たんですが、歸途には、寺院の境内が、皓々とした月夜でした。

其の婦人は、確に何うしても、あの、お房さんと言ふ、佐竹原の娘に違ひないやうに思ひました。

……まるで――お話をします、今度の摩耶山の暴風雨の裡の巡禮の婦人です。――山門前の其の茶屋に、奥にもう一室、縁側づきの裏の雨戸を閉込んだのが見えますが、誰も居ない。……見失ふわけではない。隠れたのは屏風の裡に相違ないと思ひました。――戸ならば壓へて開けはすまい。

私は決心をして立直りました。」

櫻吉は、恚う話した……それからである……

「御免なさい、失禮ですが。」

櫻吉は榎際に立直つて、暴風雨に聲の弱いほど、慇懃に然う言つた。勿論、口の尖がつた狐面の小娘や、啞の親仁などは眼中にない。納戸口の二枚折の枕屏風に向つて、端正として、「失禮ですが、一寸お屏風の裡へお話を——」と云つた時、中なる姿を思ふにつけて、彼は几帳面に對する如く、張交もいづれ、歌か、繪か、美しいものに思つた。寧夢心に現に山路を追続つた端麗なる巡禮が、さながら歌になり繪に成つて、其處に消えはせずや、と危んだのである。……また實際、繰返すまでもなく、どしや降りの中を消々に追慕つた婦を、一度判然と此の門口で認めめたのは、虹に葉したばかり果敢ない取留まらぬ實際の色香であつた。が、瀧を抱いて攀づるが如くにしてあこがれた龍女の、小家を出る形は見なかつたのであるから、繪に成らうとも、歌に成らうとも、面影を潜めたのは、屏風の裡に違ひない。

櫻吉は名を名告つた。そして口は吃りながら、十年一夜も忘れない——事なのであるから、佐竹原の其の時の魚千の娘のお房だと信ずる次第を、真心籠めて言得たのである。

「……貴女が、神でも佛でも……もしや私を、仇敵とお思ひなさいますにしても、何うぞ一目なりとも此處でお逢ひ下さい。お言を下さらないのは、お許がないのであらうとは存じますが、たとひ天地の御罰を蒙つて、身體が此のまゝ八裂に成りますまでも、之なりお目に懸らずには置かれませぬ。今私にお逢ひ下さいますのは、あの時、私のためにお怪我をなすつたより御迷惑でも、唯一言、貴女のお姿の前でお詫を申さして下さいまし。」

胸をせめて言ふうちに、聲は雨風の音に途絶えつゝも、肉を絞つて、心の血を染めた言葉の綾は、身を切つて擲つて、我ながら暴風雨に楊梅の花の黄に白に、山櫻の散亂るゝばかりであつた。が、屏風の裡へは、其の天井から振下つた煤が落ちたほども響かない。

今は所詮、と覺悟した。

「御免なさい。」

煤けた木像でも主人である。爐端の啞に會釋して、重きこと岩の如き、ずぶ濡の靴を脱いで、つか／＼と上つたが、立つては近づきも得せず、坐つて膝で寄つて、密と上から屏風を覗く……と濕氣と微の臭氣が鼻を貫くと同時に、あつと云つて怪飛ぶばかり、ばしやり、と雨垂の水を踏んで、靴足袋で土間へ逆戻りに突立つた。

かし／＼骨が鳴りさうに、瘦せさらばへた、蒼黒い胸から上を屏風越しに、ひよろ／＼と起きたのは、白髪が針を植ゑて目を刺しさうな、色の眞黒な老嫗である。

朽木の皺の、むしばみと云ふ口から齒を吐き、得體の知れない笑を洩らして、ニツとして、

「お客様な、土産もの買ひなされ。」

鼠が巢を踏む音をさせると、屏風の縁を片寄せて、這身に膝行出る裾が、ずるりと灰色の尾をば曳く……病ふと見えて寝衣に細帯一ツした、烏婆とも言ひさうな、小鼻の窪んで尖つたのが、其の翼に似た黒布子の破袖に、飯櫃かと思へば違ふ、紙張の箱を抱へて、手を添へて、蓋を壓へて、圍爐裡の向縁へ、巢籠からのたくつて出て、

「雨に濡らうと思つて抱へて居たれば。」

と獨言に呟き、

「猫のふんぢや、買つて食べなされ。」と五ツばかり、ぶる／＼と震ふ五本の指に引摺んで、箱の蓋を裏返しに、べたりと握放しにしつゝ云つた。

めざした巡禮の艶婦は、たとひ死骸に苔が生えても、慍うは成るまい——餘りの事である。

十一

さては、活きるにせよ、死ぬにせよ、龍宮を見懸けて海の中へ飛込んだものが、雲を破つて逆に安達ヶ原黒塚の納戸へ落ちたも同じである。

「これ娘、皿をおこせよ、皿をよ。」

媼は、尖面の小娘に、店の釣棚から皿を出させた。例の白髑骨を破つたらしいのに、あゝ、剩へ青蝦蟆の丸蒸を擲出す……其の踞つて扱ふ手つきが、縁日の盲の婆の古琴を搔くに宛然で、

「草の團子も、雨濕氣を厭うて抱圍うたれば、箱の中で膚のほてりにぬくとうなつた、可え事。まるで此は蒸立てのやうぢや。ほう／＼……梟のあたゝめ土に毛が生えて、……これ、飛びさうにある。はゝゝ。」

凄じい笑ひ聲、其の息が掛つたら、いかさま、白癩の脳味噌を擲出したやうなどろ／＼溶けかけた草團子が、其のまゝ埃だらけの翼を煽つて客に飛菟るか、と可恐しい。

「さ、これ進ぜ。よ、猫のふんもの、……進ぜたら、錢貰へや、娘。——錢を貰へよ、進ぜたら、……なあ。あゝ、年を取つての長煩ひ、強う難儀や、やれ／＼。」

黒砂糖に青豆を和へて捻ぢたのと、其の皿盛の草團子を蓋ぐるみ突出すと、寝衣の裾をぶらぶらと蠢かいて、後退りにもとの古屏風の中へ潛り込む。處を、風が一揺り揺つた、——形は見えずに、

「おゝ……辛度や。」と呻く聲、化猫の吟する如し。

「う、うゝ。」と右の商品を指しながら、木佛が澁茶を酌出す。

小娘が、つっかけに件の箱の蓋を持つてちよろりと出る。
勢ひ青蝦蟆か、猫のふん、血も吸らねば成るまいし、食へるか飲めるか、御考へを願ひたい。

「……歸途に寄る……」

銀貨一片、白く框の端へ投棄てに、穿いてる間はない……靴を引抓んで、筵戸へ出た處は、今しがた、月界の女仙に對して、几帳にも申した詩人とは肖もつかず、溝へ落ちた飛脚であつた。唯、筵戸を出會頭。——薄暗い上に、せき心で氣が着かなんだ。——先刻から、出口に立つて、内を覗込んで居たらしい莫塵を着て古手拭を被つた男に、はた、と顔を向合すと、面に口が有つて鼻が無い。上の口が黒ずんで、下の口の唇が毒紫に膨れて居る。うっかりして近々とハタと寄せた、彼奴が缺けた其の鼻の中へ、恰も櫻吉が我が鼻を揉込むが如くに成つたので、天窗から唐突にしつぺいを啖つたばかり、ハツと退る。

げら、くと異變な笑聲を残して、男は案山子が吹飛ばされた體に、吹降の中へ消えた……咄嗟であつた。

凄じき風一陣、ドツと此の小屋を取つて地ながら揺上ぐると思ふ時、山門の方に當つて只ならぬ物音、地響を打つと齊しく、わつと叫んだ人數の聲々、一齊に夥多しい。

櫻吉は、驚破、山門が崩れたのであらうと思つた。

彼は缺けた鼻の穴の中へ、倒に落込む奇怪さをも失念して小屋を出て見たのである。

倒れたのは大なる當山一枚の制札であつた。が、すつくと高く立つた制札があらはれたので、雲の疊まる石壇を正面に、丹塗の門の岨々と聳えた一座莊嚴なる摩耶山切利天上寺の光景は、封じめを解いたる如く、輝くばかり明白に目の前に扉を開いた。

其の輝くのは、風と雨と相激する電の如き光である。

十二

雲は重く山門の棟を壓して黒煙舞下るばかりなる中に、丹塗の柱は華麗なる柱の燃ゆるが如く眞赤である。樹木の鳴る音、弩をつるべ打つて、雨と風は沸上る。一山の暴風雨の暗闇に、金網戸の網目は消えつ、丈六の二座、燃ゆるが如き仁王門の金剛神は、本相を顯白に、赫と炎を以て彫刻され、四つの眼は爛々として、惡龍の瞳の照輝くかと過またる。あるべきことにはあらざれども、一幅活きたる修羅鬪場。密跡、那羅延の仁王尊の、ものの平かならざるあつて、制札をば取つて棄て、金網戸を蹴放して躍出でたる氣勢とせずや。

唯見ると、黒雲をぬつくと破つた其の二體の金剛神の、脚、爪先に搦み縫れて、大雨の瀬に寄る怪しき魚の、蠢き、異類異形なもの敷。おどろの山を飛ぶと聞く、……一本脚の小坊主、

目一つ瘦法師、蹩の親仁、兩手の落ちた釘貫女郎、また鼻なし婆、鼻の無いのは唯一人二人のみではなかつた——あの莫塵を着た、彼奴も交る。額、頭、べろりと禿げて、頸窪から房々と赤髮の延びた眉毛のない年増が見えて、あらう事か、今日が賽日の晴に白粉を頬に塗つた。やがては、非人乞食の輩が、十六七人、老若男女一團に成つて山門に兩宿りをした、と分つたが、崩れるばかりのもの音に、意はず戸に立つて此の状を一目見た時、金剛神が従へ給ふ、五百の夜叉に宛然なのであつた。

時にこそあれ、不思議にも、可哀にも、をかしくも見えたのは、樫吉が手にぶら下つた一足の靴である。此の目も鼻もない、烏の首をチョン切つたやうな化鳥は、一羽、驚いて指の感覺を失つた持主の手をぼたんと落ち、と直ぐに一羽が後を追つて、軒を落つる雨水の瀬に乗ると、二つ交んでぶくりと沈み、むくりくと又浮いて、ぶつと膨れながらぼかんとして、並んで、ぶくりぶくりと泳ぎ出した、と見る／＼嵩増す雨に誘はれて坂下にかゝるや否や一散に麓の方へと流れ行く。

山門の一群が一齊に聲を揚げた。

其の靴を嘲るか。倒れた制札を喝采するか。

聲を合せて哄々と笑ふ。

額を敲く、指を指す、仰向けに反つて噴出すのがあり、肩を擦つて、腹筋を振るのがある。笑のあとを堪へられない、クツ／＼の大笑壺、缺損じた縁の下の奇怪なる羅漢たちを、颯と擦る風情である。一本脚は——腰法衣に白衣した小法師で、ひよい／＼と飛び跳ねる。

嘲れよ、笑へよ。跳ねろ、踊れ！ 汝たちの勝手だが、八幡棄て置かれぬ、彼奴等の中に、朱の滴る金剛神の胸がくれに、氣高い佛、緑の黒髮、亂る、雲のたゝすまひに、石壇高き夫人堂の、且つ遠く、且つ近く、影は面前に髣髴すれども、摩耶夫人ではまします……小笠を拂つた、あの巡禮の。

櫛が、鬢づらに櫛が見えた。亂れ髪に、この左なる那羅延の、拳の伸びて掛つたは、引攔んで宙に釣つたか。否、否、それとも、黒髮を庇つて、乞食輩から守護したまふか。

縞も小袖も、友染も、枝振、葉振は暴風雨のまぎれに、唯花一輪、地を離れて、淺葱櫻の蒼白さ。

一目見て、樫吉が、夢中で其の山門へ風なぐれで、ぐつと飛着く——と、「あッ」と云ふ、清しい、幽な聲がして、四五人の非人ぐるみ、巡禮の姿は、仁王門の背後へ隠れた。其の時、一人の乞食の手に、白い笈摺が脊筋から脱けて残つた。亂れた帯が、うしる状に白銀の光澤を消した。

「お待ち。」
と思はず叫んだ、が、我を避けしや、乞食の手から身を揉みあせつて遁れしや、雨に風に、雲の行方。

十三

暴風雨は、しかし、時に檜吉の傍に、根が地を穿かへして、仰向けに成つて居た制札が倒れて、二體の金剛神の、ぐらくと搖ぎ出でられた時が絶頂であつた。
いまは金網戸へ汗に成つて納り給ふ。潮が引く山の氣勢。那智を抜けた法螺貝は、地震に乗つて、茅渟の海へ着いたであらう。靴は何處へ行つたやら、檜吉は足袋跣足で山門の下に立つ。
非人の座を見よ。二百十日の八ツ時と云へる體して、おなじ青蝦蟆、猫のふんを面桶の蓋に裝並べ、缺茶碗を搔散らかいて、土瓶を据置き、大鍋の蓋を外した中に、蒟蒻、燒豆腐、雁擬の煮込んだのが、鍋底に溝泥の、どろくして、山蛭、芋蟲、赤蛙、芋の子の毛の生えたのは、土蜘蛛を正のもの、蛇、蝮の血で煮爛らしたと思ふばかり。湯氣が赤黄色に、すれくと立迷ふが、血の池の陽炎めき、胸を衝く臭氣が臊腥い。——其の蒟蒻に羽が生え、雁擬に足を生じて、刎出し、這出し爲ないのを見ても、風の凩いだ事が察しられよう。

が、十餘人のかたる等——中には寝そべり、匍匐に成つたもある——に此の夥多しい雜物で、さて、向つて、何の柱の隙からも、山門の下を抜けやうがない。

唯月のやうに影が映す、もの蔭の美女の氣勢、仰けば雲の中空に摩耶も几帳を透き給ふ。

火水は厭はぬ、淵ならば飛込もう、が、それ處ではなかつた。近づいて見れば、大勢のどれも、

此も、手足、目鼻の下足なばかりか、群の多くは面と言はず、胸と言はず、悪赤く爛れ、毒紫に腫れて、蛆あり濃汁を滴す。食物にさへ、肉の腐り、皮は餓えた影が流る。渠等癩病の類

一門、婿、舅、嫁、孫、伯父、うからやからを舉つたらしい。中にも、あの額の拔上つた白媽媽

は耳の根を頬へ掛けて、葡萄の實のやうな累累々として熟した腫ものの袋を持つたし、蠅、蒼蠅の

夥多しさ。

翁一人、あるが中に頭巾して、白い髯を捻つた手の、甲ばかり掌裏、一本の指もない。婆あり、

尻をめくり、瀝膈を踏延し、太股から、乾掛けた瘡蓋を撈り取つては、楊枝せ、りに食うて居る。

かつと衝上ぐる胸を壓へて、

「通してくれ。」

「何處へ通るのぢや。」と、彼の翁、髯を撫つ。

かさ蓋を嚙る婆々。

「のほへ、ひよりのひや、」と鼻くた聲。

「御堂へ參詣する。」

「摩耶夫人様のな。」と、又髯を空さまに扱く。

「然うだよ。」

「否、然うではあるまい、違ふぢやろ。」

「違ふとは。」

「お身のをがみたいは巡禮の別嬪ぢやろ。」

「それ、これぢや。」

と金網戸の前に、鼻の洞穴を黒くして空嘯いた、あの莫塵を着た漢子が、のそりと出て、大鍋の上へ、ぼんと小笠を被せた。

が、彼奴づれの冠るものか。紐の浅葱が、毒々しい鍋の湯氣に萎々と成つた小笠の面に、

摩耶夫人様にまるるもの、

房。

と優しい女文字で記してある。

一目見ると、櫻吉は、千萬無量に思が切つて、思はず、はらりと落涙した。

唯一人の名である。

癩病坊等のとぐる巻いた中に、破鍋の蓋にすべきものでない。

濃も汁も思はばこそ、夢中で引取らうと及腰に差伸ばした二の腕は、言語道斷、突出した婆の

足で、下からがんと、蹴上げられた。身に備への無い腰が踰躑けて、櫻吉は倒れようとして、漸

と留まつた。

十四

「何をやる。」

櫻吉は氣色ばんで屹として云つた。

そんな事ぐらゐる絲瓜とも思はね。其處に突立つた莫塵の漢子は、顔の眞中からすぼんと呼吸をして、

「ふん、お前こそ何をやるだいな。」

「勝手放題、他のものに手を掛ては濟まんやろがや。」

と婆がこそくと股を搔きながら云ふと、翁は髯を伏せて頷いた。

「此奴等。」

と詰掛けるのが、餘りの穢さ、胸の悪さに、おのづから後へ退つて、

「済むも済まんもない、一體誰のだ。」

「あ、何がな。」と、翁は空惚けたやうに言ふ。

「何がぢやない……摩耶夫人様にまるるもの……」

と讀むうちにも聲が曇つて、房と云ふのが言へなかつた。現在も、三間とは隔たらない、其處に、仁王門の蔭に、其の端麗なる姿の、非人等に取巻かれたを知りながら、いまおくれ毛の亂れた人の、小笠ばかり、はや爰に記念と成つたやうに思ふ。

「……其の名を書いた笠の事だ。」

「私等がものでないと言つて……御身は……知つとるかな。」と翁がのツと指さす、掌薯の片拳。

「いや、確にそれらしい、心當りの人がある。」

「何笠が……笠がよう似た菅笠が、とけつかるわい。」

莫塵が愚にもつかん事を饒舌ると、何が可笑しい、婆々がはじめ氣を噴いて、十四五人また一齊に哄と笑つた。

風は次第に風ぐ。

扱て緩々と笑ひ止んで婆々。

「主は知つた人の笠らしいと言ふ、誰に聞いたぞ。」

「誰にも聞かんが、然う思ふ。」

「ふあ、思だけかな、思だけなら、此方でも、ふあ、私たちのもんと思て置よ。」

「いや、勝手には思はせて置かん。」

「俺の方も、また御身に、勝手には思はせて置かんが何うかな。」

耳もぐわんと逆上せながら、

「無法な事を言ふな、——確に見た——此はいま婦人の巡禮が着て居たのだ。」

「可い。」

と翁が逆撫でに、髻を上げつ、

「其の巡禮のものが、唯今俺たちのものに成つたらば、何うするかな。」

「其の、美しい、綺麗な名が、何だつて汝たちのものに成るものか。」

翁が大音に、

「摩耶山切利天上寺の山門に、俺たちが胡坐を組むぞ。むかし玉の如く輝き給ふ御方に濃を洗はせた癩の坊主は、名をば瑠璃光と申上げた……御身は須彌山に上つて砂を言ふ……如何にも笠に記いたのは、美しい綺麗な名ぢや、が、此が俺たちの中に無いと思ふか。待て——房よ、房よ。」

と勿體らしく、口に手の甲、聲繕ひをして呼べば、あゝ、眉のない大年増が、くなくと前帯をめた腰を据ゑて、故らに嬌態をしながら、両手を支いた。

「はい、はい。」

「何うぢや、俺たちのものだんべや。」と、唐突に太い聲。すんぐりと肥つて、膝の切口、恰も腸樽を突出した如き、毛だらけの躰が、出齒を黄色くして、涎を垂らし、両手に握つた雁擬の汁の垂るのを離しも遣らず、いきなり、鍋の上へ面を出して、海鼠のやうな舌を吐いた。

——摩耶山にまるるもの——房——をべろくと舐める氣である。

「待て——待たんか。」

十五

檜吉は太息ついて、

「待て——俺が呼ぶ。私が名を呼ぶ。私が巡禮の名を呼んで見る。呼んで、向うで、其の仁王門の裏に返事が聞えたら、其の名は汝達のでないと思へ。……え、待て！舐めるな。舐めると人死が出来るぞ、此奴等。」

「呼ばして見ろや。」

は、は、は、翁は髻を撫で、

「的も一生懸命、鹽鯛で目が赤い、血走つとる。は、は、は、さあ、名を呼んで見るが可い。」

「む、む。」

「まこと、婦が返事をせうかな。」

「屹とする。」

唯、出端を折られた。

「御身は一體、白々しう今更其の婦の名が呼べると思ふかな。」

「何？」

「あゝ、雲が矢のやうに走る、國は狭いものぢや、山は近い。海が縮んで、直ぐ目の下が東京よの。佐竹原がそれに見ゆる。」

思はず檜吉は、瀧の如く雨霽れの雲の流込む傍の谷を見た。

翁は續けて、

「雲は白く成りかけた。路も白い中を、一人徜徉ふ男がある。魚を商ふ店の店頭に立つて、道を聞いたものは誰ぢや。天人のやうな娘が、其の道を教ふるために出た處を、貝の殻を裂く出刃庖丁で、過失で、丁稚に咽喉を突かれて倒れた。血はだぶくと流れる。あの谿河の音を聞け……」

若い、白い、柔な娘の生命を絞つて湧く血は、摩耶山に漲る水ぢや、流るゝ雨ぢや。……其の娘は死ぬる臨終の目に何を見た。日、月も見ぬ、月星も見ぬ。怪我とは言ふが、其人のために生命を棄てる男を見た、男の顔を見た、唯目を見た、目の瞳子を見た。——其の時男は何うしたと思ふ——鳥のやうに、軒を離れて、ふいと飛んで見えなくなつたわ。娘のためには通魔ぢや——不思議に生命は取留めたが、あとの音信は聞かうともせなんだ男よ……やがて十年、いまでも其の男が、其の娘の名を此處で呼んで、返事をすると思ふかな、聲が聞けると思ふかな。

「聞ける。」

とばかり聲を震はした橙吉は、半ば恐れ、半ば疑ひ、且つ恥ぢ且つ傷んで、果は赫と憤つた。あの時の小僧が化けて、此の魔ものの頭領に成つたらうと思ふ……戀の敵……彼は血迷つて少なからざる嫉妬を感じて、そして鬱屈の餘り自棄に反抗したのであつた。

「呼んで見い。」

「呼ぶ。」

が、待て、いま名を呼ばれて、唯々と、然も手をついて翁に言つた、禿婦が其處に居る。それ早や眉のない顔を上げて、頬から咽喉に膿汗を湛へて提げた、青豆ほどの粒を重ねる。……清く、美しい名を呼んで、もし此の婦が、唯々と言つたら何とする。

彼は胸を煮爛らしつゝ、猶豫つた。

「はあ、呼んで見な。」と婆々の癖に、抱き膝の脚蹲踞。

よし、然なくとも、呼ぶに答ふる名ではあるまい、我は忘恩の賊である……

甕が笠の上で舌を吐く。

橙吉は屹と視て、禿婦のしや額を睨返した、おのれ、人間ならば恥を知れ。……悪魔か、呪う

て我を唾にせよ、鬼ならば、ともに死なむ。

いざ、彼處にある人。

「南無摩耶夫人。」

父も亡せぬ、母なき我をば憐み給へ、御名を申すに、御聲あれ。

「お房さん。」

「はい。」

「お房さん。」

「はアい。」

其の情らしく優しい聲に、冷く氷る胸の血が、颯と花に成つて噺に開いた。

「通せ。」

いま、清い、其の優い返事が聞えると、崖から轉がりさうな勢で、衝と樫吉が行かうとするのを、非人等は豫て期したりと言はないばかりに、十人餘りが、俵ころがしに成つてごろ／＼と寝そべつた——翁は横に手枕した、此の手は又枕には丁度可い、婆々は眞先に手足を伸ばして、踏返つて、磔を仰向かしたやうである。

時に、鼠色の雲の蟠る、正面の石段に半ば霞んだやうに成つて、此方を視めて居た、十二三ぐらるに見える、眇目一ツの色白な小僧がある。汚れた白衣に黒い帯して、頭に桃色の頭巾を被つて、眉先に小手を翳して居たのが、ひよい／＼と石段を三つぐらるづゝ一飛びに飛んで來た、固よりして一本脚。が、ぶんまはしを投げたやうにトンと、夥間の肩、頭、腰、脾腹の空いた處へ飛込んで、ちよん、と身體を丸く寝る。と山門下は三方ともに、此で充満に成つた。

此の一本脚は妙な鬼で、大方は此の惡魔どもの——誰も見たものはないが——卵子であらう。第一色が白い、そして今はじめで産れたのではない、初から此の群の中に居て、皿を飛んだり、碗を跨いだり、るざりの頭を敲いたり、禿婦の毛を引張つたり、婆々の瘡蓋をふつと吹いたり、

ちよろ／＼と飛廻つた。時に、樫吉が、いざ摩耶夫人の御名に掛けて、巡禮の名を呼ぼうとした咄嗟に、ひよ／＼と駈出して、石段へ飛上つて、霧の中に向直つて、高い處から、ト小手を翳したのである。意味は、如何に巡禮の美女が、樫吉の聲に應ずるか、聞くより見ようとしたらしい。小さな其も、大な鬼であつた。が、思ふまゝに其處からは端麗な人の姿が見えよう、彼は羨ましかつたばかりである。

「さあ、お通り。」

お通りと翁からはじめ、口々に、がや／＼と言つて又もや哄と笑つた。

樫吉は拳を握つた。

「退け、退かないか。」

「は、は、打つかな、撲るかな。……我等しきのものが、洋服をめされた旦那に、かなふ事ではない。踏むとも、蹴るともぢや。」と翁が仰向く。

「踏めたり蹴たりがされるほどの汝等か。何も言ふな。……あの人の、その方は返事をした、私に返事をした。笠も一所に、汝等のもではない……通せ。」

「初手から私等がものでなうてもな、今更めて夥間のものに成つたら何うする。十年の間分らぬ婦ぢや。身體が何うなつたか。此方は知るまいが。……娘に成つたやら、嫁に成つたやら、下女

に成つたやら、さりとは、お姫様、御臺様、御新造様に成つたやら、此から祝言がはじまるやら、お吸物やら、鱈やら……」と、立續けに婆がなくなくと饒舌出す。——櫻吉は手に掴んで、ありたけの金を投げつけた。

「通してくれ。」

誰も拾はうとも、撮まうともせぬ。

何と！紙幣の當つた奴が、

「あらし、あらし。」と言つた。

「雨ぢや、泥まじり。」

と嘲つたのは銅貨である。

銀貨を、

「霰、霰、霰」と囃す。

「雹！」とけたましく喚いたのは、銀の些と大形なのが額に打着つた毬である。奴は、そして、

三ツ目入道の如く見上皺に支へたまゝ、舐めて取りさうに、ぺろりと寝ながら上へ舌を吐いた。

「此方は雪よ。」

「玉とけつかる。」

「眩しいやうぢや。」

「ほてる、く。」

と、仁王門の裏で男の聲々。

傳へ言ふ、虎が人間を咬む時は、衣帯おのづから解脱ちて、眠れる如き白身の犠牲と成るとぞ。

……櫻吉は、五體を悶えて、服の釦を引断つては投げ引断つては投げ、

「助けてくれ。」と叫んで言つた。

「三國一ぢや、眞白な花嫁様。」

しやんくくと手の鳴る時、一本脚の小法師はひよいよと桃色の其頭巾、鞠の躍るが如く、石

段高く半ば霽にかくれて小手をば翳す。

十七

櫻吉は、いま其の小法師の座の明いた石疊を目懸けて、劍を倒に植ゑた深い穴に陥る想ひで、奔込んだ。が大蝦蟇の腹に乗る心地、ぶくり、と物を踏んで、ハタと腰を支いて倒れたのである。非人等は、むらくと起きて、膿爛れいきれ腐つた肉屏風して其中に彼を圍つた。其の色は、地獄の紅紫である。

が、おなじ衣の色は、彼處に袖も帯も寸断に亂れた中に、月の光が白く碎ける……其の雪なす咽喉から胸へ、熱き珊瑚珠を颯と溶かして、鮮血を灌くのが歴々と目に映る。

櫻吉は就中、翁の髻の下に控と坐して兩手を支いた。

「許して下さい、……逢はして下さい。」

「否、否、如何な。」

翁は髻とともに頭を振つて、

「御身は、恠う云ふ時はな、佐竹原から影を隠して、逸散に遁る人ぢや。」

「うゝむ。」とばかり息も塞る。

「早く麓をさして下るが可い。……先刻流れた靴のやうにな。彼奴、今頃は町の出口に一足揃つて、御身の歸るを待つとるぢやろ。」

「……………」

「十年経つたら、」

翁は星の無い雲を仰いだ。

「十年目の今月今日、また此の御山へ上つて、同じ思ひをするが可い。……御身は御身ぢやが、今の時の、婦の思ひは何うあらうな。」

「あゝ。」と錦の絲の纏る、如く、あはれに彩ある婦の泣聲。

「帯を。」と蔭で誰か言ふと——挟んで持ったを現在知つた——柄杓が翻然と此方へ飛んだ。

段に小法師が眉庇の手を指直す。

餘の事に、胸塞り呼吸迫つて、氣の絶せむとした櫻吉が、膝許に飛んだ柄杓を見ると、此の癩の臭に埋れた中に、颯と一脈の薫を感じて、纒に又口が利けた。

道理なるかな。此に上げた柄は白檀であつた。——今も摩耶山の夫人堂に、此の時の記念に残

る——一度福原に藝妓して、やがて人妻に成つた此の美女は、豪華世間の目を驚かした。結願の摩耶山詣に、巡禮の姿をするとて、新に造らせた柄杓の柄の白檀に不思議はない。玉炊ぐべく、桂たくべく、珊瑚も樹を折つて枝とせむ。が、黒髪の挿櫛は常に此の香を可懐んだので、人は彼を渾名して、白檀のお房と云つた。一代の艶、江戸うまれの伊達者である。

「何うしたら逢はせてくれます。……死骸になりとも、」

手も足もわなゝく彼は、地獄に倒れて、戀人同士、劍の峰、針の山を追上げられ、追下さる、想ひがした。

「最早、身命も厭ひません。」

「此を啖うて、夥間に成らば。」

婆々が、あの瘡蓋をかけた指のさきへ、ずぶりと挿して突出した。
櫻吉は山蛭の煮染を啜うた。また青蝦蟇の蒸物を嚙つた。傍から血のやうなぬるい茶を喫まされた、飲みつゝ息も絶々である。

「もう、許して、さあ、逢はせて。」

「なか／＼、そんな事で！」

翁が指のない手を揮つた、憎い中に、辛い中に、苦い中に、何故か、如意を取つて打拂はる、やうに思つた。

小法師が石壇の霏からこぼれて駈下りると、其の手に引摺つて来たやうに、する／＼と門の裏から女帯を投げ出した。蒼く白銀に颯と輝く光が沈んで、するりと伸びて、梁の木彫の龍の影を落した美しさと凄さが添つた、——此の色縷子も記念に残る——

ハツと又蘇生つたばかりに成つて、

「お爺さん。」

「なか／＼、なか／＼何うして。」

山門の棟に、二聲ばかり、鳥の聲、翼の影が、雲の白さを颯と映す。仁王は朱也、帯は蒼い。

十八

「お房よ。」

「はい。」

櫻吉は腫を見据ゑた。

翁は一度、禿婦を呼向けて、さて、櫻吉に告げて云ふやう、

「其の婦は同じ處に膿がある、……あの時の血とな。やあ、其の腫物を吸へ。……膿のなくなるまで吸へ、逢せて遣らう。」

面は灰よりも白く成つた。早く其の唇は、膿の色に青く黄に染まつたが、所詮、今は戀人の黒髪の一筋にも身を觸れずには死におほせぬ。……

「お房さん。」

「はい。」

嬉しや、禿婦でない、山門の其の後から。——

「お房さん。」

「は、い。」

櫻吉は半ば萎えた手で、又舐めかゝる蹠の頬を——今や手の觸るも厭はず、突き拂つて、巡禮の小笠を丁と取つた、——摩耶山に参るもの……

「……情に、情に、お前さん、せめて、此の笠をかぶつておくれ。」

蝦蟇とも、山蛭とも知れぬのが、さすが婦の優しさに、打領いて、笠を被つた、結んだ紐の薄淺葱。

櫻吉は覺悟して、跪いて、其の禿婦の膝に手を掛けた、が、振仰向いて、もう一度。

「お房さん。」

「はい。」

禿婦はまた優くも故らに面を背けた——彼方から聲がした。

「……貴女は、佐竹のあの時の方に、屹と相違ありませんか。」

「はい、相違ありません。」

「卑怯の罪を償ひます。」

が、今度はあはれに思つてか、禿婦が、幾度も腫物の方を打背け頬を躲す。——思ひ切つたる事なれば、苛つて其の頸を緊乎と抱いて、末黒に中のどろくと黄を帯びた、粒の累る可恐しい鱗を吮つた。

吮つたのである。

あはれ、婦の情を知つて、男の心を思ひ遣つたか、吮はるゝ婦は、美しい玉の涙をはらくと落す。……翁がハタと其の片掌で眼を蔽ふと、婆々は膝を折つて跪いて合掌した。蹠が泣いた。

莫塵が咳入る。咳の音、すゝりなく聲々、恰も臨終の枕を圍んだ親しき伽の趣がある。

背を小法師にさすられながら、帯を敷いて、其の銀泥の柘榴の實の上に倒れた。息の絶ゆる時

も——摩耶山にまるるもの——名の上に枕しようと念じつゝ、一度彼は絶入つたのである。

念は届いた、が、枕した笠は、眞綿よりも柔かに且つ滑かに、そして、雪に颯と色さして、しつとりと雨の花の面影を見た。

お房が膝を貸したのである。

起直るべき力も失せて、其のまゝ、恍惚として見れば、谷あり、峰を隔て、峰あり、谷に迫つて、雲の上を雲が通る。其の中を彼方此方に、分け分るゝ非人の影。あるが中にも杉の梢を高く晴れ行く蒼空霞む雲に乗つたは、白衣の小法師を背に負うた同じ白衣の、翁の肩の後影。霧に大きく映ると見れば、嵐に颯とぞ消えたりける。岨道の崖は、其の樹々に夕霞して、入相の陽、桃色を染め出す中に、淡く金色の靄を浮かしたのは楊梅の花である。……ほの明い山路を、うしろ向いて又行くのは、おなじ形に猿を負うた猿である。非ず、峰の茶屋の狐の面の小娘を狸の啞が肩に乗

せて行くのであつた。それが崖添ひの阪を、狭間について曲る處で、上を見返つて行つた時、遙に顔が見えたのである。

櫻吉のために、そして自分のも兼ねて、お房が駕籠を二挺、麓へ呼びに使ひに立てると、啞では用が辨ぜず、小娘一人より、負うて走る方が早い、と言つて、今しがた茶屋を出たとの事。

其の茶屋の奥の一室に、二人は雨戸を開けて居た。濡縁近い霞の底に、山田の茶種黄に咲いて、時ならぬもみぢと見たのは、衣たゞ一重枕に添つた友染の色ではない。怒る山家も人目を厭へば、表つきなる爐を避けて、土間に焚かせた櫓である。袖の濡れたを炙るとて、男を前に、身は蔭に、手にもたゆげな鐵火箸、燃ゆるばかりの情かな。

十九

白檀の櫛、黒髪に、お房は伊達巻ばかり、媚しい姿した、帯は山門に棄てたまゝ、現な男を抱添へて來たのである。

「——せめて、貴方にお褥にと思つて、……否、手籠にされたのではありません。——不動瀧の上の處で、貴方のお顔を見ましたから、山門まで引返して、雨宿りをして居た怪いものを頼みま

した。お心が知りたさに——」

怪しき小屋に灯も置かず、手枕したる後の事。……

「……あの時の仕返しに。……まあ、あれからの身の上は、今日、山門で取巻かれたと同じだとお思ひなさいまし、澤山苦勞をしましたよ。……ですがね、些ともお怨み申して居たのではありません。たゞ最う一度お目に掛りたくつて。でも、お目に掛つた處で、貴方はどんな御心だか、それが私に分りませんでしたもの。

御免なすつて下さいまし。……口ばかりではおわびはしない！たとひ何でも、あんな思ひをおさせ申しましたから、私は命を棄てます。死んでおわびを申します。……否、死ぬのではありません。唯もう一度、此處が切りたい、此の通りに。」

胸に投げて差寄せた、横顔の、襟白き水晶に蜘蛛の絲一筋、板屋漏る春の宵月に青い疵を幽に引く。

「……此處から眞赤な血が湧いて、魂が、碧い雲に乗つて行くやうで、貴方の顔を凝と視て、横に倒れて居た時ほど、何とも言へない、嬉しい、床しい、心細い、堪らない佳い心持の事はなかつたのですよ。まあ、何と言つて可いんだか、とても口では言へません。

今も申しました通り……其の後は、随分いろ／＼苦勞もしましたし、おもしろい事、嬉しい事、

悲しい事、死にたい事もありました。其のかはりには、勿體ないほど、榮耀もする、我がまゝも
しましたけれど、其の榮耀も、我まゝも、今日一人で、好勝手な巡禮に成つて、此のお山へお参
をしましたほどの榮耀も我がまゝもありません。それと同じに、おもしろい事、嬉しい事、悲し
い事、死にたいほどの事と云ふのも、咽喉を切られて、貴方のお顔を凝と視ましたほどの事はあ
りませんでしたよ。

あの、心の、嬉しさが忘れられない。此の方に生命を上げるのだと、お顔を見て、血を流して
倒れて居ました。酔覺に冷水より、いゝ氣持とも何とも言へない……

今は人の家内です。が、そのために貴方と怨うして、それで死ぬんぢやありません。唯、咽喉
を切りたいのです。嬉しいんですから、留めちや可厭。ね、一生に一度の思ひをもう一度さして
下さい。然うすりや、二度ですもの、一生に一度の思ひが。……私くらゐ幸福なものはない。ほ
ほ、眞個ですよ、申戲なのではありません。」

嬉しいか、悲しいか、泣くか、笑ふか臆氣な、褻の友染見え隠れに、姿の亂るゝ衣のしまも、月が
影を動かして、繪姿を描くやうで、唯艶麗さを増すばかり。一層艶やかなものは黒髪で、一筋青
くさへ見えた。
手に、取る、影の晃乎と映るは、懷中鏡の光でない。

「あ。」

取る手を拂はず、縦りながら、

「留めないで下さいまし、後生、私は本望なのですから。」

男は、ふと摩耶夫人に戀をして、怨うして死ぬのが、其の尊嚴に對する身の償のやうな氣がし
た。

切物を壓へた手を、離して左に取直すと、手と手の白い、霞の袖。月に幽に熟と視た。が怨る
時、人の死ぬのは、女も、我も、ふと暗くなる月に、目に見る姿の一度消ゆるのと同じであらう。
暗中に姿はないが、死んでも生命は生きて居る。聲は聞けもし、聞かれもする。身體は抱きもし
抱かれもする。……櫻吉は片膝立てた。

「留めません、私も死にます、本望です。」

唯かさゝくと障子が鳴つた。背後の破障子が細く開いて、屏風の上から顔を出した、黒く痩せ

た白髮婆。

「心中か、心中か。」と、肋骨をがちくと、胸を顯して仲上る。

「心中だ。」

振返りざま屹と言つた。

婆々は、天井を睨んで、縁の梁を指してのり上つた、腰紐を片手で解く真似。蛇のやうに腕を空へ。——首絞る縄を掛くる真似して教へた。

「西洋刺刀を持つて居る。」

お房の聲は凜とした。冥途の伴侶は頼母しい。

「壘が汚れる、迷惑ぢや……零落れたれどな、數代續く、お山での舊家ぢやぞ。」

「湊屋の家内です、お婆さん、建直して上げます。」

「あ、今平家の御寮人さま、可うござる。」と、引込めた首を又擡げて、

「うむ、何んぢややら、結構な薫の、い、衣類を召してぢや。……死ぬるに無駄ぢや。へ、脱がしやれぬか。悴は効ない、私が踏張つて家再興のたしにするで、へ、功徳ぢやが、何うえの。」と、黒い顔でニヤリとした。

其方は小灯がある……猫のやうに目が光つた。——此の時ほど凄いものを、榎吉は見た覚えがないさうである。

伊達巻が、キイと鳴ると、もどかしく焦れたやうに、颯と脱ぐのに長襦袢が添つて、裏を翻した紅羽二重。もう一枚下に着た、白羽二重を對丈に、模様の烏が三羽飛ぶ。屋根にも啼聲、遙に山路の人の聲。

引抱へて、納戸の婆々に衝と投げる、とすらりと裳を曳いて、宙に天衣の飄颻とき、春の夜嵐はる颯として、小燈の火が弗と消え、小袖のなりの摩耶夫人、襖の際に見え給ふ。

榎吉は領伏した。二人の末は美しかるべし。駕籠が二挺、手ははり四人、中番頭に手代が付き、廊の幫間が先供で迎に來たが、思掛けず重傷の彼等を昇乗せた。潤達なる美人は、駕籠屋に唄を唄はせて、鈴鹿は曇ると聞きながら、すやすや眠つて息絶えつ。

其の主人が、また大腹で、榎吉を懇に病院に送つて、手厚き待遇をしたのは、即ち今平家と呼ばれた湊屋である。

疵も大丈夫。——私に此の話をしたのは——看護婦の油斷の際に。——

二人連れ

「彼處に——あゝ、彼處に……」

と……右側の辻を、葉茶屋の軒に片寄つて佇んだ。銀杏返の色白な、姿の優しい女を視ながら、男はふと立停つた。

芝の金杉橋を渡つた處で、車掌臺から降りるとやがて、電車の隔てが、軋んで除かれた時である。

「側は違ふ……彼の女は、何時も此方側に立つて居た。」

其の左側で、然うして男の足のふと淀んだのを、向側で女が見て、こゝに待つ身を氣着かずとか、前髪はづれに、白い手で密と招いた。

彼の女は然うでなかつた。恚うした時は、愼やかに肩を落して、片袖から手を入れて、袂を引いて見せるのが合圖であつた。……較べて是非を云ふのではない、それは世を忍んだあひゞきで、此は人目を憚らず墓參りに行くのである。今詣でらるゝ墓のぬしは、其の果敢ない女で、月夜の

辻でも袖で教へて、手を舉げては招かなかつた。世に亡き草葉の蔭からも、想ふに手を舉げては招かぬであらう。其の爲でもあるまいけれども、亡くなつて半年足らず、まだ墓參をしないで居た。

と思ふにつけ、今日は彼岸の曇りながら、あの招く手に、ちらく友染の絲遊する、其を陽に向つて眩しさうに、「分つた。」

と帽子の廂に、一寸手を掛け、領いて見せると、婀娜なお彼岸の同行は、葉茶屋の軒を翻然と出て、白足袋清き襷袢き、線路を斜に、すらく〜と此方へ寄つて、見ないやうに、唯横顔で、男に美しい瞳を注いだ。何と云ふ中ではないが、町中の人通り、女は恚うしたものさうな。……

「早かつたね、餘程待たせましたか。」

「いゝえ、でもね、兄さん。」

と濃い睫毛、きれの長いのを、ぱつちりさして、

「電車を四五臺。」

「丁度、其の敷ぐらる、彼岸の所以か太い混雑方でね、銀座の乗換で待たされましたよ。……濟まなかつた、遅く成つて。」

「まあ、私は構ひませんわ。お墓へ行つたら、お妻さんに然う言つてお上げなさいよ。」

「何とさ。」

「済まなかつた、遅く成つてとさ、兄さん。」

「はい、畏りました。」

商賣屋の店續きを、立並んで歩行出す。行交ふ道の、人も人目も繁けれど、柳の袖に寄せた身に、町の埃も霞である。

「お道さん、よく出られたね。いつか一所に御飯を食べた時、約束はしたんだが、一寸ぢや出られなからうと思つたよ。」

「何ですか、話もなく忙しくつて。あの、何のみち、彼岸中にとは思ひましたけれども、今日はね、まだ、些と無理だつたんです。ですがね、今朝、明方に妻さんの夢を見ましてね。」

「夢を、」

男は洋杖の柄を腕に掛け、

「どんな夢。」

「来たのよ、私ん許へ——まあ、後でゆつくり話しますわ。でね、すぐにお墓でも逢はなければ、気が済まなく成つたものですから、先へお手紙でもあげとかないで、何うか知ら御都合は、と然う思ひましたけれど、電話をお掛けて見ましたの。でも可うござんしたわね、貴方の方も。」

「私は心待に待つて居たから、お呼出し次第仔細なしさ。處で、お寺は、あゝ、彼處に活動寫眞館がある。」

旗が萌黄に、藍に、白に、鳩の如く翻る。

「隣角が大きな炭屋と……あの、露地だね。此間お話しだつた。」

「はあ、彼處ですわ。」

「ぢやあ此方側へ御足勞を掛けるがものはなかつた。お道さんが待つてた方へ、手前どもから出向くんだつけ。」

「でも、兄さんは、此方側が可懐いでせうと思つて、」

「何故だい。」

「一寸、」

と目許に莞爾して、

「此の邊の裏ぢやないの、時々、一所に、お二人で。」

男は袖を引合はせた。

「不可ない……佛が風邪をひくよ。」

お道は軽く胸を敲いて、

「悪かつた、御免なさいよ。……あの、身體の弱い人が、その上かぜをひいては、お骨も冷えてなく成るでせう。」

「それ、電車だよ、氣をおつけ。」

「大丈夫。」

ぬかるみを拾ふやうに、も一度線路を向うへ切つた。

活動寫眞の旗の影。

「お道さん、花を買つて来れば可つたね。氣の着かない事をした。此邊に花屋はなささうだね。」

「お寺には櫛ばかりだし……然うね。」

と立停まつて、伸上つたり、透したり、氣を揉む心の映る顔は、木蓮の眞白き花に、風打戦ぐ

風情あり。

「私も先刻来る道で、氣の着かない事はなかつたんですけれど、もしかして、貴方がお待ちなさるやうぢや悪いと思つて、氣が忙いたもんですから。——一寸兄さん、私駆け出して行つて其處等を探して来ますわ。」

早や駒下駄に棲が浮く。空は五色の旗の風。

「結構々々、私から御辭退する。何ね、先方ぢや不斷、蓮の花が盛りだとさ。」

「然うね。」

お道は本意なささうに裳を捌いて、

「お妻さんはね、兄さん。」

「何さ。」

「極樂へ行つてるでせうか。」

「馬鹿な事を。」

と言消したが、ふと炭團に目が暗かつた。炭屋の軒の山なす薪に、活動寫眞の看板の眞赤な繪具が、颯と搦んで火が燃える。曲つた露路も暗かつた。

下

「あの、寺ですよ。」

男は誘はれて目を上げて、

「突當りの、成程、大屋根に擬寶珠がある。彼れだね、向裏の芝園橋から見ると言ふのは。」

「え、ですが、あの寺内の下寺なの、右側よ。」

「あ、あの門。」

連人二

とステッキの柄を向けたが、其のまゝぐいと脇に挟んだ。
「や、お道さん、花屋が居るぜ。」

「眞個にね。」

たゞ四五間の間ながら、二人が揃つて小走りに駈出したのは、——餘り詭へたやうだつたので、立つ陽炎に花車の消えはせずや、と危んだからであつた。

鉢ばかり、きり花はないのかい。」

「へい。」

と横ちよに下した荷車の花の中へ、若い花屋がのんきな頬杖。廣い露地の晝静に、荷は小店の駄菓子屋の前にあり。子供が四五人、其の縁臺に、ぼつたら焼をして居たが、金魚屋でないから見返りもせず、長屋々々の格子から、誰差覗く影もなし。

お道は男の後から、肩越に、露の瞳を——花に、葉に。

「成りたけ綺麗な。」

と差覗く。

「さあ、言ふまでもないがね、……松葉菊に、坊主菊、三色堇……と、些と此は水引を掛け兼ねるな。」

「御進物になさいますんで？」

「まづね。」

「ぢやあ、此の西洋花、チウリップ、こりやお職だよ。」

と立直つた氣競聲。

「紫の百合のやうな。」

「それになさいましな、他にはありませんもの。」

「ハイカラだね。」

「匂ふでせう、屹と……お喜びだわ。」

「香水以上だね。」

と、花屋は横狀に鼻を撫でる。

「二鉢。」

「苔の多い方。」

「で、幾干だい。」

「へい、一鉢が三貫宛だよ。」

「高いぜ、植木屋。」

連人二

「花屋で御覽じろ、きり花にして一輪、易くつて二貫だ旦那。何しろ香水以上だからね。」

「兄さん、お値切なさらない方が可いわ。佛様に手向けるんですから。」

「ハツと思つた、我知らず見たお道の顔は、花も香も、近まさがしたのである。」

「あやまつた。……ぢや六十錢——はてな、十錢と云ふのが一つ……」

「私持つて居ます。」

と、いそぐ帯を抜いた懷紙、開くと白銀五つ六つ、紫の鹽瀬を二る。

「や、御佛參のお手向けですかい。」

「花屋は横顔を平手で敲いて、ニヤリとして、」

「申戯ぢやない、二鉢三貫で澤山なんですさ。」

「然うかい。ぢや、まあ、五十錢銀貨を一個。……お道さん、最う可いんだよ。」

「口あけてまだお剩錢が——旦那、これぢや多過ぎる。」

「まあ、可いから。」

「可いつて、お前さん。」

「植木屋さん。」

お道が優しく微笑んで、

「あとは花の香の御祝儀よ。」

「泥鉢だ——姉さん済みませんね……御近所なら私が持つてお供をしやせう。」

「何、それに及ぶものか、私が持つよ。」

と男も言つた。二十四五なが仇氣なく、

「否、私が持たたいの。」

「植木屋さん、お世話だつた。」

「御機嫌よう、おまるりをなさいますし。」

で、すんなりした胸の處へ二鉢据ゑて行くお道の後から、男は腕組してうつむいて續いた。

濃い紫の其の花を。——

「植ゑたいわね。」

臺石が草に缺けた、小やかな墓の前の黒土に、お道は袖を敷くばかりにして、

「ステツキを持つて来ると宜うござんした。」

それは閼伽桶に水を汲む時、厨の柱に預けて来た。

「お待ちなさいよ。」

と獨言も、うつかりして、すつと簪を抜いて取ると、晃々々と銀のつくしが生えたやうに、土を掘らうとしたのである。

片手に線香、片手に關枷桶を提げたなりで、暫く茫乎して立つた男が、慌しく聲を掛けた。

「あゝ、お待ちお道さん、それぢや佛の目が痛む。」

「あら……簪で突刺して。」

カチリと投げるやうに手を離れた。

「私、何うしませう。」

……見上げる臉に、淡く心毒きの血を染めた。

「否、涙でさ、お前さんが優しいので。何の、私何うだつて、お道さんに逢ひたさに、もう一度娑婆へ来たからう。仲よしは嬉しいね。——さあ、お参りをしよう、水を手向けて。——少し離れないと、お召ものが臺なしです。何だか、亂暴なやうだけれど、此が功德に成るんだつてね。」

「え、然うなのよ、澤山かけてあげて下さいな。」

「冷くはないか知ら。髪を洗つてるやうに見える。」

さら／＼と注ぐ水は、石の蒼さに浸透つて、颯と落ちて、柳が亂るゝやうであつた。空が暗くなつた。柄杓を片手に、一足退くと、控へたお道が身を寄せて、

「手向の水の石の窪みに、櫛の葉が枯れたのが……あゝ、まだ今時分、眞黒な實が残つて、此處を洗ひませう。手桶を貸して、」

「お道さん。」

男は迫つた聲なりし。

「手で洗ふのを無精して、其處を打棄つて置くのぢやない？……櫛の實の雨水に朽ちたのは、人を殺す毒と聞きつゝ、此の手を其處へ觸つちや、一思ひに、掬つて、私は自分ながら、うつかり飲みさうで成らないから。」

紫紺の袂を口にして、雪の腕をさしのべて、石を洗つて居たお道が、打仰ぐやうに頷くと、おくれ毛をはらりと拂つて、

「あゝ、水が刎ねて。」

と目を拭つた。

垣根の外で、鶯が鳴いた。

「さあ、綺麗になりました。」

と、その手を鉢植の花に分けつゝ、

「枯れないで下さいよ。……さあ、おまるりなさいまし。手をお洗ひなさいますか。かけて上げ

ませう、はい、ハンカチがありますわ。」

やがてお道が、墓の前に居代つた時、そのコートを脱いで、ト置場所を見廻すと、右も左も卵塔ばかりで、たしなみの紋着の黒縮緬の羽織の袖に、抱へてをがまうとするのを見て、それは男が預つた。

「叱られてよ、姉さんに。」

「何、ほめられる。」

と肱に掛けて、衝とその傍を離れつゝ、あらぬ方をば見て立つた。塔婆まばらな墓地荒れて、瀬戸物の毀れたやうに乾いた土に、ぺんく草、じくく水に、櫛の枯葉、敷散らかつた炭俵のほぐれの中から、一本こぼれ咲の菜の花の、褪せて白いのが果敢なかつた。

三方を長屋の裏に、枕もあらはに取圍まれて、土の下にも寝起のたびに、嘸氣兼をするであらう。

と涙ぐんだ目の行く處に、眉に兩袖を合せ、袖口が揃つて美しい姿を見た。伏をがんで、その清しい目を閉づる時、男も瞳を伏せて、ほろりとした。

「お待遠様でした。」

コオト越に手を掛けて、

「先生。」

「え。」

「一句、姉さんにお手向けなさいな。」

差覗くやうに言ふ、其手の腕に掛つたのが、コオト越しながら、然りながら、蓑の雪ほど身にこたへて、優しさにゾツとする……柳の絡ふ重たさは、お妻の影も添つたであらう。

「それ處なもんですか。」

卯辰新地

「お氣をつけ遊ばしていらつしやいまし。」

「難有う存じます。」

「お世話でした。」

「御機嫌よう。」

口々に送出す、當地の所謂仲居の世辭を、蛇目傘で受けて背後に聞き、行く春の夜の小雨を、柳のやうに肩に掛けた。一枚小袖で、羽織ながら瘦せたのが、微酔の低下駄を引摺つて、轉んだら起きるまで、投遣りな歩行方。いまの家から持たせて出した、かなで紅梅と書いた提灯を片手に提げ、足許を見るでもなければ、ゆくさきを照らすでもなし、提灯の方でも、これでは役不足だから、茫とふてて、ともし立の蠟燭のまだ薄暗いのが、裾へ掛けて、朦朧とした影は、狐が尻尾でちらくくと化しかけるやうに見える。處も稻荷河岸——松並木の土手づたひ、當市の卯辰の廓に近い。水上は北の空に、尙ほ雪の峰、水晶の嶽に包まれながら、波は卯の花、流は艶な、淺

野川と云ふのの縁を、ぶらりと辿つて來たが、

「邪魔だ。」

と、柄を取つて口の端、

「何、提灯は要らないと言へば、然う云ふことをおつしやる方に限つて、屹とお怪我を遊ばします、遊ばちばつ。……氣障を言ふぜ、手前、山中に踏迷ひ、孤家の炬火ぢやないが、此奴を目當に、二つ彈丸でドンだらう、ふゝゝ。」

ふツと消す、と水へ一筋、紅い光の流れたのは、消え際の灯の餘波でない。川向うの暗夜の空へ、卯辰山の影を背負つて、恰も其の半腹を照らすが如く、燦爛と輝かした廓の女紅場に催しつある、菖蒲踊と云ふのの電飾が、中洲越に流れたのである。

其の流れへ、フイと投げ込まうとした提灯の手を、傘の柄で留めて、

「すねるなよ、酔拂——逢へないたつて、誰が知るもんか。」

と、太く嘲つて、獨で苦笑すると、其の提灯の柄を帯に、羽織の下へぐい、とさした。

「こゝ等が相當の恰好だ。生意氣に他の深切を無にする奴があるものか。——屹とお怪我を遊ばします。……しかし言ふ事が氣障だな。あゝ暗夜の方が故郷の道らしい。躓くものか。」

で、點した時より、確乎した足踏で、づかづかと歩行出した。が、暗く成ると、ふと妙に、水

が高鳴をして響くのに、雨もや、降増るか、しとくと傘の音。

濡地を引く下駄、ひたついて効性が無ささう。

時々大粒が交るのは、二株、三株、心覚えの土手の松から滴る雫の、色は緑、姿は露。で、濡れるも風情だと思ふうちには可かつたが、水の香が芬として、ふと吹きもしない冷い風が、さつと酔顔を拂つたのを、こゝに一本面影を水に誇る、年のころ二十ばかりの柳が、と心覚えに氣が着くとハツと思つた。

「待てよ。」

時に一個、市の中央なる昔の城の用水が町々へ分流し、大路小路を蜘蛛手に走つて、此の大川へ落口に架けた橋がある。長さは縦に二間ばかり、庭に物敷寄な八ッ橋の一渡りに過ぎないが、菖蒲踊と聞くものを、あの紫の影も映せ、此の暗さで何も見えぬ。

狭い河岸の真中に、一方は直ちに急流に灌ぎ、一方は裏町から人の家の廂合を抜けて落ちて、水の横町と言つても可い、其の両方とも道とすれ、丁ど此處で土手も切れ目だのに、欄干どころか、紙を壓へる卦算ほどの仕劃もしてない。

瀬に立つ水が近いから、渡れば橋板が揺れさうに思はれる。

「これは、危いんですね。」

晝間通つた時、連だつた、若旦那に然う言ふと、

「え、危うございませすとも。つい、此の櫻時でした。……宴會がへりの若い藝妓が、ほんの貴方、串戯のやうに一足踏外して其ツ切流されてしまひましてね。……可哀相な事をしましたよ。」

二

「飛んでもない事ぢやありませんか。何處の女です。」

「東新地のうれつ妓でしてな。」

と、言つた。向う河岸の、あやめ踊の連中で、東京だと柳橋と云つた場所柄である。

「眞個、夢のやうな話です。……紅梅に座敷があつて、其の歸路だつたと言ひますよ。酔つて居ましたつて。でなけりや暗夜でもある事か、朧月夜。尤も雪解ですから、水も、もう一嵩あつたんです。」

ながれの身と聞くも果敢ない。水の泡を寂しく見ながら、……此の橋際に立つた處へ。媚めいた圓鬢と肩を並べて、向うから來掛つて、

「やあ。」

と酒機嫌の高調子を掛けた男があつた。……柳生銚三が今度の旅行で、中仙道北陸道を見知越

の、商況視察と云ふ、大元氣な喇叭酒の横肥りした若い紳士、唯今御携帶の令夫人は、汽車の中には見えなかつた手荷物であつた。

「これは。」

と、柳生も、微笑の顔を合すと、インバネスの袖を拂つて、洋服の腕をぐいと出して、

「大奇遇、あつはッはッはッ。だが、しかし危い橋だね。越後で汽車から覗きましたな、親不知、子不知ですわい。」

と、怪しからん、其處で、友染のびらりとした手を曳いて、橋を渡つて行過ぎた。

無常が戀に成つたつけ。――

其の橋、ト晝間と同じ柳の下で、ふと心着くと、後髪を曳かれたやうに、足が前へ出なくなつた。

「さあ、逸まつた。何だつて提灯を消したらう。はじめから暗いなりならまだしも、憇じ燈があつただけ、急に一寸の前も分らない。――屹とお怪我を遊ばします――可厭だな。」

と、悚然とする。……傘に枝垂れて、千筋の糸で、空へ釣上げられるやうに足が浮く。其の枝の細いのは、裾が早や、さら〜と流に洗はるゝ、と知つただけに、うつかり樹の下をさへ離れられない。

唯、提灯を腰に、蛇目傘をさしたなり、柳の糸で宙にぶら下つたものが出來た。此のまゝ苞にさすと、初卯の土産。

「いや、申戲處でない。」

傘を疊んだ。濡れるなんと厭うては居られぬ。ものもあらうに、欄干のない暗の小橋を手探りと成ると、這はねばならぬ。稻荷河岸で四ン這。

「まさか。」

で、傘を得ものにした。で、覺束なささうに柄を突張つて、杖めかいて按摩搜りに、がさ〜と突出す途端に、雲も蓬な峰へ、風が吸取つたやうに見えて、向う河岸の電節が一齊に消えたのである。ために、目潰を啖つた體で、傘の出端を挫かれた……ばかりでない、消えた時の電燈が、却つて閃然と瞳を射たので、彼は猛然として幼い時の可恐い雷雨を思起した。

然も此の裏町の、同じ横川に臨んだ小座敷である。七歳が學校がへりに、同級のに誘はれて、つい行つた事もない其の家で、はさみ將棋をさして居ると、手が見えないまで、黒雲が舞下つた。流が眞蒼に成ると、時ならぬ大雷に殆ど絶入つた事がある。其の頃は此の横川から龍が上つたと風説した……其の時の我家の戀しさ、遠く父母を呼んだ心を思へ。

今も戀しい。二昔以前にあつた我家のあたりを、暗中に透かす方に、川のやゝ下流に架した大

橋の形が朦朧として顯れる。橋の上を、紺蛇目傘、番傘、女も交る澁蛇目傘が打重つて、欄干あをき薄月を雲の徂徠ふらしいのが、袂に蔽ひ、裾にかばつた三つ四つ提灯の灯に描かれて、宙にふわ／＼と小雨に映つたと思ふと、やがて搔消えて、ふつと無く成る。それが大方は賑ふ町の今夜の最後の人通りであつたらう、……新地は近し、四條あたりの春雨に擬へて、媚かしく艶に、相合傘もあるべき景色の、如何ならむ、狐の嫁入じみたのは、柳に亘んだ目の寂しさである。

三

氣の又減入る事と云つたら。

振向いて密と電燈節の消えた女紅場のあたりを視れば、裏の山が漆の如く雨に艶やかに成つて、峰の樹立が雲に染む、——あ、あの裡に觀音の御堂が、と思ふにつけても、其の御堂に行く路傍で、薄の中に秋の茸を搜るとて、ふと、とぐる卷いた蛇を見た。錆びた鎌が胴中に乗つて居て、灰色の蛇は陶器のやうに硬直して、そして鎌首を立てて居た。めら／＼と舌が動いたと一目見ると、小兒は崖を轉がつて、上流の橋の上まで落ちたのを、夢のやうに思出す……
柳は冷い。
ざわ／＼と鳴る水に、溺れ死んだ藝妓の姿が仰向けに眞蒼に映つて、其の解けか、つた帯の上

を、水が蛇に成るか、する／＼と黒く走る。

銚三は、窄めて持った傘をバツタリ落して、思はず兩掌で、小兒のやうに面を包んだ。

「今晚は。」

「……………」

「貴方、今晚は。」

しつとり濡心地の帽子の上から、媚かしく不意に然う言つたのを、身近に、青柳の纏れた中と思ふにさへ、簾越に然も二階か何ぞ、高い所から響いたらしく聞取つた。彼は心を鎮めようとして、折から踞んで居たのであつた。

「え。」——餘り思掛なさに、少なからず怯えた中にも、あ、此の川添の片側町の、飛々ながら、物數寄な紅い格子に蘆蓐、晝も二階の雨戸を閉めた、小造な何の家も、かくし妻、妾などの住居だと心得て、扱は其の一件が、こゝへ手筈の、忍夫と間違へたに相違なからう……

「私……人違ひぢやありませんか。」

「否、貴方。」

「旅のものです。私。」

「はあ、存じて居ります。」

「誰方？」

「私？」と却つて先方が聞返す。

「貴方は？」

「私は……」

柳の枝に縋つたらしい。振仰いだ眉の上、亂れた浅い葉の中に、白い手さきが幽に見えて、黒髪は、緑の濃い中に隠れながら、

「幽霊です。」

「申戯おいひなさい。」

手先の葉を、宛然みだれ髪を擱つた如く、頭から蔽はれ掛つて威して居ると見て取りつゝ、其の葉の頬を掠めて枝垂るゝのを構はず起つた——手が消え、裾を圍つて棲に提げた傘の氣勢がある。……銚三の目は、やゝ暗夜に馴れたのである。

雨は小留んだらしい。降つて居ても、柳が吸つて消すのであらう。緑は重いほど濡まさつて、そして、ほんのりと薫がした。

「だつて、怨めしいんですから。」

「何が。」

「貴方はお怨な方ですわ。」

カチリと轆轤の閉つた音。……柳は、髻髻として婦人に成つた。

「……何にも知らない、迷惑です。」

「え、何うせ、御迷惑は知れて居ます。ですが、ですけれども、灌山さんがお誘ひ申したのを納得なすつて。」

聞き掛けて、此はと思つた。灌山と云ふのは、遠いが、彼には縁續き、若旦那と云ふのは其で、今まで紅梅に一所に居た。——雨と言ひ、夜と言ひ、遠近の初蛙、珍しいまでの醉心地に、一人で、すきな、怒な、物思に耽りながら歩行いて見たいと言ふ廉で、分れて先へ歸つたのである。——氣心を知つて領いて、若旦那は手枕しつゝ、あとに残つた。

……一座に、しかし、いま聞く聲はなかつた。……顔は水より臙である。

四

聲に柳の葉が觸れて、

「……あの、踊を見物に来て下さつたんですもの。皆が未熟でも、不束でも、些とは観て遣つて下されば可いのに、……怨めしいぢやありませんか。」と立直つたらしく、すつきりと言つた。

聞くものは、はじめて心に領いた。

「あゝ、あやめ踊の御連中。」

「えゝ、其の數なりませぬ御連中。」

「いや、申譯がありません。」

舞臺なる、もみぢに錦の袖が散つても、雪に狩衣が揃つても、櫻に蝶が亂れても、牡丹に獅子
が狂ふにさへ、満員の棧敷入込の中に唯一人、こくりくとして、時々ふらふらと、のめりさう
に、坐睡をし續けた變な野郎があつたと思へ。

「何とも面目次第もない、……決して悪氣ぢやありません、實際堪らなく睡かつたんだ。」

「えゝ、堪らなくお眠くは誰がしました。——皆、私たちが不束だからなんぞせう、眞個に口惜
うございますわ。」

「何ういたしましたして、貴女方が何の……酒が不束なんですよ。」

「何うせ、私たちとおんなじに、地酒なんぞございますから。」

「困つた、然う云ふ意味ぢやない。飲み方が不束なんだね。」

「それなれば、酔のお醒め遊ばすやうに、お茶を持つて行つてあげたんですから……」
「待つて下さい……」

舞臺は、遠見の一軒家、狩衣したのが大勢で、驚のやうな足つきで、書割の雪の山路を、しと
しとと踏んで出た……

「銚さん、お茶を、お茶を。」

即ち彼の名を呼んで、同じ年で月だけは年上の従姉が一碗の茶を勧めた。銚三は逗留中、其の
家に宿つて居た。……若旦那は、従姉が少い時の長女の婿で、先刻は其の若夫婦と従姉とが同伴
であつた。——紅梅の寮へ寄ると言ふので、女たちは故とはづして歸つたが。——

「恐縮でしたな、それぢや……」と云つた。が、些と腑に落ちぬ。京の都踊の番組にある如く、
茶席は別にしつらへたのを、故らに棧敷に運んだは、先づとして、緋の袱紗を捧げて來たのを、
うつら／＼覺えて居るのは、高髻、濃化粧で、錦の帯を豎矢の字にしたお小姓姿の十八九、もの
腰も、色の氣合も、雪間の若菜で、こゝなる柳の姿でない。

「はあ、私が持たして差上げました。」

果然。

「ぢやあ、あの時分、貴方は茶席に。」

「あの……舞臺裏の後見に。」

「では、お師匠さんですな。」

「地づくりの……擬のです。」

待てよ、それだと音に聞く、縣下、某師團の師團長、何某中將の妾、三笠屋のお蘭とか、名代の艶色であらうも知れぬ。

「それぢや、今夜大切に、衣裳をつけない、紋着で、山姥を踊った方なんですわね。」

「あら、體裁の可いことを。」

「何故。」

「嘘ばかり、矢張り坐睡りをして在らしつた……」

「何を祕しませう。最も可い心持に寝て居た時です。怪しからん、餘りうつとりと成つて、横ッ

こけに、つれの十七に成るのの膝枕をしようとして、其の時ばかりは吃驚して目を覺すと、舞臺

ぢや木が入つて、圓鬚に結つたのが。」

今も然うか、柳の暗さに、鼈甲のさし櫛は、

「端然とお辭儀をなすつた時だ。」

「貴方。」と、遮つて、唯一呼吸ひくと、幹にかゝつた手の撓ひに、葉がさらりと皆動いた。川

波が颯と鳴る、と白襟の面影立つて、

「口惜い、私……無事に歸しはしませんよ。」

五

「御免下さい、……明晩、更に謹んで見物します。更めて御意を得ます。」

閣下とも申さずに、つい御意を得ます、と言つた。

「御意を得ませんよ。」

お蘭であらう、其の女は、柳の雫に濡れた笑して、

「貴方は最う、東京へお歸りなさるんぢやありませんか。——今度入らしつたのも、二十年ぶり

だと言ひますから、また何の年おいでなさるんだか分りはしません。」

「そんな事を……何うしてね。」

「何うしてでも丁と知つて居るんです。……踊がはねて、支度をしまして、紅梅へ参りますとね、

いまお出掛だと云ふ處でしたから、すぐにお跡へ来たんです。貴方は人に逢ふまいと提灯をお消

しなさいましたけれど、此のね、柳の小橋でお目に掛るつて事は、丁と此方で極めて置きました。

橋から向うへおいでなさいましたら、無理にお引戻しも出来たんですよ。」

意外な事を澄して言つて、

「それだし、それに、あやめ踊も、最う今夜がおしまひなんです。千秋樂に、また珍らしいお客

様が、はじめから寝て在らつしやるんですもの。新地の興行は、はなから睡らされたと同一ぢやありませんか。——随分一生懸命ですよ、新地中。——餘り口惜いから、出来ないまでも、お目覺に……お目覺ですから、そりや甘いには甘いんですけれど、番組にも何にもない、此の何年か、お客様なんかに見せた事のない、私が自分で立つたんですの……」

「大地震が揺つたやうに、棧敷も土間も、其のために、騒いだと、從姉が後で言ひましたつけ。此方は現だ。現の中に、私は火事だと思つて居ました。」

「え、何うせ、すつたん、ぼつたん、地震や火事のやうな見世物です。——餘りお酷い。私も田舎ものの意地がある、此のま、お歸し申しませんから。」

「平に、御勘辨を——從姉が熱いのを一本つけて、饅餡を煮ながら待つて居ります。些と晩飯に酔過ごして、晴の場所、ぐらぐらと坐睡したのは、新嫁の娘を連れた其の從姉が、どんなに極りが悪かつたでせう。叱言は屹と其の方で申聞けます。其へお任せなさいまし。」

「馬鹿にしていらつしやる。……歸しませんよ！」

「では、何うなさるお考へです。」

「其の一銚子とお饅餡を、此方へお任せなさいまし。」

「斷つておことわりを申したら。」

「此なり、くひつきますから。一所に川へ落ちませう。……あのくらゐ恥かしい思をして、お弟子たち新地中の顔が二度と見られません。口惜いから、貴方を殺して私も死にます。擱つて離しません！水の中ぢや、貴方は火事です、緋鯉にお成んなさいまし。……私は鯰に成りませう、地震ですもの。」

柳が動いて、

「口惜いねえ。」とすゝり泣く聲がする。

柳生銚三は興を覺した。此の婦、酔つて居る？……

「事實、其の火事の次第を話しませう。姉さん……で構ひませんか、御新姐ですか。」

「否、私は幽霊。」

「お幽さん。」

「は。」とまた幽な打笑む氣勢。

「あの女紅場ですがね、昔、彼處が寄席だつたのを御存じですか。」

「聞いて居ります。漸ともの心覺えました時分ださうで。」

「七歳ぐらゐな時でした。其處へ、東京から來た講釋が掛りましてね、眉毛の太い、色の淺黒い、瘦せた坊さん。名は覺えて居ませんが、黄金水大盡杯と云ふ題で、紀伊國屋文左衛門の中の、振

袖火事と云ふ、江戸の大火を讀んで居たんです。

晝席です、寺參の歸途に、一度父に連れられて聞いてから、續が聞きたくつて堪りません。母に小遣を強請つちや、毎日出掛けました。よく家でも出しましたね。」

六

「三枚橋で、美しい小姓に逢つた、其が通魔で。」

と、言ひかけて、大川の水に何となく薄明りの映すのを視た。流の上を靄が通る。雨は霽つたのである。

「それから娘が戀煩ひをして、白菊を染めた、紫地の振袖を抱きしめるあたりから、幾日通ひましたかな。今で言つては可笑いけれども、圓顔の小僧が、ちよこなんと胡坐して、神妙に聞惚れてるから、汗の腕まくりをして大火事を讀む、講臺の坊さんに、可愛らしく見えたらしい。眞紅な苺を懷紙に包んだのを、樂屋から意氣な女房に持たせて寄越しました。丁ど、丸山から、お茶の水の聖堂と云ふのへ飛火をして、ぐわらぐわと燃え上る、火の手は八方へ炎を分けて、外神田、内神田、今川橋を越して小傳馬町を一畝めに淺草見附へ燃抜ける。江戸の町中が焚けるのに、七月の暑い盛だ、聞いて居ても火の中に居るやうで、露を吸つちや呼吸を吐いた、其の時の苺の味

と言ふのはない

と、思ふ處へ、緋の袂紗でお茶が出たんだ。私は苺だと思つた。ちらりと見た舞臺は、一面の花盛、キネオラマの仕掛か何かで、さらさらさらさら涼しさうな水が湧いては流れ湧いては流れるもんだから、火事に龍吐水を注いでるやうに視めく、酔心地にとろくと振袖火事の講釋を聞いて居たんです。……それ櫻川の新曲なんぞ、まるで耳へ入らない。合の手に鉦が入つて、カンチキチン、カン／＼チキチンなどと鳴るのが、此方は摺半鐘早鐘です。火事頭巾ぢやあるまいし、花笠で踊つてなんぞ居られますか。——御免なさいよ。しかしそれは決して今の私ぢやない、小兒なんだ。が、頤髯の生えた野郎が猿のやうに酔ひしれて、坐睡をして居たんぢや憎くなくもなからうけれど、悪しからず思つて下さい、小兒ですから。」

否、憎らうございませう、小兒衆でも。……貴方は、然うして面白がつて聞いておいでなすつたのを、講釋師の坊さんが喜んだとおつしやるんぢやありませんか。小兒衆だけに、一層そりやどんなにか嬉しかったでせう。……私かつて……私かつて、其の、小兒衆がちよこなんと胡坐かいて見て下すつたら、どんなに嬉しかったか分かりません、それだけに尙ほ、なほ私は口惜い。」

銑三は少時言がなかつた。
「私が山姥を立ちました時も、矢張り江戸の火事でしたか。」

今は地震だとも言へなかつた。

「其の紅い蓐を御覽なすつた——薄茶を差上げましてから、餘程、間がござんしたよ。」

「眞個の事を申しませう。……其の時は最う火は消えたんです。火事は済みました。……紀伊國屋の支配人長五郎が腕を見せて、大金を一時に儲ける働きも忘れませんでした。が、唯残つて居るのは、こがれ死をした娘の一念、燃えながら天に昇つた紫の振袖です。虹は勿論、徂徠ふ雲の白いのを見ても、飛ぶ鳥の翼を見ても、皆それが宙を通る振袖に見えて忘れられない、幾年もく。小兒は何時まで惚惚と空を見るやうに成りました。夜は、星のなかにも、其の振袖がちらついで。さうした時は、明星が、其の白菊の模様でした。

其の中に、私は美しい袖を見ました。其の袖に、緋の襲衣が重つても、島田の手絡が紅鹿子でも、決して其が、燃えるものではありません。が、此の故郷に唯一人、其の袖ばかり見えるのが、まるで、江戸の空に燃えながら靡いた、と云ふ、振袖を見ると同一やうに思はれたんです。

其の袖は、私の目に炎よりは輝いたのです。けれども、月の光でした。片袖は峰の三日月、まむきの姿は明月でした。光は、こんな、一葉の草にも浸透る、けれども手に取られず、近づけないのは、空の影と同一でした。

江戸の娘は豪かつた。唯戀の一念に、三十萬軒の家を焼き、八萬の人を焚殺した。が、此の國の小兒はだらしはない、積る思は野山を埋む雪と成つて、やがて朝日にも夕日にも、果敢ない水の陽炎に消えました。

否、消えはしない。此の水上の、醫王山、寶達山の山に今も白く残つて居る。」

七

「僭上なことを言ふやうですが、……やがて、其の醫王、寶達の雪も溶けて、鮎を棲ませて流れませうが、爾時は、眞夏の白山を御覽なさい、戀を封じて、陽の前に純白です。

袖は、爨燹いて居ます、美しい雲のやうに。其の白山の中空にも。

山姥を、山姥を貴方が、と揺起した從姉の口から聞いただけで、私は熊も金時も分らなかつた。唯、白山の雪を思ひました。……氣も心も爽かに成つた。酔覚ですな。」

銚三は柳をかけて、瘦せた肩を震はした。

「……覺めると幕が下りたんです。……悪しからず思つて下さい。……其の袖の見えますのは、二十年の昔も今も些とも變はないのですから。——あゝ、恚う云ふ中にも。」

彼は水の面を差覗いた。けれども、然うするだけでも、手探つて、柳の幹に縋らねばならなかつた。氣勢は、婦と手が並んだやうである。

「たしか、遠くない此の上流には、白菊の瀬と云ふのがある筈です。思へば、それを、模様にして、暗い水が紫に流れるやうです。」

非ず、雨上りの薄明りに、波の面は藤色であつた。

「こんなでももの、貴方の姿だつて、同じ色の袖に見える。」

實際、其の時朦朧として、緑のすだれ繁きの中に、おなじ色の姿が見えた。鼈甲の照る圓鬚の艶、襟の白さもほのめいたのである。

唯、幹の其の手に、婦の手が、柳絮の散るか、かゝつたので、銑三は、ふと片手で、忙しく袂を搔探つた。

「……燐寸……燐寸をお持ちやありませんか。」

指のしなひで、軽く、銑三の手を二つばかり密と叩いて、

「……黙つて在らつしやい、黙つて。」と、お蘭は低聲で言つた。

爾時、丁ど紅梅の寮の門の前を、向うへ渡す——大橋ではない——京の四條の團栗橋に擬へたと云ふ、近頃かゝつた夜目にも新しい小橋の上へ、白い提灯、紺蛇目傘、人影が五六人。

「瀧山の若旦那が歸るんですよ。」

冴えた女の聲が響く。

「千鳥が鳴くやうですね。」

と、言つた。

三聲、五聲、聞くうちに、一群は、墨繪を巻取つたやうに橋向うへ、女紅場の袖を、山の裾の小路へ隠れる。

瀬の音立つて、四邊は死んだやうに寂寞した。柳の絲は静まつた。

「柳生さん。」

何も知つてゐる。銑三は怪しみもしないで答へた。

「私は慄氣としましたよ。」

おくれ毛も幽にかゝる、お蘭は少し俯向いて、

「餘り思詰めて在らつしやるから。私の胸にも、私の手にも、ちら／＼雪がかゝりました。あの……そして其の、袖は、此の土地のお方ですか。」

「然うですとも。」

「御機嫌で在らつしやる。」

「存命です。」

「あゝ、よく、ねえ。」

と、吻と吐息ついたやうに云つて、

「……お幾つぐらゐる……もうお振袖でないのは分つて居ますね。」

「勿論ですとも。しかし、たとへて可いか悪いかは分りませんが、女體の神佛の端麗なのに、男の目で見て自分より年下と思ふのは嘗てありません。其のかはり年老いたと云ふのも決してないのです。」

「え、右に左、屹と年上の姉さんでせう、お幼い時の戀だから。——そして、誰方、何方の方、貴方。」

「……………」

「聞かして下さいましな、後生ですから。」

「否、しかし、それは言ひますまい。」

「あ、屹と他家の奥様ですな、お年頃が。」

と、忘れたやうに指を折るのが、ちらく和白し、今や、薄月夜。

八

「さあ、或は然うかも知れません。」

「だつて、可いぢやありませんか、他家の奥様だつて、其の御様子では、つけぶみをなさるんぢやなし、心で思つていらつしやるのに、些とも差支へはないぢやありませんか。」

柳生の心は然うではなかつた。人に言ふのは、結晶した峰の雪の其の一片を散らすのである。

「ねえ。」

「御免を蒙りたいのです。」

「あ、明けて名をおつしやるのは、封じた雪をお解きなさるやうで口惜いんでせう。一寸、蓑を着たいほど、私に雪をかけて置いて。」と、其肩を手で庇ふやうにした。

「今更お惜みなさいますのは、そりや貴方、罪ですよ。」

「罪以上だとは知つて居ます。」

「では、何うしても仰有つては下さらない？」

其の語氣が、最う一度聞返すと云ふのでなしに、聞くやうにして聞いて見せよう、我に迫つた力が籠つた。

唯、白い手を密と上げて、柳がくれに、軽く、何處かを招いた、と思ふと、溝端に石臼と思つたのが、むつくと立ち、雨樋と見たのが、軒を離れ、松の根らしいのが、ぬつと動いて、前途なる小橋の詰、壁の間、背後の土手の陰などから、三五人、外套に頭巾着たり、莫莖を纏つて頬被

りしたのなんぞ、影がむらくと動いて出た。

距離の最も近かつた、其の頬被りしたのが一人、跣足で、びたくと前へ出た。

柳生は驚いて目を睜る。

「燐寸を持つておいでかい。お客様が煙草をあがりたいたのですつて、……無ければ誰か……」

「あるです。はい。」

手に渡す時、手拭を取つたのは、横肥りした屈竟な壯い男で、太い眉の下に、光る目を、ぎろりと柳生に注いだ。

「あゝ、難有う、——可うござんす。」

壯士は一つ、手拭の雫を膝で切つて、あとへ退ると、潜むものは潜み、踞むものは踞んで、雨上りの雲の影に成つた。

柳生は舌を巻いて、ものをも得言はず。

「貴方、あの中の一人が、此の危い橋の上で、一ツ貴方に突當つたら何うなさいます。」

「死んで了ひます。」と、些と自棄に言ふ。

「然うすりや、私は貴方には生命の恩人。」

「癩に障るから此の流へ打込むのを……許して下さいさる、で、其れがために生命の恩人？」

「否、外に大勢貴方を狙ふものがありますから、恚うして、此方で御守護を申すんです。」

「狙ふもの、私を。」と餘りの事に、彼は聲さへ切つて言つた。

「貴方は、今日、お午頃に、此の土地の人たちの心持を悪くさして、怨をお買ひなすつた事がありませんか。」

「思ひもありません、まるで、些とも。」

「お忘れなさいましたわね、貴方が覚えていらつしやらない事を、或人たちは、お身體さへ狙つて居ますんですよ。」

「人違ひだと思ひます、其こそ確に。」

「それでは申しませう。土地第一の寺院へ、何某の伯爵夫人と云ふのが、今日お乗込に成りました。北陸婦人會の臨時總會と云ふのに御臨席に成るのです。昨日、一昨日あたりから、土地の何と云ふ夫人たちが、白襟紋着で出たり入つたりして居るのは、皆其の夫人をお迎へ申す準備でした。」

「入らつしやるお寺は、貴方の従姉御のお家に近い。狭い町が御通りの花道です。軒を打つて、旗、提灯、幕だの金屏風だの、道へは水を打ちました。……」

「両側に人垣を造つて、お爺さん、お婆さんたちは皆土下座をして居ました。娘さん、嫁たちも、」

親、舅、姑の掟で土下座をしたのもあります。——横から蟻一つ這はないお通筋。
婦人ばかり八九十人、前後に白襟紋着の、お供の俣が揃つて、其の寺町へ、遠い山へも道を曳いて、雲から舞下つて伸した處へ、向うから唯一人、杖を支いて、肩を斜つかひに突掛つて來た方がありましたつけ、あれは、誰方。」

九

暫時、決して其は、肩を斜違にして突掛つた次第ではない。久しぶりの、もの珍らしい町の状態に、見物の目のうか／＼して、茫然出先から歸つて來て、思掛けずハタと其の貴夫人たちの一行に出逢つた。

唯、心着いた時は、前驅が四五臺抜け越して、正しく擦違つた一臺の俣の兩側には、紋着の羽織袴、白緒の草履、それに、高帽子を冠つた不思議な小父さんが二人づゝ左右に泥除に絶るやうにして呼吸を切つて駆けて居たが、二人俄然として立停まつた。俣も、留まると、突如、其の二人が、柳生の兩腕を確と掴んだ。

「無禮ものめ。」
「退れ。」

「何だ、天下の往來だ。」

柳生は思はず毗をキリ、と切つた。

「踏殺せ。」

「撲れ。」

と、喚いて、奉迎の垣が左右から、眞黒になつて柳生の前後に崩れかゝつた。

「却つて失禮です、却つて失禮です、お静に……俣を疾く。」

と、後列の四五臺めと思ふ處から清い聲して一人の女が叫んだ。波を疊んで打つやうに、俣が一齊に動出して、柳生は一人、沖へ船足を眞直に切つて通つたのである。

手と手は幹にありながら、柳の隔かもどかしい。銃三は、熟と其の顔を瞻つた。

「お分なすつて、——私はお顔を覚えて居ます。……お互に、まあ、……伯爵様には、お世話

に成らない、いゝ時に生れたんですけれども、當地では然うは思ひません。……それにね、何で

すか、いつかのね、議會の選舉に運動して、まけた方の、まけ腹の有志家壯士等が、こんな時と

思ひますから、何の彼のツて危いわ、貴方。

若旦那や從姊御に、お聞かせ申すと、唯御心配をなさいますから、内證で私の心ばかり。……

ですが、手配をいたしました。御歸京の汽車に召すまで、決してお案じなさいますな。」

此のみづからがあるからは、百萬勢と思召せ……

お蘭は師團長ながし中將の妾であつた。中將には正室がなかつたのである。

柳生はかなぐるが如く帽を取つた。

「眞個、生命の御恩を被りました。」

「ですから、私に、其の貴方の、その袖のお方を聞かして下さつても可いでせう……田舎ものは恩に被せるものですわね、ほゝゝ。でも、ほんの燐寸をおたてひき申すぐらゐるな事なんです——めしあがれ。」

と、パツと擦つた……お蘭はいつか下に居て、黒小袖に庇つた火は、錦の帯に輝いて、柳かくれの袖の影に、一炬、篝火の如く銚三の瞳に燃えた。頸の雪もちらくくと、……蓑と言つたを思出す。……濡れたやうなが寝れて見えて、聲と容子を思つたより、年紀や、長けたも可懐い。

「あれ、遠慮をなすつて、消えたではありませんか。」

消ゆれば、そつと月が映す……徂徠ふ雲や、白菊の花の影、小袖の色も藤紫に、其の面影さへ似たのである。

銚三は戀を語つた。

十

「朝は菩提寺へ参詣しました。杉菜の中に線香を手向けましてね、從姉と二人で墓まゐりを済ませると、其の歸途に、寺に近い、あの麻野町と言ふ、御存じの此の流の裾にある町です。田圃に近い、場末です。小流のある辻から、それとなく、用たしをすると云つて、從姉を歸して一人に成つた、袖の、其の人を訪ねようと思つたのです。」

袖の姿は、いつも中空に消えませんが。戀も、白く山の峰に、其月影を浴びて輝いて居るのです。が、近づけない事は、夢に視ても、其の人は、御殿の中に、多くの女中に齊眉かれて居たり、それかと思へば、藤の咲いた紫の中に渡殿の橋にかくれたり、門と思へば山の如くに藁が高し、垣と思へば濠が深し、城の中に居ると同一で、幻にも、姿も顔も見ることがなかつたのです。

——近頃不思議な夢を見ました。

晝とも夜とも分らない、寂い裏町とも思ふのに、青いが煙るやうな生垣つゞきに、白い石の輪の井戸があつて、其處に竹棹に縋つて、後姿で、すらりと立つて、——恚う水を見て居る、優しい、美しい婦があります。不思議な水仕事、確に其の人だ、と思ふと、夢だから遠慮はなかつた、時に自分とは見ると、學校通ひの生徒です。

(汲んであげませう。)と云つて、飛つくやうにしたと思ふと、何にも居ない。井戸側は眞白に乾いたのに、濡手桶に汲たての水が半ほど、それに圓い月が映つて居ました。……笑つては不可ません、餘り果敢さに涙を流すと、冷い枕に目が覺めたんです。

いとせめて戀しき時は烏羽玉の——

私は裙を返して寝て居ましたよ。馬鹿だね。

今度、當地へ来て、それとなく聞くと、其の人の縁づいた家は、城の陥つたやうに滅びて、御新造は、實家へ落ちたのだ、と言ひます。其の實家も、私の知つて居た頃とは違つて麻野町へ、と云ふのが今日訪ねた處なんです。

番地も、よそながら聞いて居ました。が、一軒々々、密と門札を見て歩行く心をお察し下さい。眞晝間、問者に成つて、敵陣の中を窺つたつて、こんなに、どきどき胸の動悸はしますまい、と云ふ中にも、あの邊は場末です、禿げた格子、崩れた廂を見る毎に、捜すものが、捜しながら、こんな家でないやうに、と其の人のために祈るんですから、違ふ度に吻とする。——二度、聞いたが知れませんが。出外れると原に成つて、此の川が瀬を淀まして流れて居ます。思切れないで、もう一度あとへ引返すと、向うから、薪屋だと見えて、老人が一人、此の陽氣に袖なしのちやんちやんを着て、薪を一束背中に背負つて、杖を支いて來ました。其が奥山で木樵に逢つた氣がし

ました。……此の雨の所爲ですか、土塀の崩からは、ひら／＼陽炎が立つ癖に、陽の色は白く透過つて、手足は熱いくらるなのに、袖がひやくと寒いのです。聞くと振返つて、大な樫の樹を教へたんです。その狭い路を入れと言ふ。

大な樹で、此の影が映す爲か、小路へ入ると月夜のやうに道が蒼い。教へられた處に、犬小屋同然なのが引傾がつて、おしめが乾してあるから吃驚したが、空地を措いた其の隣家で、可なりな構です。

其の人の兄の家です。此の人と、以前一寸知合でした。此方ばかり氣が咎めるから、年始状さへ出した事がない。

と、言ふんですから、直ぐに案内が申せますか。二三度、行つたり來たりするのに、我ながら、犬にも踏まれず、芋蟲がころがつてる形に見えます。無理に羽を生して格子を潜つた、がらりと云ふのが森とした處へ響いて、震上つた。

すぐに框が開いたんです。誰だと思ひます、十三四の可愛らしい少年が、丁と、行儀よく、お辭儀をしたので、

(お宅ですか。)と唾が乾いて漸と言つた。

(え、留守ですが。)と聞くが否や、何と思つたか飛出して遁げました。が、身體中瀧のやうな汗

に成つて、眞暗に駈出すと、路傍の桶屋の竹籠にぴしりと吻ねられて、一つ怒鳴られて又遁げました。」

十一

「此の下流の、三つ目の、小橋と云ふの上まで来て、流に枝垂れた柳越に、醫王山の雪を見る

と、欄干に凭れながら、何とも言ひやうのない涙がひとりでに落ちたんです。石垣の上に石垣を積んで、も一つ高い石の塀は、いまの人の城でした。下はもの凄いい淵なんです、誰かの思でせう。

よせば可いのに、いき休めの煙草を飲んで、うつかり、その柳の瀬へ、煙管を落して了つたんです。せめて煙には化けますまい。

まだ未練らしく、大廻りして、坂へかゝつて、其の城の大手の木戸と云ふのを遙に視ながら、藪壘を潛つて屋敷町へ抜けました。

寂い處です。崩れた土塀と、まばら垣ばかり。誰にも逢はず、正午頃なのに人通も何にもない。家々の背戸も庭も李の花が盛でしてね、少し薄青味のあるのが交つて、まるで暖い雪なんです。道は、それよりも乾いて白い。

辻に、四方から李の花の咲満ちた角の所に、夢で見たと同じ形の石輪の井戸が缺け／＼に成つて曝されて居ました。何故か、あのくらくら寂しいものはない。其時さし棄の竹の釣瓶に絶つたのは、夢の其の人ではなくつて私でした。

ちらく／＼と李が散るんです。白山が雲に高い。

俯向いて覗くと、緋の手絡が水底に映つた。十六の時分れたまゝの。はつと顔を上げますとね、陽が朦朧として宛然晝の月の影です。

飛込んだか、落ちたか知れない。

白い胡蝶が、ひらく／＼と頬を打つて舞ひました。なくなつた母が留めましたか、従姉が呼びに來たんでせう。案じて居てくれませうから。お詠の、晝の煮ものの冷めないうちに。

李の花の散る中を、其の胡蝶の行く方へ、ふらく／＼と歩行いて來ながら、あゝまだ情ない。――あの時出迎へたのが其の人だつたら――まだ家を捜す時のつもりで、何處かの門札を覗くと、赤間としてありました。字を見たばかりで、李も蝶も眞紅に成つた。緋手絡掛けた結締が一足さきへ、……すつと行くぢやありませんか。

目も血走つて居たんでせう。其の耳へ、ぐわんと響いて、あの――
(無禮ものを)を啖つたんです。

——誰にも申さない事です——貴女は恩人ですから……」

「澤山恩に被せましたね、田舎ものだ、とおさげすみなさいませう。」

「飛んでもない、雪の消えない國なんです。」

「あゝ、御果報な方ですね。」

「迷惑のどん察して居ります。」

「先には其の御新造さんにお目見得をいたしました。近ごろも御容子が、花桐の香のやうに、高い處から聞えます。おうつくしくつて入らつしやいます。あの、氣高いのに、勿體ないんですけれども、貴方、あやからして下さいまし。」

二人は熟と手を取つた。

「お怨みは解きました。が、此の手も解かなければ成りますまい。——貴方お見送りはいたしません。私を見送つて下さいまし、では……然やうなら、お坊ちゃん。」

颯と小走りに土手を行くと、松の枝にかくれた影を、やがて橋に曳いて唯一人、越路一番踊の上手、若く艶なる山姥が、山際近き月下の橋を、袂を拂つて行く姿。

時鳥より冴えた聲を、梢の雲に投げかけて、

忘らるゝものならば、

わすれたいわいなと目に涙

白菊の瀬は彼方に、と見ると、水の紫が、月に颯と町の方へ。

傘を袂に、橋にかつて、思はず銚三がさしうつむくと、廂合の樋竹も、路傍の石臼も、土手の上の松の根も、齊しく一揖して彼に頷いたのである。

繼
三
味
線

「誰方。」

と長六疊、妙な間取りの、それが茶の間で、壁際に押着けた長火鉢の前に、其の壁の方を向いて、圓鬚で坐りながら、煮ものの鹽梅をしつゝ、内の細君が玄關へ聲を掛けると、

「私、私」と無雑作に返事をして、少し性急らしい聲音で、つか／＼入つて来たのは、琉球絢の書生羽織、縞の衣服、黒献上の角帯をしめた、三十二三の瘦せた男で、此處の主人の従兄弟に當る、餘り金に成らぬ洋畫家で、廉三郎と云ふのである。

「ね、そら、廉さんだ。」

と火鉢の縁を白い指で一才弾いて、見迎への片頬に、細君は莞爾して、

「……何うも然うらしい聲音だと思つた。」

「忝ない。……聲音を聞知つてくれようと言ふのはお澄さんばかりだよ。」と軽く會釋しつゝ、背後を通る。

向うで、座右の籠火鉢の前へ、引摺んで襖際の座蒲團を一枚直しながら、

「相かはらず鹿匆かしいなあ。……何處の歸途だえ。……」と云つた。

窮屈さうに、押入を背負つて、深山路の丸木橋にも較へつべく、脚には蔓の搦みさうな、大古で、板に透間の見える卓子臺の前に控へ、海鼠腸で麥酒を傾けるのは、半之助と云ふ、即ち主人で、寶生名取りのお能役者、年紀は廉三郎より二つ三つ少いのが、羽織を脱いで黒羽二重の紋着で、舞袴のまゝで居る。

「やあ、西片町さん、入らつしやい。」

と、も一人聲を掛けたのは、小縁前の障子の中に、柱を背にして、同じく袴、同じく紋着の大胡坐で、湯香を卓子臺の端へ御免蒙り、二升入り貧乏徳利を、酒肥りで象の如き膝頭へ引着けた、太腹の前に、更科の蒸籠九枚と云ふ豪傑は、半之助が夥間に高砂やの強のもの、……芹生千藏、湯香の底をぐツと煽つて、ほうとも言はず。蒸籠の空荒へ、茶碗酒の口を切つて、

「如何に山伏、一杯如何。」

と揺ぐが如く、袴の膝を居直つたは、此の男豫て酒頭童子——鬼の繪でない、花屋敷に御存じの可愛い人形——に肖如で、渾名のあるのを、當人心得て居るのである。

「何うして、茶碗酒を冷で煽られるやうな大将ぢやないよ。」

と半之助は、麥酒を鶉呑にして、頭を掉つた。

と言ふ人も、二升徳利に對して、麥酒の瓶は、餘り幅の利いた勇士でない。が、實は世になき親譲りの大酒を、秋霜烈日、霸王の如くだつた、故深川の家元から、遺言を以て禁じられた、發心の柘榴である。

見給へ、其のかはり、膳の傍に、五本並んで素面で居る。

酒頭童子は追掛けに、

「ぢやあ、麥酒を、半さん。」

半之助が黙つて笑ふと、細君のお澄が火鉢の前から、銘仙の袖を開いて、一寸掌で遮つて、其の手をすうと廻して指をさす……敷居越、八疊東向の片隅に置炬燵があつて、嬰兒を寢かした、色白なのが仰向けに、枕が緋の色、ふつと長い眞紅な耳に見えて、兎のやうに愛々しい。

酒頭童子は、禁厭はれた蜻蛉と云ふ身で、お澄のさした指の先に此方から大眼玉をきよろつかせて、

「何故、麥酒が不可いんです……はてね……とは又……何うして。」と頭を揺る。

爾時、廉さん、苦笑して、卷藁の灰を拂き、

「此方が、夜更しをするもんだからね。」と、目で半之助を教へて言つた。

二

「それ、待つ身に辛きとか何とか云ふんで、置炬燵を指すのはね……今の私の聲音で、夜中の待惚けを思出しさ、——怪しからん、主人をそつとして置いて、客に抵るのだから堪らないんだ。」

「御尤！」

酒頭童子は、圓々しい肩を揺つて、大蝦蟇の如く合點みながら、

「ですが、貴方の麥酒を飲ないのとは、聊か縁のない事のやうですな。」

「何ね、それも酒ゆゑと言ふので、主人にも飲むなとね、諷する處ありなんですよ。」

「嘘、嘘、嘘よう。」

お澄は向直つて口惜さうに、細い縞の前垂の膝を刻んで、

「憎らしい、嘘ばかり。千藏さん嘘ですよ。内ではね、麥酒を飲むのにお醫師様にならう言はれつつ、壘ごとお燗をするんでせう。湯沸や銅壺に入りますか……火燗ぢや危いし、小兒に掛つて手は足りないし、するもんだから、炬燵の傍へ並べて置くと、あとからく丁ど可加減に暖るんだわ。其の炬燵でさ、襦袢を取替へたりなにかするのを御存じでね。——兄さんは——もう口惜いから叔父さんだ……」と、黒縹子の半襟をクウと扱き、

「叔父さんは、自分が小兒がないもんだから、汚ながつて、それでお飲がりでないのですよ、憎らしい。」

「可恐しく憎がるね、兄貴も又可恐しく憎がられるぢやないか。」

と半之助は麥酒を手酌で、

「何だね、……内證の悪事があつて、君ン許のお光さんが、當家の山の神に吹込んだものらしいね。」

「蓋し鍋下は其處等ですな。」と酒頭童子は大徳利を引傾げて、どくどくと湯呑に注ぐ事、恰も生擒の上臈の生首を抜けるが如し。

「憎まれる分は往生をしますがね、叔父さんは些とあやまるよ。……何分にも色氣がない。」

「……同感だよ、私は、お父さんでさへ、ぎよつとする。」

「そんなら、半さん。」

と、お澄が可厭な笑ひ方。

「お澄や、おぢや。」と酒頭が、紋着で科を遣る。

「あ、此の三十日が可恐しい。」

と従兄弟二人が、殆ど同時に、同音に思はず音を出して、不圖顔を見合はせた。

「は、は、不可ない、不可ない。」と廉三郎が額を壓へる。

「座直しに一杯、熱い處を。」

半之助が顔を向ければ、

「心得て居りますよ。」

とお澄が、既に立構への腰を切つて、

「……件の湯豆腐でね、」

「いや、それには及びませんよ、眞個だ。」

「私を嫌つてさ……叔父さんがお嫌ひな襦袢の手は洗ひますよ。」

「あれだ！」

「ねえ、坊や、」

と茶棚越の柱に半身、炬燵を覗いて、笑ひながら勝手へ出て行く。

「何にも無いがね、緩りしたまへ。」

「いや、然うもしちや居られない。」

「急ぐのかい。」

「私は、そんなに急ぎもしないがね、横濱の方は急ぐらしいよ。」

「あ、鼓の事だね。」と半之助が、飲み掛けの硝子杯の端を軽く控へて頷いた。

「其の相談に來たんだが、半さん君は出掛けるんぢやないか。」

「否、つとめて歸つた處なんだよ。……些と氣骨が折れたのでね、呼吸つきに一杯遣つて居るんだ。晩のは宴會です。此方が遊ぶのだから遅く出掛けても構はない。」

「お今どん。」

と、酒頭童子が臺所の女中を呼んで、

「お爛をするんなら徳利をお持ちなさい。しかし、最う澤山はございませぬ——はじめツから。」と極低聲。

「存じて居ります。」とお澄が言つた。

「南無三、聞え候な。」

「劔たわ……大江山の。ねえ、お今。」

三

廉三郎は、ハツとしたやうに、其の「劔」を、耳よりは目で聞いた。

「あ、其の、劔の事だよ。」

「何かね、兄貴、此の間の春柳亭の美人の事ではあるまいね。」と半之助が故と微笑む。

「あ、成程奇遇だ、此奴は。」

廉三郎は腕を拱き、

「然う言へば、あの女は、たしか名を劔と言つたね。が、無論其の話ぢやないんです。急ぐと云ふくらるだから、鼓の事だよ。」

「さあ、あれだがね。——む、可いとも、些とも構はないよ。君にも相談に預つて貰ひたい事なんだ。」

内談か、席を避くべきや、と少いが苦勞人の酒頭童子が氣を注けたのに——半之助が頭を掉つて、恚う言ふと、千藏は膝の白をお伽話の如く据直して、

「承つてよろしければ、へい、藝妓の名にも、鼓の名にも、劔と云ふのがあるやうに聞えますが。」

「あ、其の美人に就いちや、兄貴に聞かせたい事があるが、半之助は言ひかけて、千藏に向きかへつて、

「大事な鼓の事から話さう、若い時、萬三郎と云つてね、……廉さんや私たちには祖父に當る、亡くなつた私の父の親父、廉さんには母の親父でね、葛野流を打つた爺さんが持つてたのさ。」

「あ、聞いて居る、萬三郎と言ふ老人は、大鼓ぢやあ近世の名家だつたと聞くね。」

「血統の事で、恐縮だがね、とに角打てたと言ふんだよ。……續いた大鼓の家だつたんだから、代々其の祖父さんまで持傳へた、織居の作の胴なんだがね、蒔繪の箱に、劔と言ふ銘がある……と言ふ次第は……此は私よりか廉さんの方が可いな。」と又一息に傾けた。

「何、私だつて、唯推量に過ぎないのだが……千藏さん。」

唯、倒にして底をしたんだ二升徳利をうつかり離すと、はずみに轉がるのを、おつとしよ、瓢箪総で慌てて壓へて、首實檢と置直し、

「は、謹んで承はります。」

「然う更まられては困るんです。しみつたれな話だから。——久いあと、明治維新の騒動に、お能役者一同が、爰の家をはじめ、散々に、離散し、流轉し、凋落し、と言ふ、落葉が落ち、落ち、落散る時、萬三郎爺さんが、私の故郷、御存じの北國へ落ちて行つて、山深い雪の谷に埋もれたんです。一世の思出に、打てば響いて、可憐い、都の空へ、せめて劔にも聞えるやうに、と其の意味で、鼓に銘を打つたんだと思ふんです。」

其の胴は、一度、私の母が預つて、其が亡くなる時、祖父さんには嫁——私たちには義理の叔母——（半さんの父親の兄が其の叔母の夫で、これは祖父さんより以前に矢張り旅で亡くなつて

居ました。）——叔母の手に渡したのが、何十年ぶりかで、今度東京へ歸つたんです。鼓から言へば、劔が眞の音に成つた、本懐と言つて可いんですよ。」

「それは可いがね。」

半之助が言ひ繼いで、

「叔母の手許の都合で、今度其の鼓を賣らうと言ふんだ。叔母は、田舎から出て、今は横濱の、娘が縁附いた家に寄食つて居るのさ。もう一人の娘と一所に——

叔母には娘が二人ある。私たちの矢張り従姉妹で、皆な我々より年紀上だがね。横濱のは妹の方で、姉は、故郷に居て、おなじく縁づきさきで、叔母を買て居ただけれども、永年折合の悪かつた、夫婦なか、到頭去年の夏破裂して、姉が家を駈出して、一時行方が知れなく成つたもんだから、妹夫婦が、横濱から故郷へ出向いて、あと片づけをして、お題目ばかり稱へて居た、老年の母者人、われ々には其の叔母なる人を連れて來たと云ふのでね。」

お澄が銚子を持つて來た。

「はい、お爛のいゝ所、例によつて、叔父さん、お手酌で。」

「一寸、叔父さんは待つて下さい。いま叔母の噂をして居る處だ、こんがらかつて堪りますか。可歎、叔母は七十三ですよ。」

「御同様に、ハハハ、の懐中工合と云ふ中にも、ですな、妹と、妹婿、婿も最う老年で、若い内稼ぎ貯めたのを夫婦で少しづつ、食ひへらすのを、心細いから、妹が琴の師匠で、所帯を扶けて居ようと云ふ其の横濱のうちへ、叔母と姉娘とが引取られた始末だ。處が、衣類、諸道具、何一つ、目星いものは唯其の鼓ばかりと云ふので、家の寶なり、記念なりだが、背に腹は替へられない。幾干にでも値をよく賣つて、まあね、姉娘と叔母とで、一錢菓子、小さな煙草店でも出さう、資本にしたいと言ふ、……飛んだ果敢ない仕誼なんだかね。」

「はあ、成程、名譽の鼓一代の有爲轉變、分けて大鼓はお囃子の元締です。他人のやうには思はれません、こりや、茶碗でなんぞ、煽つて居る場合でない。」と酒顔童子が鬼の念佛。

「其のかはり、熱いのお相伴なんでせう。」と横合からお澄が笑つた。

童子は額に合掌し、數珠さらりと押揉む眞似して、

「古い奴だが、船中にて然やうな事は申さぬものにて候。」

「事を壊すね、お前は。」と、半之助が擦つたい顔してお澄を睨む。

「だつて、親は泣よりの相談ごとをして居るやうぢや無いんですもの。紋着で胡坐で、容子つた

ら、葬式がへりに、土手の蕎麥屋で、三分なかなす智慧を出し、と言つた形ぢやありませんか。」

「可いよ、お前は學者だよ。」

「學者が、唯今湯豆腐を献上いたします。」と、また莞爾して、お澄は立つ。

「さて、知盛は失せにけり……と、もう一つの、春柳亭の方の筈の話にしたいが、廉さんの手前、速かに然うも成るまい。」

と額を撫でた、半之助も些と酔が廻つて、

「申戲は止して、我々には工面が着かず、廉さんなどは、祕藏の重寶、深窓の娘に身賣でもさせるやうに、惜しがるんだかね。私は、端から意見が違つて、實は賣る方は贊成なんだよ。……此のね、其がだ、鼓の身に成つて察して見ると、記念だ、重代だと云つて、叔母さんや従姉妹たちの袖に密と包まれて居るよりか、然るべき人物の手に抱かれて、何十年來祕めた聲を、能樂の天地に、大に鳴つて見たいだらうと思ふ。時節到來、鼓に取つては。……處で、人の手に掛るにしても、女子供の初午の太鼓や、狸の腹鼓のやうな音は出したくなからう。行きたいのはお流儀の手利の許です。」

……ね、廉さん、一つ僕がお酌をしよう。」と扇をさす手に、丁と注ぎ、

「此の間、話があつて、私がああ鼓を預つてから、人にも見せる、彼方此方、相談もするのだが

ね、實はお素人には、餘り向かない品なんだよ。同じ事でも、これが小鼓の方だと、近頃は貴婦人令嬢、稽古に有頂天と言ふ處だから、羽が生えて飛ぶんです。が、それも蒔繪の有る方が裝飾に成るから望まれる。……それこそ、一挺で千兩三千兩と云ふ勢だけれどもね、大鼓の方は餘り望み手がないのです。……習ふものが少いから。……それでも、昔の大名道具で、金高蒔繪なぞ云ふのだと、一廉の價もしよう、だがね。

然も祖父さんの、あの笏は、烏胴と稱へてね、千藏さんも知つてゐるが、純商賣人の使ふ蒔繪なし、見た處、玉川に落ちた砦の杵を、月夜に拾つたと云ふ形なんだから、素人は欲しがりません。尤も商賣人の方には、我も我もと、望手が澤山で、中にも今のお流儀の家元などは、あれを見せると（織居の中でも名作だし、さすがは持人が持人だけ、柔かに美しく、ものの見事に打込である。長い月日の照降に、まだ一點のくるひもない。）と些と極りの悪い譽方で。（家の寶にもいたしたいが）可いかい、（いたしたいが）さあ、此處なんだ。……」

不斷、口數を利かない半之助が、ものに激したやうに言ひ續けて、息繼の麥酒をぐいぐいと又呷つた。

五

「ね、他事とは言はれない。此の商賣人と成ると、道具に凝つて大金を出しません。出さんのぢやない、富豪や成金のやうに……どころか、まるで雲泥の相違で金がないのだね。——家元も手離せないほど欲しいには欲しいけれども、代金の處は、と言ふ。……さ、其の代金の處が、叔母さんや、姉さんたちが、折紙の心づもりと較べると、半分と言ひたいが三分の一足らずだよ。……賣物には花だから、景氣に言へば、千圓のつもりが雑とまあ、三百兩です。

家元も、それではお氣の毒だから、餘所へ見せる、……と云ふのだがね。——其の折紙とてもさ、買手があつての上の事で、其の買手が、今いふやうな次第だから、何時あるか分かりません。

——烏胴と来て大鼓だから。

商賣上、そりや私は、大名にも、華族にも知己がある。來歴を言つて相談すれば、有餘る身上で引受けないとは限らないが、それだと鼓が死んだ了ふ。藏の中で骨董に成らないまでも、拙に打たれると、胴の調子に狂ひが出て、鼓の音色が濁るんだよ。一分、五厘と云ふ、くり方と手の研一つにあるんだからね、商賣人でも、第一私なんか手も出せない。あれだけの品と思ふと、紋着の上へ密と乗せて見るくらゐさ。……だからね、私としては、大名にも、華族にも、富豪にも渡したくない、其の家元に譲りたいんだよ。

尤も、時を待つて、其のうちに、と云ふのだつたら、高價なものに成るかも知れない。……叔

母さんの方も急ぐと云ふし、……急いぢやあねえ。——いや、急がないまでも、急には大した素人の容はあるまいと思ふ。が、それぢやあ、する／＼で話が干ない。——私は寧ろ、千兩の客が現に爰にあるとしても、三百兩へ渡したい。情人に身を任すんだ、旦那を止して。……些と當世でないかも知れないが、昔の遊女、藝者の意氣だよ。われ／＼藝人の一族だ。」

半之助は、衝と卓子臺の端を打つた、が、タンとは響かず、右の古物でストーンと鳴る。よし其も、爰に硯の音がしたら、酒どころでなく泣かねば成るまい。

「君が承知で、叔母さんや従姉妹たちに納得さして、家元に渡さないか。鼓のために頼むんだよ。實際……」

と云ふと聲がしめやかに成つて沈んだのである。

酒頭童子が聞きつゝ、むく／＼と身を緊めたかと思ふと、大粒な涙をぼろりと泣いて、「同感です、私もね、はな聞いた時は、然う云ふ事情なら、一つ知己の成金を煙に捲いて、すばツと出させよう、と思つた、心當りが無いでもなかつたんですが、成程、せつかくの鼓のためには、風呂敷づつみをぶら下げて道具屋の眞似はしたくない。廉三郎さん、出来るものなら、一つ、しめて下さつた方が結構です。」と、我が事でもあるやうに、手をつくまでに言つたのは、實に一藝は頼母しい。

「贊成々々。」

「藝者、遊君の意氣は嬉しいな。……」

と、そんなことのみを嬉しがる、おなじ若手の花形の、姿も相舞の對に揃つた、藤波、松山と云ふ兩人、までは可いが、一人は檜物町に、年増があつて頤か瘦せ、一人は新婚で目がくぼい、生命がけの色男、鶴と龜とが舞袴で、廊下から並んで入つた——晩の宴會に、こゝで落合ふために一所に來たのが、茶の間の話の、思はず眞に入つた處、と廊下傍の臺所口で、お澄の目が留女で、いままで控へて居たのであつた。

「いやあ、ひよろ／＼と出て來たな、女の子の影法師等。」と酒頭童子が指を輪にして眼を睜く。

「さあ／＼天下は穩かでなく成つた。——眞面目な話はして居られない。……しかし兄貴、」

と半之助は目をしばたいて、

「此の人たちの前につけても、身勝手のやうだけれど、實に私も、上手の手で打つて貰つて、舞臺の上で……生れてからまだ見た事のない、世を隔てた祖父さんの、其の硯の音が聞きたいよ。」

ほろりとしつゝ、ト莞爾して、

「金もなくつて、鼓の情人に成りたいのさ……何うだい、些と圖々しいかい。」

廉三郎は、拳をしかと膝について、

「可、從姉妹二人、叔母もともに、……其の遊女、藝者の意氣だ。」と肩を聳かして言った。

六

銚子が一時に二本出て、話題が春柳亭に於ける美人に替つた。……其の筈と言ふ柳橋の藝者の名は、隅田川の流に響いて、若い三人も豫て皆知つて居た。

「聞けば、猿樂町や、九段の舞臺へも来た事はあるさうだがね、かけ違つて、私は、ついお目に掛らずさ。それがね、先月、正月の、六日年越の夜、廉さんと二人、濱町の春柳亭、ね、俗に御殿とか言ふとさ、金燦爛な待合へ呼ばれた時、其の美人に逢つたんだよ。」と半之助が言ふ。

廉三郎は引取つて、三人にまた話した。

「私たちを呼んだ客は、京都の請負師でね、いつか、私は旅行、半さんは催會があつて京都へ行つたのに、西石垣の松華樓で、旅宿が一つだつた時、二人で其の男に知己に成つたんです。正月早々日本橋の或旅館から、頂づけ自動車飛ばして来て、東京へ遊びに来た、直ぐに何處かへ飲みに行かう、と誘ふんですが、豫て酒の上のよくない、些と……どころか、大分に亂、と云ふので、お荷物な事を知つてからね、聊か高慢だけれども、止むを得ざる前約ありか何かで、體よく辭退に及ぶ、とそれぢや明日と言ふ。都合が悪い、明後日と言ふ。さあ、と遁を張る。夜分不

可なれば、晝間、晝間いけなければ朝でもと言ふ。いや、いづれ此方からお宿へ、と歸したが、歸るか、歸らないうちに電報を寄越す、取次で呼出しの電話が懸る。……私にさへ其の勢だから、半さんの方は又其の猛烈さ察すべしで。とうとう六日の晩に、それも、好い心持に、うとくと一寐入した處を、無理にも起きて、御招待に預からなけりや成らない事になつたんです。尤も半さんと打合せて、此方も屹と行くからと言ふ約束なんでね……九時頃から濱町へ溢々。

何、一體が、お茶屋へ溢々と云ふ柄ぢやない。飲むなら蕎麥屋で、したちは、よしだが、御殿で請負師はあしらひ兼ねる……半さんも知つて居るけれども……春柳亭へ行くと、(お待兼)か何かで、女中がさやくと帯を鳴らして奥座敷へ御案内。ト金屏風の裡に右の請負師大盡の、てらと分けた頭髪が光つて居ります、色の眞黒な五十餘りの肥つた藝者が、(入らつしやい! おやまあ嬉しいこと、お揃ひの頭髪で。)と來ました、人をつけ!

廉三郎は馴れた手酌で、ぐつと呷つて、

「濇習の地を弾きやしまし、野郎にお揃ひの島田と云ふがあるものかね。おまけに風邪氣で雲脂だらけと云ふんです。……馬鹿世辭を云ふか、調子はづれにトチ狂ふ。悪く權高く澄ますのがあるし、男でさへ顔から火の出る大口を利くかと思へば、少い妓にべこくして、涙の出るやうな、みじめなのがある。客も五十を過ぎたら遠慮をして遣るから、藝者も四十過ぎにややすこつた。」

半之助が笑ひながら、銚子を取つて、

「まあ、然う怒るなよ、兄貴。」

「可、可、い、兒だ、怒りはしない。が、見て居て果敢なく成らあね、さみしいよ。……のつけに、から世辭を食つて悚然とした處へ、床の間へ席を取つては恐縮として、二つ座蒲團の艶々としたのが堆く並んで、まだ半さんは來て居ない。で、次に坐つて居たのが、當日負けた、何とか言ふ素敵もない大きな相撲取さ。どうせ取るなら勝てば可いのに——また、叱られるがね、私と違つて、此の人は相撲と來ると夢中だから。」

と火鉢の縁で、半之助の手に手をのせつゝ、廉三、三傑に對して曰く、

「大盡は、暮方から、ウイスキー、カクテルの立てつけで、酔ふと蒼く成る質。最う些と舌が引釣つて居て、(ようこそや、や、や、や)と、ぐたくとして、テンテレックと囁すやうに、首をぐにやぐと掉つては肩をのめらすかと思へば、赫と、苦さうな口を開けて、額に稻妻を打たせて、屹と正面に眼を据ゑる。……猛虎、金屏に嘯く處、所謂大虎とこそは成つたるものです。いや、人の事は言へません。」

(寶生の若大將はまだか、直だすか。フン〜)と語つた鼻をク〜鳴らすと、くなくと頭突をくれて、又婉轉る。それ赫と氣を吐いて四邊を睨む。」

七

「すぐに、しよぼ〜と成る。其の眞赤な目を、やがて袂から半巾を揉出して、拭いては擦り、拭いては擦る。……泣くのかと思へば、どたりと横ッ轉けに、難産の赤子が突張つたと言ふ片手をヌイと擧げて、(ガーゼと、硼酸と、水持て來い。)です。」

それから取寄せて目を洗ふのですがね、女中に嗽茶碗を持たせて、ぐたりと頤をつけて、ガ―ゼを突込んだと思ふと、(冷たい!)と怒鳴つて暖くしろと言ふ。やり直して持つて來ると、今度(熱い!)と喚く。……三度目には、(鈍くさい、湯加減も出來ぬかい、鼻つたらしが。)と焦て伸上る胸前に突掛けて、ざぶりと湯を溢す……亂脈さね。藝妓の若いのが、手巾で拭くと、えへ、と笑つて、あ、あ、あ、と泣くやうな呼吸を内へ引いて、頭を引込めたと思ふと、拍子にかかつて、ア、クシンと噓だ。(これい、看病をせんかい!)と喚く下から、(目かいも見えエぬウ)何とかと、義太夫を兩手を掉つて揉出して、(太棹を弾け、太棹を弾け、何や、此のへげたれ藝妓。)と赫と睨む。

相撲が立つた——髷が天井に支へたのが、向うへ、のしんと、セルの袴の大きな膝を、疊んだ蚊帳ぐらるに押開いて、(旦那、少し寝なはれ。)と膝を出す、いきなり、乗つかつて、相撲の

胸に嚙り着いて、ペロ／＼と其の頬を嘗める、……關取も氣の毒さ。いや、最う飲んでます、と私は、綺麗な少いのが三人居た誰かに、有合せた葡萄酒を注いで貰つて、お通夜をする氣で見えて居ると、

（おや、入らつしやい、お待兼ね。）と婆藝者が、金屏風の蔭へ向つて、スツと一膝座を引いて言つた。助かつた、半さんが来た、と思ふと違つた。

屏風越に面影立つて、知らない花の香が、ほんのりと薫ると、此の白けた座の青畳に、淡い紫の影が映す。すら／＼と裾を曳いて、霜かと思ふ羽二重足袋で、尚ほ緋の冴えた袂捌きで、ト手を支くと、藝妓島田。水晶かと思える鼈甲の突透し、同じ平打の笄、白襟の品の可さ。端然として座についたのを見ると、もう幾座敷か猪口を重ねた来た、色の白い、目の瞼がぼつとして、むかひ合つた床の間の是真の繪の、白梅に發と薄紅を映すばかりに見える。……紫紺の葉に包まれた、冬牡丹と云ふのだつて。

すぐに銚子を向けられた時は、私は思はず、飲めないと言つて居た杯を取つたんです。お互に凡夫は可厭だね。

最一つ、つきの可い事は、（まあ、思ひも掛けません處で、先日は失禮。）と挨拶をしたと思ひ給へ——先日にも、今日にも、つい唯今金屏風を半身で顯れた時までまるで見た事もない婦です。

いや、人違ひだらうと言ふと、（否、何うせお目には留まらなかつたでせうけれど、……あの時ですわ、ね。あの時のやうに、お隣へ参りませう。一寸引越しますから、皆さんお蕎麥を配りますわ。）なんか言つて、莞爾しながら、菖蒲の池の靜な舟に乗つた姿で、一寸ふらついて、立つて来て、火鉢に袖を凭れるやうにして又莞爾する。龍が天井からバタリと落ちたやうに、私の羽織へ揺れかゝる下げた箱むすびの帯の端が觸つたので、お恥かしいが、悚然としたくらでね。

廉三郎は湯豆腐の湯氣の中に、陶然と酔うたる色して、

「次第を聞けば、成程分つた。隣家と云ふは、能舞臺の棧敷の事で、九段で、半さんが、暮に熊野を演つた時、来て居たと云ふのなんです。あゝ然う言へば、圓鬘に結つて、貴夫人らしい、品のいゝ、然も意氣づくりなのが居ると思つた事があつた。つき通しの藝妓島田で、さげ帯と来ては、餘りな變りやうで、こりやあ誰だつて見違へようぢやないか。

半さんが、やがて春柳亭へ来るのだと私が言ふと、……花片に蝶々の觸つたやうに、鬘の動くほど喜んでね、いつも舞臺でばかし、……一度お目に懸りたかつた、是非おひき合せ下さいまして言ふから、先づお名のり、と聞いたんです——（筈）だつて言ふぢやないか。私は聞直したよ、（筈）と聞くと、都がへりをした大鼓で相談のある最中。母も、叔母も、従姉たちも皆、少い、美しいのが、其の座敷から遠く故郷の雪の中まで髣髴と目に見えて、あゝ、鼓の精が顯れた。と

私は夢のやうに恍惚として、其の婦を見た。
半さんが入つて来た。

八

「待ち給へ。」

半之助は卓子臺を若手三傑の方へ、ぐいと押して、膝をつつと從兄に向けた、其の癖、麥酒の七本目と、硝子杯だけは、手許に近く引着けながら、

「不思議だね。私は、あの晩、兄貴に紹介をされて、はじめて名を聞いたが、君が今、(心持)で思つたと云ふあの笏の姿を、生きた鼓のやうに見た。妙な事があつたんだよ——先刻、話したい珍談があると言つたのは其の事です。あれから、掛違つて、兄貴とは今日はじめて逢ふんだね——皆も聞いてくれ給へ。然ほど思出のある其の美人が座にあつたものを、此の人はね、私が出先から春柳亭へ廻ると、其の笏姉さんを私に紹介せて、間もなく目で知らせて、一足先へ歸りたいと言ふ。私も察して居たからね、引受けた、とのみ込んだもんだから、右の美人に送られて、早めに、一人で引揚げた、と云つて、やがて十二時半だつたらうね。……虎を押着けて遁げたのは卑怯だけれど、當方には遅参と申す落度ありで仕方がない。勇氣を丹田に練つて、朝鮮陣の後詰

の形で、と大虎を引受けましたさ。——尤も私が行つた時分に、關取の膝枕から、むく／＼と目を覺まして、大盡(やあ)と一つ突んのめつて會釋をしたあとで、猛然として、口をゆがめ、目を光らして、例の額に稻妻を打たせた處は、虎よりか、それ何だつけ、蒙雲國師が分身の禍と云ふ怪物に似て居ました。

廉さん、君が遁げると間もなくだつたよ。……寶生先生に曲がない、(關取甚九だ、其の姉さん彈いてんか)と碁に顔を突出して、(俺も踊る)と諸膝で立揚る……緒ら顔の肥つた女中と婆さん藝妓が、(もう時間過でございます)と斷つたが騒動のはじまりだね。(けつたいな、十二時過ぎに三味線が弾けんとは何や、あかなな東京の洩垂し。尻でも舐れ、祇園も新地もこれからや。)(否、御規則でございます)と宥めたのが尙ほ火を煽つて、(御規則おもしろい、法度が何や、俺が押潰してお目に懸ける。恐らく五條の眞中では朝比奈と呼ばれた門破りの大ぼんちや。警視廳へちやつと電話を掛けてんか、總監殿に朝比奈が逢はうと吐せ。早うせんか。何に、掛けたが、居らぬと、はてな、遁げをつた。可わ、本家本元のみすや針へ談じてこまそ。つい晩方も逢うて来た。内務省、いやさ、内務大臣官舎へ電話や、京は五條の朝比奈がお目にぶらさがらうと恚う取次げ。何ぢや、もうお休みだ。寐たらば起きろ、とすぐに電話だ。やい、行せぬかい玄妻め)で、眞個に掛けはしなからうが、遠くで鈴の言だけさして、女中と婆さんが行つたり來たり。(え、埒

があかぬな、俺が元老にかけ合ふわ。」と突立つ處へ、見兼ねて、春柳亭の女房がつつと入つた。
(旦那誠に行届きませぬ、私があるじでございます。)と端正と手を支くと、(はあはあ)と退つて(大けに)ときよろんとするトタンに、どんと尻餅を突く下から、行燈仕立てのぞろりとした袴の紐を解くんだよ。おや、妙な事をする、と見るうちに、すぼりと脱いで、(先生、失禮なが此を穿いておこなはれ。)は突飛だね。……私は穿いてるんです、……然う云ふと、(折角差上げようと思つて、西陣で織らせたものを、満座の中で突かへされるのは情ない。)ツてね、おい、泣出す。……仕方がないから、立つて裾を入るとね、裾が付き膝で、うしろから腰板を當てただがね。」

「えへむ！」

此の時唐突に、酒顛童子が大江山以來の奇聲を放つた。

唯、此の酒毒には魔されよう、嬰兒が、むづかつたので、添乳をしながら、をかしさうに、目をぱつちりと顔を上げて、炬燵で聞いて居たお澄が、くるりと背後向きの圓鬘の鬘と、白い襟脚と、白い二の腕ばかりを見せて、

「すう〜……と鼻を掻く。」

松山、藤浪二枚の役者も、おなじく聲を合せて、

「すう〜、ぐう〜。」と言つた。

「勝手にしろ。」

「半さん、それから……」

九

「恰好なぞ構つては居られない、結城お召か何かの上へ穿込んで、二枚で坐るとね、(よう聞分けたや、念が届いて嬉しい〜)つて……又泣出した。おい、聲を揚げるもんだから、澁い面を苦くして居た關取がね、(泣きなほるない、大きな坊や、坊。)と團扇見たいな掌で大盡の背中を擦ると、よろ〜と膝行立ちして、其の關取の背中へ伸掛つて、(負ぶ〜)と甘たれ聲を出すぢやないか。

(あい、負なあれ。)と關取も洒落た奴さ、腰を抱いて、ぬつくと立つて、(坊ち歸んはあれ、な、あんじやうするさかい、柔順で母はんへ行んなはれ。)とのつさり踏出すのを、機會に、春柳亭の女房が、氣轉で、(お立ちだよ〜)此は出来たね。

若い三人も、婆さんも、女中ぐるみ、潮に引かれたやうに、一齊に颯と立つて出る。私も一所に、あの廣々とした大式臺まで誘はれた……俵は待たしてあるんです。時間は、やがて、一時半。

すぐに思つたけれど、外套が奥に在る……第一袴の始末が悪い。彼家に置いて待合から返させようと、一人で奥へ引返すと、此處なんだよ。袴が、一人で、もと居た處に薄ら寒さうに坐つて居たがね。」

途切れ／＼に搔いた躰が、ハタと留むと、酒頭童子は眼を圓に火鉢に頼杖。

「何だか悄乎と……俯向いた鬢の毛もはらくして、頬のあたりも瘦せたかと思える……白襟よりの顔の色が薄りと蒼味をさして、白い手の細いので、ぐつと胸を壓へた姿は、あの、媚かしい、意気なのだからね、對手は私で納まらないが、河庄の障子を覗いた、上京の梅川と云ふ形に見えます。……冷えたらう、座敷は通魔が抜けたあとのやうに寂寞して、床の掛ものの繪の梅が、しろじろと浮いて芬と薫りさうでね、青疊が、私の足にも、霜を踏む氣がして冷たい。あの、緋縮緬の所々が宛然紅猪口が氷つたやうです。
(何うかしましたか。)&立つて袴の紐を解きながら訊くとね、」
「すう／＼すう／＼と又お澄が躰で。」
「う——む。」と二枚が壓される。

怒る時、酒頭童子は頭禿に齒豁である。
「袴がね、兄貴、(否……別に……)と幽な聲をして言つたけれども、それ、脇腹へ指を反らして、

襟を捻ぢられたやうに、横顔の口をゆがめて、婀娜な眉をキリ／＼と釣つたんだもの、野暮が見たつて差込む癩さね。壓してあげう、と無理にも言つて見たい處だが、せめて一度でも逢つたんだと、つきは可いが、初対面と来て居る、そいつは不可ない。第一癩に對して經驗がね——むづかしいが——皆無なんだよ。」

「お澄さん、如何です。」と、酒頭は炬燵に聲を掛けた。

お澄は寝んねん、寝んねんよを、手で言はせて、嬰兒のオギーと泣くのをあやしなから、

「お生憎様、私は逆上せ性ですよ。」

「おさん泣かすな、馬肥せだ、此方は戰場に臨んでる處だぜ。」

と半之助は、膝を敲いて打笑ひ、

「人を呼ばうと、出しなに屏風の外にあつた外套を被たつてが、聲を出して呼ぶのも變だし、駈出すのも可訝いし、其のまゝ出たふの氣掛りだし、また、來さうなものを誰も來ないし……」

「嬰兒ちゃん、お泣き。」と松山が聲を掛けると、

「此奴は堪らない、ばア——とばかりで、藤波は炬燵の方へ、すいと行く。」

酒頭が目を睜り、肩を怒らし、腕を張ること蟹に似たり。

帽子まで持つたが、振切れないから、金屏風を楯に凭う見るとね、龍のやうな、さげた帯が、

君は専門の藝人だ。舞臺ぢや其の鼓に逢つて、且つ聞き且つ語つて心を通はす事が出来る……又神會して鼓の音色を聞分けられる技倆がある。私は不可ない。手に觸れ、袖に包み、胸に抱く、其の姿に一旦別れると、逢つても見えず、聞いても聞えず、且つ語つても心の通じないと同然な

「君は専門の藝人だ。舞臺ぢや其の鼓に逢つて、且つ聞き且つ語つて心を通はす事が出来る……又神會して鼓の音色を聞分けられる技倆がある。私は不可ない。手に觸れ、袖に包み、胸に抱く、其の姿に一旦別れると、逢つても見えず、聞いても聞えず、且つ語つても心の通じないと同然な
ない。
「君は専門の藝人だ。舞臺ぢや其の鼓に逢つて、且つ聞き且つ語つて心を通はす事が出来る……又神會して鼓の音色を聞分けられる技倆がある。私は不可ない。手に觸れ、袖に包み、胸に抱く、其の姿に一旦別れると、逢つても見えず、聞いても聞えず、且つ語つても心の通じないと同然な
ない。
「君は専門の藝人だ。舞臺ぢや其の鼓に逢つて、且つ聞き且つ語つて心を通はす事が出来る……又神會して鼓の音色を聞分けられる技倆がある。私は不可ない。手に觸れ、袖に包み、胸に抱く、其の姿に一旦別れると、逢つても見えず、聞いても聞えず、且つ語つても心の通じないと同然な
ない。」

てあつて……」

と半ば聞かぬや、松山が又すいと炬燵へ遁げた。

「桑原々々桑原。」と酒顛童子は頭を抱へて疊へ突伏す。

「詰らん事を。」

「否、そして其の晩言交はしたのでも構はない。私は、彼の其の様子、其の姿が、聞いたばかりで、戀しくつて、懐くつて、我慢が出来ない。……然も母から叔母の手、従姉妹たちの手に傳へた鼓を金子のために人手に渡す、此方は身賣りの愁歎場だ。よし、それが、立派な打手の手に渡つて鼓としては本望でも、離れる身には未練がある。愛惜があり、煩惱がある、執着、妄念と言つても構はん。」

「君は専門の藝人だ。舞臺ぢや其の鼓に逢つて、且つ聞き且つ語つて心を通はす事が出来る……又神會して鼓の音色を聞分けられる技倆がある。私は不可ない。手に觸れ、袖に包み、胸に抱く、其の姿に一旦別れると、逢つても見えず、聞いても聞えず、且つ語つても心の通じないと同然な
ない。」

背から腰へ、弱々と成つて、横に伸びると、手を弱々と、脇息を取つて、ぐい、と引寄せたのが、乳の下へ入つた、と思ふと、胸を壓へながら、斜に仰向いた眉が顰んで、片手で帯の間から、懐中鏡、懐紙、背負揚、煙草入、煙管筒——持つてたらう、君、いづれも紅いのを、其を、ばらばらと疊の上へ投出したがね、鶴が惱んで血染の羽毛が一握づつ、脱けるやうに痛々しい。……然うすると、……めて居たね、下の緋縮緬の結び目を解いて、解いたのを潜らすと、片端を左手へ摺んで、片端を唇に啣へると、仰向けに呼吸を入れる、皓齒が、キリ／＼と幽に鳴つて、片手で帯を壓しながら、ぐいと上下へ其の扱帯で、鳩尾を引結へて、ギイと縊れるほど緊めた時、流れるやうに裾を投げる、褌にも緋の絡つたのが、千鳥に掛けた調の緒其のまゝで、彼の姿は、祕曲のために、美しい胸を絞る、宛然の鼓に見えて、ハツと祖父さんの大鼓が目に見えて、私は魅入られたやうに浮かり立つた……」

「半さん。」

と、更まつて呼ぶ……廉三郎の聲は、何故か震を帯びたのである。

「其處へ、藝者だの、女中……」

「待つておくれ、半さん。其處へ、誰も来なくつても可い。……あの女は、豫て舞臺の君を思ひ込んで居たらしい。其の夜の、それが空癪で、君に介抱をさせるために、陰で女中と打合せがし

んだ。

心を察して、……可いかい、此の筈に分る、かはりに、あの鼓を、形、姿其のまゝに、半さん廉三郎に譲つておくれ。……少い、花やかな時の母、叔母、従姉妹たち、祖父さん、叔父の時代を偲ぶ面影として視たい。恥を言ふが、私は寧ろ、鼓より、其の筈の姿の方が、心持を表はすのに容易いだから、半さん、廉三郎に譲りたまへ。」

と、やゝ呼吸せはしく、しめやかに言つた。

炬燵でも火鉢でも、さすが、一流一技の藝人たち、肅然として、聞澄ます。

寝んねんよ〜。……

「坊やお守は、何處へ行た、山を越えて里へ行た、里の土産に何ももろた。……」お澄が静な優しい聲。

半之助も、涙ぐんで、其の従兄の手を取つて、

「可いとも……私はずもとより。……」

十

「まあ、氣障だ。」

一口に唯……

「まあ、氣障だ……」

念に掛け、思ひに思ひ、越えて二月の末つ方、濱町の待合、渚の間で、宵から、やがて十二時近くまで、待ちに待つて、漸と首尾が出来た筈に對して、其の大鼓の思出を、やゝ語り得た時、藝者の口から一口に、

「まあ、氣障だ。」

此を聞いた時の廉三郎の、心の裡は？……顔の色は？……全身の血が皆砂利に成つて、町に近い隅田川の流も忽ち溝泥に變る思ひがした。

——筈は座敷に入る時、媚かしく絡はる裳裾を、爪さきでトンと捌くまで、艶に其の夜は酔つて居た。

渚と言ふ此の待合は、はじめ仲の町の藝者で、半頃新橋で鳴らした、名を千貝と云ふ、諸藝に丹練な中にも、清元に名譽の聞えがあつたが、——不思議な事——同じ土地の若手の藝妓に、其の千貝と書ふ名を譲つて、本名のお梶に返つて、此の待合をはじめたので、間敷も座敷も少いが、御館、御殿の春柳亭に對して、鐵拐づくりの磨格子、ともに横町の名物で、兩方の間さへ、間隔一町に足らず近いのである。

訝は、宵から春柳亭に出て居たが、後口の此の渚に來ようと、横町の黒板塀を、白襟で、上着は縫の紅梅に、銀絲の雨の裾模様、黒繻子に貫くばかり白羽の矢を刺繻して薄紅の矢文を結んだ丸帯をお太鼓に、緋の匹田鹿子の背負上げ、ほんのりと、繪が抜出た風情で、取る手がふらつく、褌も酔うたり。紅を、翠の柳の腰で極めて、突袖で通りかゝると……其の時、ふと恠う言ふ事があつた。

前途から、する／＼と空俵を曳いて來る。

空俵に仔細はなけれど、母衣を刎ねたのが、腰掛へ、恠う、三味線を一挺、轉軫を直に立てて。包みもしないから、胴のなりの白い顔で、其の三味線が乗つて居る。待て、三味線に乗せて居る。廣くて薄暗い、何か、長廊下に點されたやうな、ふわ／＼春めくが些と寂しい軒燈の影に、其の高い處にスツと乗つた四角な白い顔が、いつも影身につき添ふ、藝妓は同じ誰も馴染の姿たから、ふと立停まつて、訝が、と見る處へ、くる／＼と近寄つた。

「おや、玉三の姉さん……お歩行で、」

と其の車夫が聲を掛ける……訝の家は桂家と言つて、其の色香で、品が可いのに、我儘が出來て、贅澤をするから、出入りのものなどは桂姫に見立てて、通り名を玉三と言ふのである。

「あゝ元さん、何處から。」

「へい、唯今渚さんから。」

「私も……これから。」

「渚さん？」

「あゝ。」

「道理こそお歩行で、御苦勞様でございます。」

「何うしたのよ。」

「えゝ。」

「其の三味線さ。」

「えゝ、こりやね、姉さん、そら御近所の初田家さん、彼處の操さんのでございませうがね、宵から些と、もつれがありましてね、迎ひに行つた操さんが歸らないで、箱だけ恠うやつて乗ツかつてお歸りつた。」

と振返つて、撓めて見て、

「へゝ、妙な形でございましてね。」

「をかあしな、操さんが歸らないで、箱ばかり。可厭だ、記念にでも成るやうに聞えるぢやありませんか。……可哀相な妓だからね、他所様の事だけれど、もつれツて、何かい、あの妓に心配

な事ぢやないのかい、一寸聞いときませうよ、渚さんへ行くのだから、私がまた、と袂を揚げて胸を教へた。振を、はつと溢る、留南奇に、心の薫りも色に出て、黒板塀の紅梅が、目許の酔と島田を彩る。……鼻筋の通つた、色白な、細面の美しさ。此の意氣の此の婦が、廉三郎を、

「まあ、氣障だ。」

十一

「何ね、玉三の姉さん。」

車夫は腕で一つ、棒を極めて、

「初田家ぢや、操さんが、渚へ出ると間もなく、後口が掛つたつてんで以て、幾度も電話口へ呼出して催促をしたんださうですがね。御當人、おきだの、すぐだのと言ふばかりで、手間が取れて、一向埒があかないもんですから、大焦れに成つて、私がお呼びのお使ひでさ。え、此のお呼びが尋常のぢやないんです。」

主人の代理だ、客は先方のもの、藝者は此方のもの……」
玉三の餌が莞爾しながら、

「理窟だわね。」

「え、筋は立つてるんですよ。何でも嚴談に及んで、無理だつて構はない、又無理は無いのだから、すぐに、其の俾へ乗せて歸つて来い、と云ふお使ひでしてね。御存じの通り、操さんは年期ものですから、自由は利きませんや——處へ、今夜の客つて言ふのは、何處か、人形町邊の小體な小間物屋の、お剩に部屋住と来て、爲に成りませんのを、生憎と又操さんが血道を上げてるのを、内で知つて、豫々、中を堰いてるらしいんですがね。」

「羨しいね、色師や。」と輻について、横に出て、三味線を覗いて言ふ。

「御申戲。」

「些とお静に願ひませうか。恚う見えても春柳亭で嫌はれたのが一人居るんだからさ。」

「非望人だね、姉さんを口説くんぢや、」

「あら、勿體ない、口説いたのは私の方だよ。」

「罰が當る！」と、ひよこくと叩頭をする。

唯、襟を片捌きに背後向きで、泥障を軽く指で弾いて、

「そして、何うなの、操ちゃんは？」

「祝儀不祝儀にやよらないんだ、貰つて歸る！藝妓衆をおくんなさいと此方もお役目でさ。渚の

式臺へ凄味に手拭を捻込んで、腕を張つたんだ、私あ。彼處の女中が揉手をしながら、(實はね、操さんは今しがたお客様と何處か運動をするつて出掛けなすつたから、悪からず、お前さん其處を可いやうに。)——可いやうにたつて、袖の下へ些とも錢が通はねえ。」

「おや、お前さんは手品師かい。」

「まあ話でさ。怪しからねえ、人の内の抱妓を預つて、勝手に運動もねえもんだ、大川が近い、落ちたら何うする。網でも釣棹でも持つて行つて探して連れて来ておくんない、藝妓衆を乗せねえぢや歸られませんか、と式臺で返りますとね。(一寸、人の内の抱妓さんは、此處に居るぢやないか、何處へも行きやしない、今お歸し申すよ。)とお帳場わきの障子の陰から爽かな聲が掛つたと思ふと、お前さん、薄手な圓鬘に水色の手絡、古渡珊瑚の簪、襟のかゝつた唐棧柄の縞縮緬に、八端の腹合せをめた、背のすらりとした、ぞつとするほど意氣な年増が、

「主婦さんだね。」

「え、此の三味線を、恠う、船を切るやうに、前へ取つて片手で持つて、づつと出ました。」

「紀之國屋。」

「譽めちや不可ませんや、此方は凹みだ。……(若い衆さん、御苦勞様、さあ、操さんを乗せておいで。落が箱を返します。藝者衆を返すより、此の方が確たつて、お抱主に然うお言ひ……：酔

つてるから氣をつけておあげなさいよ。)つて、莞爾すると澄して入つて了つたんでね。え、何だか、煙に巻かれましてね、些とも譯が解りませんがね、變に其の言葉に力が入つて、妙にね、此の三味線は操さんが乗つてるやうな氣がするんですよ。」

「嬉しいねえ！」

と婀娜な聲して、片手探りに帯の間から、祝儀づつみを其のまんま。

「飛んでもねえ、こりや、姉さん、何ですえ。」

「何でもないの、途中でお手間を取らせ賃、私が油を賣つたお代。——操さん、今頃は嘸ぞお樂み。」

と擦れて出狀に、車上の三味線を密と叩くと、手が冴えたやうに、リーンと響く。

「あ、悚然した。姉さん。」

「寒いね。」

と突袖の袂を帯へ搔込んで、すら／＼と分れながら、

「母衣をお掛け、露は可いけど、色師には夜風は毒だよ。」

電話口で、壁一重に、きつぱりとした女の聲、

「車が、お迎ひの車ですか、手間が取れますつて、今しがた——はあ、今しがた歸りました。貴方の操さんは、はあ、藝者衆は乗つては歸りません、が箱は確に其の車に乗つて参ります。馬鹿に、馬鹿にするなつて、何を仰有るんです。お呼び申した藝者衆の表道具をお返し申せば、御當人より確たと存じますよ。はい、はい、何です、人間……え、茶屋では人間の藝者より箱が大事ぢやありませんか。箱はお預り申しますが、え、お預りの品は確にお歸し申しますとも。決して間違へはいたしません。人間の方はでございますね、まあ、まあ、お聞きなさいまし、貴方でおつしやる人間の藝者衆は、手前ども勝手には成りかねます。貴方からお呼立てがあればお取次はいたします、けれども、お客人が歸せ、とおつしやらず、藝者衆が歸らうとしないものを、え、はあ、さあお抱妓か、御譜代か、お旗本か何か存じませんが手前どもの家來でも、女中でもないものを、早く歸れとは申されないではありませんか。……否、否、まあ、お待ちなさいまし、貴方は、女中さんですか。そんな事を言つて、御主人ではありますまい。……渚の梶でございます。梶が申します。……はあ、それは。お聞きなさいましよ、お客が誘つたんですか、藝妓衆の發議でございますか、兩方で氣が合つて、何處かへ、運動がてら出掛けると言ふものを、私どもで、不可いとは申されません。え、然うですとも。行つて入らつしやいまし、お靜に、と確

にお見送り申しましたとも。何處へ、……そんな事を知るものですか。——人間が勝手に歩行くんですから。しかし、しかしですね、藝妓は貴方からお呼び申したんですから、人間は出て行きましたも、三味線は出しません、決して渡しません、此は貴方から私の預りものですから、御主人の貴方へ丁とお返し申します。え、何でございますつて、箱どめ、以來は私どもへ藝妓衆を斷るんですつて、可うございませとも、私の方でもお斷りをいたします。はあ、怪我でも……間違でもあつたら何うするつて、ほ、ほ、人間の方は分りません、いま返しました三味線が、途中で、怪我、間違ひの無いやうには、茶屋小屋のあるじとして、はい、お燈明を上げて祈つて居ります——然やうなら……」

壁越しの繻子の鼠鳴。

「女房だ、嬉しいな。」

此の間で、廉三郎は又獨酌の杯を擧げた。

白魚鍋も春景色。……今宵は二月の末と言ふのに、雪催ひに似た曇空で、竹があるか、障子の外を、時々さらりと鳴る風に、白いものが交りさうに思はれた。が、それも、大川の風情にこそ、篝火の燃ゆるに似た、火桶に紅き櫻炭。戶外の寒さに、可憐しい人の手は、ちらりと近く、其の白魚の影を暖めよう。

待焦れた、今夜が三度めで、前は二度とも、當時第一のうれつ妓の、隙がなくて逢はずに戻つた。

渚の家も繁昌で、来た時に、外に座敷がなかつたので、通廊下の細いのを隔てたばかりの、帳場に近い、式臺を背後にした端近な此の六疊を、お我慢が成りますなら、で、通されたものだけ。何、お我慢どころか、金子には成らぬ、畫家も、洋畫の何派と來ては、腰張どころか、壁が落ちて、それさへ家賃が滞る……此だけの座敷は内には無い。

いまの電話は、先刻からのいさくさで、廊下で、何かひそ／＼話。男が焦れる、女が泣く、女房が捌いて、やがて二人づれで出たらしい。はじめから催促の電話やら、遣取やら、一々手に取るやうに間近に聞えたのも、白魚の外に、本場らしい、刺身のやうな肴で可かつた。

「御退屈様。」

か、何か言つて、……但、女中が脇息をくれたのには、殿様、ぎよつとなすつたが、それも、緋鹿子の扱帯でしめた、鼓の臺と髻髯として、薄面影の幻の、由縁の色を見るばかり。肱は掛けずに、胸を壓へて可懐しかつたに――

其の電話が切れる、と間もなかつた。

「此方、」

と、すらりと襖が開く、と見ると、裙を曳いた、すつきりとした立姿で、慍う、緋の背負揚を手に一緊めした、が、不思議に、夢にも忘れぬ、鼓の緒とは見えないで、冷い帯の蛇身に燃ゆる焔に紛つて、冷やかに凄かつた。

十三

……氣障かい。」

いつか、半之助の家で、其の従兄弟たちと語合つた意中を――實は、最う弔が座敷に入つた時の顔色と容子の冷やかなので悟らねばならなかつたのに、戸外の寒さに、酔覺が胸の暖かさを攫つたらう、と手前勤に當推量して――一通り話すが否や、

「まあ、氣障だ。」

一言、毒の針で脈を刺されて、廉三郎は、聲も血も氷りついたのを、火をば便宜に、やゝ震へながら火鉢に縫つた。あゝ、一息の先刻までは、これを大川の春深き白魚の篝火と視た、うつゝ心の淺間しさ。

「勿論、氣障だらう、が、氣障と言はれるには替へられないほど、然うね、何と言はうね、堪らなく、可懐しく床しかつたんだよ。」

「お目には掛りませんがね、一寸。」

「お目には掛りませんがね、一寸。」

「悪かつた。」

と又頬のこけるまで、氣を萎して、

「悪かつた、が、私は藝妓だと思つて言つたのぢやなかつたんだよ、可懐しい……又不可ないかね。然し何う言はう、他に言ひやうはない、矢張り可懐しい、其の從姊妹だの、何か。」

「お目には掛りませんがね、一寸。」

「お目には掛りませんがね、一寸。」

「もつけの僥倖と、私は貴方の從姊妹なんぞに似て居やしないんですから。」

「まあ、お前さん、顔容が似て居ると言ふんぢやない。先刻から話した通りの次第で、われわれ一族が少なからず可懐いおもひのである、其の鼓に分れねばならない處へ、半さんに聞いた、あ

の晩の、お前さんの、然うやつて、下で鳩尾を結へた姿か、

「あ、氣味が悪い。」

と、むすつきさうに、ぶる／＼と肩を振つて、

「下だの、鳩尾だのつて、些とでも私の膚に近い處を、貴方の口にされちや悚然とする。止して頂戴。……芋蟲が上這ひをしさうで成らない。」

「男つてもものはね、一寸、殿方はよ……そんな、ふやけた、ねば／＼した、口説きやうをするも

「男つてもものはね、一寸、殿方はよ……そんな、ふやけた、ねば／＼した、口説きやうをするも

「あ、打つ、打てますか、面白いな。」

「あ、打つ、打てますか、面白いな。」

「ふん。」

と氣勢つた笑を洩らすと、島田が揺れたが、眉のあたり爽な氣が満ちて、

「川端近くへ出掛けて来て、白魚鍋なんて行過ぎてるわよ。牛肉でも突いてれば可いのに、葱澤山で。此の渚さんはね、待合で、お取次なんですから、御前様御意とあれば、焼芋でも何でも取寄せて上げるんですわ。」
と卓子臺に凭懸つて、鳳凰の圓を透彫の平打の黄金簪で鍋の白魚をついた、が、口へは入れずに、簪もカチリと投げつ、お被の酒を一息に呷と煽る。

十四

「成程。さあ、矢張り、其の白魚鍋が同じ事で、」
と廉三郎は、成程ふやけたことを言ふ。が、しかし考へて見れば、渠が今の此の場合は、花見に驟雨に逢つたか、願掛けの御籤に大凶と出たやうなもので、驚けばとて、恐るればとて、憤ることは出来なかつたかも知れないのである。
「氣取つて、選好みをして其を食散らさうと云ふ心ぢやなかつたんだ、如何にも身分相當なら、牛が焼芋で十分なんだ。」

「え、然うよ、其の通りですわ。牛肉か、焼芋ね、でなけりや、五荷棒か、蕨が可いんだよ——いくらか東京に近い處の藝妓が欲しいと言ふんなら。一度やそこら、人の御馳走に呼ばれたお庇で、藝妓が口を利いたつて、い、氣に成つて、何處だと思つてるの、此處はね、柳橋芳町が入交ぜに、本場の姉さんが出入る處ですよ。……二度も三度も、一人で出て来て、名ざしで人を呼ぶなんて……お剩に、宵から、座敷ふさげに、私ばかりを當にして、一人で待つて居るなんぞ、品川の脚榻釣だね、笠を被つて、釣竿を持つておいでなさいよ。——何か、私と、わけでもありさうに見えて、此家の内へも外聞が悪いわ。そんな事はね、もう些と、お金子があるか、で、なけりや、容子の可い人のする事です。」

「まあ、聞き給へ。其だ、それが、互に心持のくひ違ふ基なんだ。たとへば其の白魚鍋だね、今も云つた通り、敢て氣取らうとも洒落ようとも思つて誂へた次第ぢやないのだ。——直き其處が、電話口だからよく聞える。先刻此處へ来た時に、女中が何處か料理屋へ電話を掛けた。他の座敷の註文だらう……白魚と、小鯛を、と恚う言ふんだ。」

可い可い。焼くか、煮るか、此方はそれさへ分別のつかない男だが、二月の末だ、雪模様だ、黄肌鮪だ、鰻だと言ふなら知らず、隅田が其處の此の邊に、其の白魚と小鯛とが、如何にも景色に相應しい、と思ふと、何だか電燈さへ、梅に月が出たやうで、又氣障だらうが可懐しかった。お芋の煮えたも御存じなしが、いくらか極りは悪かつたが、女中が来た時、相談すると、(白魚は鍋が出来ます、小鯛は椀になさいまし、鶯菜のお浸を添へませう。)と言つてくれた。見給へ、其

の屏風は檜垣の紅梅、私は實に嬉しかつた。」

「おは、まともに島田を見せて、肌の紅かすかにほのめく、すつきり白い襟脚で、うしろ向きに腕をついて、天井を見て居たが、がっかりするやうに片頬を捻ぢると、おくれ毛がはらくと、腕の中を、谷川の如くに覗いて、

「あゝ、此の小鯛も災難だ。」

「いや、食やしない、見て居たんだ。春景色の心に浸つて、それも災難なら、災難だらうか。お前さんに對するのと同じ譯だ。……名も何だし、活きた其の鼓の姿、と思ふと、母も、叔母も、從姉妹も、月があり、紅白の梅が咲き、すら／＼春の風が吹く、そして鶯の鳴音が聞える。……あゝ、年月は可恐しい、或は凋み、或は枯れ、或は散り、或は朽ちた人たちに、其の春の景色の中で、若く、花やかに、美しく、目前に逢へるやうな氣がしたので、覺めた夢を追懸けるやうな、あこがれた、心で、それで、實は、實は……」

と、はずむ息を吻と吐き、

「それで、お前さんに逢ひに来たんだ。今更、申譯や、卑怯ぢやない、決して、お前さんを口説くの何の、そんな氣は微塵もなかつた。」

「ふん、」と笑ふ。

「否、實際、微塵もなかつた。」

「また、口説かれて堪りますか、ふん、罰の當つた、ですがね、」

と焦つたさうに、棲を返して、向直つて、

「それは負惜みよ。私の、私の此の權幕を見たもんだから、色氣の無いやうな事を言つて、高慢に清淨がつて、何の、少し白い齒を見せようものなら、すぐにつけ込まうツて氣で居る事はね、目つきにも、鼻つきにも、丁と人相に顯れてますさ。」

と又腕の蓋を、今度は彌藏とか云ふやうに、袖を投げた懐手の、ツツかけた襟をあらはに、搦んだ紅見ゆるまで、ドンと胸ぐるみ卓子臺に口をつけて飲まうとして、ハツと咽る、と切なさを、其の切なさを押堪へる、籠甲の照もたら／＼と、髪の柳の姿を揉んで、何故か、わな／＼と震へたのである。

十五

其の閉ぢた目を細りと、顔を上げて、胸を抱いて、ちつと視ながら、

「其で居ながら、其の癖、人になつかしからせようの、あはれがらせようの、人情のある處を見せようの、叔母が何うの、從姉妹が何うの、と影武者を大勢並べて、まだ足りないで、驚の、

春の、白魚のと、天狗俳諧ぢやあるまいし、煩くつて遣切れない。其の言ぐさが癪なんですよ。ふやけて、ねばついて、み、ツちくつて、小細工で、折鶴こさへる娘があつても、今時そんな事を聞きますか。だから貴方は、洗ひ流した、蛞蝓だつて言ふんですよ。卑怯だわ、第一、見つともない。男の癖に、藝妓に、そんな景物を出すのは、素女におしろいをつけて見せる男があるのと同じぢやありませんか、すたりものだよ。さあ、おあがんさい。」

と蓋を其のまゝ衝とさして、銚子を取つた、が、これは来てからはじめてである。

「貴方も、お儀式だけ御祝儀をするでせう。私の方で斷つても、此家の内で頂くから、商賣冥利です、お酌をします。……勢よく一つ飲んで、引呷けて、男らしく言ふことをお言ひなさい。寝ないかとか、起きないかとか、金があるとか、無いとか、いろに成りたいとか、妾にしたいとか、それとも夫婦に成らうとか、一口言へば分る事だわ、口説くんならそれが可いの、早解りで、どつち道、」

と、つんと横を向いて、

「此方は斷る分だから、……」

と今の酒の勢で、廉三郎は蘇生つたやうな勢で、ぐつと卓子臺に伸かゝつて、

「斷つておくれ、口説くから。實は私は口説きに來たんだ。」

それ見た事かと、流石にじろりと見る。

「金はない、が、出来るだけ禮はしよう、口説くと言つて外ぢやない。いつか、私が歸つたあとで、半之助が春柳亭の奥で視たと言ふ……お前さんが、脇息をたゞ力草に、胸を壓へて、緋の下を、手と、白い齒で、キリ／＼と帯を絞つて鳩尾をしめたと聞いた、癪に惱んだ、あの姿を……一度で可い、丈夫な身體で踊りのやうに、振事のやうに、美しく見せて貰ひたかつたまでの事です、それ丈だ。」

「一寸、それが、大鼓の形に見える、と言ふのでせう。氣障だ、またはじめたよ、煮切らない。縁目で買つて讀んだ、木遣くづしから思ひついて、それぢや些と甘過ぎます、しめつ、ゆるめつが呆れるよ……惚れたから、なぞらへて、其處を抱かうが圖々しい。小鼓なら、肩に掛ける氣で、まだ幾らかしをらしい。抱くものよ、大鼓は……祖父さんの笹が、可恐しい。孫ならばね、孫の氣でね、堂宮の日南へ出て、でん／＼太鼓に笙の笛さ、守つ子の唄でもお聞きなさいな。」

「もう、そんなにまで言はれちゃ、私は、私は口の利きやうがない。……餘りと言へば、あゝ、私は、父とも言はん、母とも言はない、叔母、從姉妹にも面目ない。」と、舌もしどろに、言が亂れる。

「研は聲もすつきりと、

「面目ないのはお心がらすです。……第一貴方は、人が病氣で苦しんだ處を視て、美しいの、綺麗だの、懐しいの、床しいのつて、酷いぢやありませんか、鬼見たやうぢやありませんか。」

「研さん。」

「思ひも掛けない、今夜の容子、が其の怨みなら、言ふことありで、廉三郎は一息して、
「たとへば、お前さんの三味線だ、鼓にしる、あの音を出す貼られた皮は、もとは生きて居たものだ。其の皮から見れば、はりつけられて、暴露された上、打ちたゞきをされる、と思ふだらう。散る花は風情がある、が、散る花の身に成つて見れば——」
ふと廉三郎は俯向いて、

「いや、こんな事を言つたつて、今夜のお前さんには分るまい。人の病を樂しむ、残酷だと言ふのなら、手短に辯解をしよう、癪を結へたお前さんを、研の大鼓だと思つたのは、私ではない、半之助だ。半さんなんだよ。……研さん。」

研は、此をきゝもあへず、じりりと火鉢に寄つて、
「えゝ、其の半之助さんでしたら、死んだ皮は愚なこと、生身を剥がれて、打たれようと、撲かれようと、引摺られようと、雪駄の裏でも構ひません。勿體ないが、私や、鼓に成れば、本望で

すわ。」と、聲も濕んで、目に充滿の露がある。

廉三郎は、たゞ瞻つた。

十六

「其れ、其れを、其の鼓を、(くれろ自分に。)と言つて、貴方が、半之助さんから、お貰ひなすつたんぢやありませんか。半之助さんは貴方に(遣る。)とお返事をなさいましたさうですね。

其のために、其ゆゑですよ……私は、死ぬほど、生命に掛けて思つて居る半之助さんに、思ひが叶はなく成りました、嫌はれて了ひました。

衝と其の襦袢の袖口を目に當てて、鶴の病めるが如く俯向いたが、

「あれから、一度ならず、二度ならず、……今夜も此家へ來ますまでは、春柳亭の宴會で、半様がお客に見えて居ると一所でした。……廊下へお立ちなすつた、鷹の羽の御紋附、舞袴のお姿を見ては我慢が仕切れない。庭の鐵燈籠の薄暗い、灯のない部屋に待構へて、私は夜鷹に成下つて、暗がりて羽二重のなつかしい袖を引いて、思ひのたけを言つたんですが、(約束でね、君は廉さんに渡したよ、丘が貰つたよ。)と振切つてお了ひなすつた。

あの方だから厭ひはしない、厭ひはしませんけれどもね、柳橋の看板ぬし、一軒の世帯持が、

辻に立つ眞似までして、嫌、嫌はれて了ひました、口惜い。」

とヒイと泣くと、胸をしめて堪へた、が、面に袖して、俯伏しに身を疊に投げた、溢る、涙は、其の白銀の線と成つて、紅梅に颯と散り、酒にも亂れて惰る、姿は、帯の縫なる白羽の矢、一筋、脊筋をグサと貫いて、薄紅なりし結文、血の垂る、かと颯と濃い。

廉三郎は片膝立てて、ト其の背に手を掛けようとした時であつた、身動に、ひらりと揺ぐ、帯の矢が貫きさうで、掌を開いて、ハツと退いた。

「返す。劔さん、半さんに私が返す。」

聞くと、洗はれたる玉の如き、ぬれ髪の面を上げて、屹と視て、

「え、返して下さい、私の身體を、鼓を戻して下さいましとも。貴方、男だわね。」

「今更、然う、と申憎いが、確に男だ。」

「返すと言ひましたね、男が、」

と、まくれた袖を手首に引いて、端然として、

「ぢや、何うぞ、證據を下さいまし、後生ですから。」

證據と言ふ……證據とか。

證據は何うする。

「あの、一筆。」

「何、一筆。」

「え、無理に私を、劔を無理に貰つたのを、君に返す、と半さんに……」

「無理に、」

と思はず氣色ばんだが、

「無理にでも構はん、——が、しかし、一筆には及ぶまい。口で可い、ね、口で可からう。私も口で貰つたんだ。」

「それは、貴方の御勝手ですもの。」

「可し、では書かう。が、それは、直接に半之助に手渡しをするので可からう。……せめて、其

だけにさしておくれ。」

黙つて頭を掉るのを視た。

「如何に、何でも、一札して、藝妓のお前に手渡しするのは、餘りと言へば、屈辱だ。」と、堪へ

に堪へた先刻からの、あらゆる仕向けが、一時に、むら／＼と胸に湧上る。

「何うせ、男はすたつておぢやありませんか。一筆おくんなさる位なら、直接にだつて、私へだ

つて、同じことぢやありませんか。未練らしい。だから貴方は、煮切らない、ふやけた御飯粒だ

と言ふんですよ。あらひ流しに、にちやくぐづく、此のくらの鹿末にされりや、やがて最う、
蛸蟪だよ。」

「弔！」

「殺到なすつた。」

と、椀の蓋を衝と大杯。

「面白い。貴方も飲んで、男らしく、……打つかい、蹴るかい！」

「む……」

「一寸、私は弔ですよ、貴方の祖父さんの。打てますか、蹴れますか。一寸、私は鼓ですよ、貴
方の母さんの、叔母さんの、従姉妹御たちの。」

廉三郎は岸破と其處へ手を支いて、

「詫びます、祖父さんに、母に、叔母に、従姉妹に、天に、地に、遙に詫びます。就中、父母、
恚うはお生みなさるまい。廉三郎心得違ひをいたしました。あゝ、此處に、誰か、唯一人が欲し
い。」

と、はらくと不覺の涙。

「……歸る！何にも言はずに歸してくれ。」

衝と外套を引抱へる。

「不可ません。」

唯、屏風を楯に袖を開いた、帯に緋鹿子亂れても、矢一筋、羽白く、すつきりと胸を張り、鳥
田の丈長キリ、と立つて、支膝縦に凜と成る。廉三郎は蒼く成つた。

「歸しません。」

「御免なさいよ。」

と婀娜な聲して、すつと入つたのはお梶である。其の襟つきの綺お召、客へ禮儀の一つ紋、○
に千鳥の黒縮緬の羽織を被て、手に硯箱を捧げて居た。

「旦那、一筆お認めなさいまし。……私が悪いやうにはいたしません。……弔さん、其の半之助
様とおつしやる方は、まだ春柳亭に在らつしやるかい。あゝ、然うかい。」

半紙にかいたを、

「私は些とも讀めないから。」

弔に見せて、そと頂き、軽く折つて帯に挟むと、

「一寸お預り申しますよ……何事もまかせてお置きなさいまし。」
座を立つと、やがて、式臺で女中の聲、

「主婦さん、よろしいんでございますか。」

「何、お前、政府の御規則を破るほかに、何だつて出来ぬことがあるものかね。」

磨格子が、からりと音して、

「おや、雪に成つたよ、風が止んだと思つたら。もう道が白い。お島や、番傘をおくれな。待ちな、歸りには、お能役者と相合傘だ、蛇目傘の方にしようかね。」

十七

「田舎づくりの籠花活に、

すつぷり濡れし水の色、

たつたを活けし樂さは、

日頃の憂さも何處へやら……」

座敷が替つて、二階の八疊に、絹夜具の置炬燵して、お梶と、さしにあたりながら、蝶足の取膳で、廉三郎は、しのび音の、此の爪弾を、涙ぐみつゝ、身に染みて聞いて居る。

嘗て聞く、此のお梶が、前に新橋に左棧を取つて、嬌名南北を壓した頃、名古屋か大阪の何某と云ふ大盡が、築地邊の或待合に来て、酌人大勢の一座に、是非とてお梶を所望した事がある。

其の時は千貝と云つたが、大幣の引手あまたで、振切れない袖を、其の座に連ぬる事が出来なかつたを、客に對して、其の待合が、看板に權威の無いのを見透かれるのを苦しがつて、客の酔うたるを奇貨として、替玉を座に請じて見せた。

「これが、名に響いた千貝かい。」

「はあ、」

「違ふやうだぜ。」

「旦那は酔つて在らつしやる。」

他の藝者が待合に對して跋を合せたので、花は散らさず市は榮えた。が、身替りの犠牲に成つた婦のみじめさ。あれが、と出入りに、目引き、袖引き、其の替玉をさげしまるゝ、三月半年の恥辱に堪へず。然るにても後には二代目の千貝と成つて、全盛世を驚かしたほどの婦だから、袖を面に蔽ひながら、千貝の家に駈込んで、泣いて苦衷を訴へた。

「姉さん、何うぞ、貴女のお名を私に譲つて下さいまし。」

と膝に縫る、背を撫でて、千貝のお梶は快く、あい、と言つた。爾時、手すさみに、膝に三味線を取つて、爪弾をして居たのが、田舎住居の、此の小唄であつた。

——いまでも、爪弾である。夜も早や一時半頃の、世を憚つた、しのび音は、律ある閨のさゝめ